

八犬伝関連雑文 4

●たまに見ると自分で書いたくせに参考になるところがあったりするのでリンクを貼っておく。

[八犬伝関連雑文 1 へ](#)

[八犬伝関連雑文 2 へ](#)

[八犬伝関連雑文 3 へ](#)

[八犬伝・画像を読むへ](#)

[八犬伝画像分析へ](#)

2009年以前の雑文等は信多氏の『馬琴の大夢 里見八犬伝の世界』を読んだ2005年1月から始まっている。今だに同じことを書いていたり、全く考えが変わったところもあるがよしとしよう。一番変わったのが、八房は玉梓の後身とすることを素直に信じる矛盾に気付いて以後、当雑文では八房は定包の後身とすることを前提としている。

●六三之文車 [63.pdf](#)

もう一人の玉梓が出てくる。八犬伝の玉梓は唯一無二の特別な存在ではなかったのだ。二人の共通項として玉梓というのは怨霊になる名前なのだとわかると、「合璧集」に書とあらば、玉づさともいふの項目に怨みがあるので、玉梓は玉章が名詮自性であることが分かる。玉梓は玉章なので、手紙が関係しているところには玉梓がいるということになる。

例えば、ここにも玉梓はいる。役の行者の示現などではないのだ。

手束は束が紙であるから手紙、玉章である。

ラストは三七全伝に通じるものがある。

出版順は、

三七（文化五年 1808年）

八犬伝（文化十一年 1814年）

六三（文政四年 1821年）

●手束一夕顔の系譜—[pdf](#)

10/10版はスペースの無駄なので削除した。

●「上総の太夫」という名札 2013/01/11版 [pdf](#)

●名詮自性 2013/04/22版 [pdf](#)

●名詮自性基本表

姓名によりて趣向を立、趣向によりて姓名を付たる（『玄同放言』詰金聖歎）

| | 一 | 二 | 三 | 四 | 五 | 六 | 七 | 八 | 九 | 十 | 十一 | 十二 |
|-----|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|----|----|
| 十二支 | 子 | 丑 | 寅 | 卯 | 辰 | 巳 | 午 | 未 | 申 | 酉 | 戌 | 亥 |
| 十干 | 甲 | 乙 | 丙 | 丁 | 戊 | 己 | 庚 | 辛 | 壬 | 癸 | | |
| 五行 | 木 | | 火 | | 土 | | 金 | | 水 | | | |
| 八行 | 仁 | 義 | 礼 | 智 | 忠 | 信 | 孝 | 悌 | 仁 | 義 | | |

一作は木作。木は音の「もく」が黙で黒犬。番匠は木工で匠作・番作父子は黒犬。作も番匠である。木工作も黒犬。金碗は白犬で、とてつもなく大雑把に言えば、八犬伝は黒白斑の犬が白犬になる話といえる。

三郎は虎男、六郎は蛇男、十一郎は犬男。七郎は馬と関係（第二回）、八郎は子供ができた濃菘を見捨てて逃げ出した辛い（ひどい）男である。現・八郎は故に信（まこと）の玉を持っていて、悌の小文吾と関係。信乃は庚申と関係。礼の角太郎は化け猫（虎）と関係等々。だが、これだけで済むものではない。八郎が未ではおかしいと言うことで思い出せば、龍の八番目の子供は獅子なのだから、八は龍で考えるべきである。

六は蛇であるが「歳時記」に犬殺 狗樹下にありて梨子墮中るときは忽死す、故に名つく、とある。六は、ろくでなし＝六で梨、六は梨だから犬殺して墓六、宮六、新六郎など犬士を殺しにかかってくる。奈四郎はそのまま梨男である。犬殺しという趣向によって六ネームは付けられているということ。

『暗号解説』上 p 270

エニグマを攻撃するにあたってレイエフスキがとった戦略は、「反復は機密保護の敵」という事実を的を絞って徹底的に攻め抜くことだった。反復はパターンにつながり、暗号解読者はパターンを手がかりにして暗号を破る。

墓六、宮六、新六郎など六ネームの反復は、犬殺しというパターンにつながっていたのである。逆に稗史七法則はパターンの反復になっているので前身後身が分かる。

反復は図像を読む際にも鍵となっている。

○置き換える

定包。定（てい）＝悌＝八、包＝房、八房。

玉梓。玉章⇒玉＝月、章＝正。反して正月。濱路の本名。濱と海士が音通で路と子が音通で海士の子。濱と

手→田⇒庵

束→塚⇒女郎花

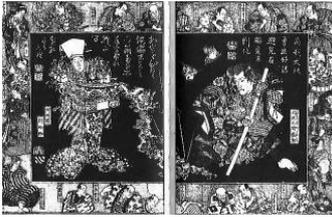
↓

庵の女郎花

手束がいたのが拈華寺ではなく拈華庵というのにも意味がある。

○分解、転倒、寄合い。

錠庵。錠を分解して金定、転倒して定金、つまり定包。庵とあれば山下（合璧集）。二つを転倒して山下定包。



兎が出てきている。兎と玉の関係でも良いし、卯と智の関係でも良いだろう。

苗字の五行では犬江（水）、犬川（水）、犬村（木）、犬坂（土）、犬山（土）、犬飼、飼＝貝（水）、犬塚（土）、犬田（土）。

犬塚と犬川では土剋水で、信乃が莊助より立場が有利。

犬飼と犬村は水生木であり、現八が角太郎を再生させる役になっている。

苗字ではない五行では、礼と智が火となっていて、犬村、犬坂の二人が管領戦で八百八人、風火作戦を行う。

一作は木作で、木＝黙だから黒犬となる。

道節を持った村雨の切先から龍が出ている。犬山は土性で土剋水、火遁の道節が村雨を持っても水剋火の関係で相性が悪い等々。

早稲田版「便船集」は「よ～な」が欠なので、国文学研究資料館版で補える。

●前身、後身表

五十子—犬江親兵衛—安房

岩熊鈍平—犬川莊助—安房

蟹崎輝武—犬村大角—安房

安王—犬坂毛野—結城

神余光弘—犬山道節—安房

天津兵内—犬飼現八—安房

春王—犬塚信乃—結城

那古七郎—犬田小文吾—安房

山下定包—八房—安房

金碗八郎—伏姫—安房

玉梓—濱路—安房

妻立戸五郎—網干左母二郎—安房

杉木朴平—山林房八—安房

洲崎無垢三—ぬい—安房

●図像を読む基礎

アトリビュート（持物）は八犬伝の図像でも成り立つ。琴、墨染桜、仰け反っている姿は玉梓を表す。琴は桐から霧、木目が玉梓を表す。玉章は当然玉梓である。梅も怨霊＝玉梓である。扇は定包である。硯は定包の市松が薄いことから薄墨、連歌というヒントになる。六枚目の黒駒は「磨墨」で、一枚目の硯と関連付けされている。図像は一枚だけで読むものではないということだ。

牀に立たる筑紫琴を、横ざまに倒しかけて①161 というのは、四枚目の挿絵にない琴によって玉梓の存在を表す文中の画である。

送り手と受け手のコードブックとしての付合集がなければ口絵・挿絵の画中の文は「読む」ことができない。



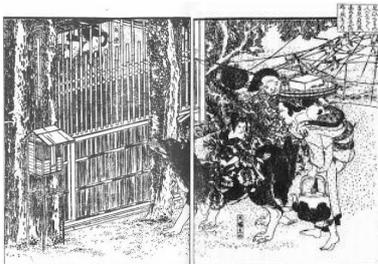
三枚目。八房に生まれ変っている「はず」の玉梓の怨霊が狸を八房のところに連れてくる不思議。玉梓と八房は別個に存在しているということだ。このことの対は甲斐で濱路が濱路(姫)を操ったことで、濱路が濱路に転生したということにはなっていない。

五枚目の「一言」は時間的には八枚目の前後に入る。



玉梓から正月（濱路）への輪廻転生。

肇輯口絵以降は、口絵から派生した玉梓に関する一連の図像であるから、全体で解釈するものである。



「何となる子の音に騒ぐ、雀色時ならねども、見るめは暗き孫廂」①106 が画中の文であるように、見えているままの情景を読むのが画中の文ではない。



扇：

「類船集」

端居の袖、閨の内、蚊の声、侘る、別れし中、手折たかほ、垂木、名のらぬゆくえ、舞、網、左義長、年玉、月、

能、母をしたふ、平家の舟、斑女、饞別、宇治の芝、炭火、蠅、護摩、謡、三の口、渡天、倂のぞく、いきの松原、天の川。

「合璧集」

をる、さす、妻、ひろくる、月にたとふる、閨、をく、秋風、たまふ、絵、骨、女車。

「毛吹草」

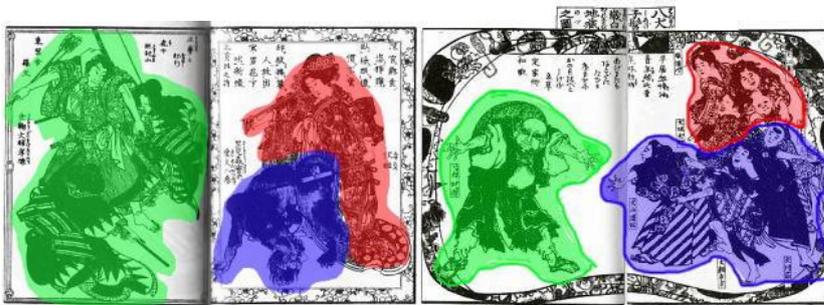
網、左義長、月、芝、鎧の立物、年玉、護摩。

「和漢三才図会」

神功皇后三漢征伐時蝙蝠羽始作扇。

かはほりとアラハ扇（合）なので、額縁の蝙蝠は扇に注目させるためのものだったと分かる。

●図像的には六男二女ではなく四男四女。



帯の内、つまり胎内で、胎内く

ぐりのモチーフはすでにある。



持物（アトリビュート）



番作：庖丁⇒ほうてい⇒包定⇒定包

手束：手紙⇒玉章⇒玉梓

手束は女郎花の擬人像である。

2015/03/24

●名詮自性ネタがあったのだがインフルのA型になって高熱が出て寝ているうちに忘れてしまった。すごいことでもあったようだし、どうでもいいようなことであつたかもしれない。

ひさしぶりに某八犬伝サイトの八犬伝関連リンクをたどってみたら、あまりに寒いのでインフルがぶり返すかと思った。はあ？リンク切れ？…はあ？八犬伝なんて知らないしい、みたいなサイトになってたり……………咳きが止らん。八犬伝は遊びの書であるとは常々言っているが、遊び方を知らないで遊びにもならないらしい。大体ネットで新しい名詮自性の解なんて出てこないし、全然わくわくしないのである。ああ、思っただけでも書かないようなことを書いてしまうのもインフルのせいかも知れん。

2015/02/24



●すんません。安くなっていたので、つい買ってしまいました。塩ビのようなものを想像していたので重くて（笑）びっくり。伏姫が第二弾ってことらしかったけど、信乃だけで終わったみたい。はっきり言って伏姫じゃ簪やらで大変だし、そんなことで信乃と同じ値段で発売はできないだろうと思っていた。せめて濱路で買ってほしかったかな。

新八犬伝がなかったら、おそらく一生八犬伝は読まなかったんだろうな、と思う。

2015/02/04

●八犬伝で繰り返される庚申も金気であるということ。金碗は金気の要素が基本となっている。

金畜の犬士は犬殺しの巨田新六郎助友に攻められた時に、火剋金により突然の猛火によって最大の危機を迎えるが、村雨からほとぼしる水気で水剋火となり難を逃れる。

2015/02/03

●犬は金畜であるという基本。

2015/01/30

●薬缶に意味はあるのか？



2015/01/26



これも節婦竹の如し  のように思うが、濱路は正月であることを考えれば竹と虎である。

濱路の左母二郎に対する以外な猛々しさは虎であるが故である。濱路が虎であるなら沼蘭も虎になる。竹は武で虎。節婦は虎である。箆の大刀自も竹の服の真っ直ぐな人と考えていたが、竹冠の人であるから虎である。だから箆の大刀自は猛々しい婆さんなのである。

2015/01/22

●兵馬三連車っていうのは、曳いてる馬を射殺してしまうなんてことはないのだろうか？

2015/01/17

●福寿・牡丹（富貴草）

玉梓・梅花氷裂（梅は怨霊）

うわ代・雲。鶴。

嗟峨二郎・卍。

2015/01/15

●きうやうし

なんとか漢字と振り仮名で「きうやう子」とは読めても漢字にならないと意味が分からないので苦労したが「急養子（末期養子）だ」と分かった。

●草書くずし字字典なんてものより、変体仮名文字一覧なんてのをネットで拾ってきたほうがズッと役立つ。

2015/01/14

●馬琴の作品は単純な勧善懲悪だと思われているけど、底にあるのは善悪不二である。

2015/01/12

●「六三」では富屋の主管葦（よし）七と同じく主管蘆（あし）六が出てくる。葦と蘆は同じものなので善悪は単に裏表であること、善悪不二を示している。

では六と七はなにか。八犬伝で六は「戮」で殺すという意味があった。六は梨、で犬殺しであるなんて例もあった。六は悪しだから蘆六で良い。八犬伝の七郎は善人であるから葦七で良い。

六と七。今まで六は十二支の蛇、七は馬と考えていたのは、ちょっと浅墓愚介であった。

七という数字は、仏教では死後七日ごとに供養することから、聖なる数字とされたという。また「六（ろく）」は「殺人」「殺傷」、「六字（ろくじ）」は「死ぬこと」を意味する。これは「南無阿弥陀仏」が六文字であるためらしい。



これなどは房八が死ぬ人であることが明らかすぎる。

七ネームというのはなにかひっかかっていたが、そういうことだろう。

2015/1/11

●『六三之文車』を読んできた。[63.pdf へのリンク](#)

これにも玉梓が出てくるので、玉梓は玉章で考えると良いのかと分かった。読んだのは早稲田版。自分が読めなかったり、状態が悪くて読めなかったりする箇所がままあるが、とにかく読んでみた。

こうして読んでみると、八犬伝は活字みたいに読みやすいくずし字で書いてあるのがよ〜くわかる。オマケに漢字には全部振り仮名がふってある。だから八犬伝が読めたからといって他の本がスラスラ読めるかと言うとそうはいかないのでがっかりする。

八犬伝の漢字に全部振り仮名といっても、十条には振り仮名がないのが奇異に映る。つまり「じゅうじょう」と限定して読む必要がないので「とうじょう＝東条」とも読める。翻刻されていないものを読む必要がそんなところにもある。

2014/12/20

●亀＝蛇とすれば亀篠は犬殺しの蛇ということになる。墓六が墓で犬殺しならば墓田素藤も犬殺しの墓である。なぜ蛙が犬殺しなのか？

2014/12/18

●蛇を蛇蝸の「だ」と小難しく考えたが、音は「じゃ」なのだから「邪」でいいのだ。亀を蛇とすれば、亀もまた邪な存在なのである。亀篠が邪悪なものこれで説明がつく。

●鬢そけぬ鯉。濱路の口絵のような挿絵と口絵の沼蘭の鬢がそけている意味が鯉である。

口絵ではだけている沼蘭の乳は馬琴の稿本では出ていないが「乳腫物」が鯉である。こういう場合馬琴の指示なのか悩むところだが、乳には犬、呑む、がある。沼蘭が玉を呑みこんでしまったのは本文の通り。沼蘭と言う名前に鯉という名詮自性はないが、図像を見れば鯉とわかる。画中の文である。

八犬伝の世界では鯉は胙である。玉章は恋なので、玉梓は鯉として最初の胙である。鯉の濱路、沼蘭、雛衣が玉梓の系譜の胙として死んでいく。

鯉でも恋でもない手束は手紙=玉章ということで玉梓なのである。

玉梓—八郎・義実

雛衣—現八・角太郎



この挿絵については多くを語ってきたので参照してほしいが、これを恋と

いうキーワードで見ると、『毛吹草』連歌恋之詞に垣間見、思くま、がある。おもひくまの、がこの絵の表向きのタイトルであるが、恋が本当のタイトルである。濱路は信乃を見ているが信乃はおそらく薬缶を持った女の人を見ていて、濱路の片思いである。

2014/12/17

●亀は蛇の頭に龍の首であるから（和漢三才）、亀を考える時は蛇と同じに考えたほうがいいのかもしれない。ならば蛇と犬はどう対立するのだろうか？

●雪 犬の足跡 梅の花

雪、犬、梅。この三つはセットで考えるべきかも。

●素藤の本名が但鳥で音読みすれば丹頂になり、丹頂鶴が想起できるので犬と鶴が対立するという想定はありえる。

又七年大毛落和毛生或白如雪或黒如漆。（三才図会）

鶴が雪のように白いという点が犬殺しなのだろうか。黒白が善悪なので素藤の行動をみれば善の部分もあったのである。白=犬殺し、黒=黙=木工、無垢=黒犬とすれば金碗=白犬の大輔は犬殺しであり、八房と伏姫（仮死）を殺してしまう意味が分かる。

●なぜ雪が犬殺しなのか分かった。

雪 六花（むつのはな）「歳時記」。

六で梨が犬殺しで、梨の花は雪のように白い。雪は犬殺しの花なのである。雪にも犬の伯母と犬殺しの花という二つの意味があったのである。亀篠は信乃の伯母であり、犬殺しでもある。額蔵の母は雪中で死ぬのである。歳時記がなくても図像から十分読めるということになる。でも梨が犬殺しとは何もなくは分からないので、基本は辞書類ということになる。

夏行と言う名前も夏雪で、犬殺しなのだが夏の雪ということでカッとしてすぐに溶けてしまうのである。

道松の道節も犬同士で対立することになる。

●信濃梨

信濃はのちの信乃であるから、信乃は梨である。信乃は自分が犬のくせに犬殺しなのである。番作が死んだのも、与四郎を殺し、古那屋で房八とぬい、八房と犬が死んだのも元はといえば信乃が原因である。



与四郎と奈四郎という名前の類似も両者を結びつけているだろう。奈四郎＝梨男＝犬殺しを犬殺しの信乃が殺す。

図像的にはこの挿絵二枚の共通項が番作と道節が黒の着物、信乃の伯母である亀篠と同じように姨内が現場を見ている。これは雪は犬の伯母というところからきている。



犬と雪と亀と笹。雪と笹は、笹の雪という紋所で、笹に積もった雪を図案化したもの。犬と亀と笹では信乃と亀篠になる。つまり、犬塚信乃、濱路（犬山正月）、犬川額蔵は亀篠との取り合わせだったのだ。雪が伯母の亀篠とイコールとすれば、雪というのは犬殺しということになる。それで犬川額蔵の母は雪中で死ぬことになる。

墓六は月と蝦蟇の取り合わせで濱路と関係していて、六が犬殺しである。この表紙にしてもちょっと見では犬と吉祥紋の取り合わせであろうが、笹と亀の別の意味が分かれば、鶴にも別の意味があるはずである。

その前に気付いたのが、犬対雪・梅・鶴・松・笹・亀という構図になっている。犬は八匹だから当然八犬士である。

犬対梅であるなら、信乃に対して梅の着物の濱路ということになる。ただ雪は全面にあるので犬との対立だけではない。

四輯口絵の小文吾対房八も再考が必要だ。小文吾の額縁は梅、房八は雪である。梅と雪が犬と対立するのなら、ぬいを死なせてしまったのは小文吾と房八で、その通りである。

つまり八犬伝における梅は菅家、菅原道真の怨霊と神という二つの側面があるということだ。怨霊を悪、神を善とするならば、梅は善と悪を表していることになる。



まさにこの挿絵が菅家であり、濱路は梅と黒白、信乃は黒白である。黒白=あやめ=善悪であるから、この場面の信乃の言い分には善悪があり、濱路の言い分にも善悪があるということを画中の文として表している。八犬士には黒い牡丹の痣があり、馬琴は善だけ、悪だけの人間はいないと言っているのだ。馬琴は犬士を仁義八行のバケモノとしては描いていないのである。

2014/12/13

●な～んか、八犬士が里見家を再興する物語なんて読むと、ほんとに原作読んだ？読んだの？と聞きたくなる。

成氏朝臣（中略）一国平均の功業を称賛し、室町將軍へ聞えあげて、則里見義実を、安房の国主にまうしなし、剽治部少輔に補せらるる（①159）

これは八犬士が生まれるずっと前のことで、八犬士がいなくても里見家はとっくに再興しているのだ。

八犬士がしたことといえば管領に里見家への憎しみをかきたてたことだけであり、里見家の役にたったのは再興ではなく防衛である。おそらく八犬伝は原作を離れ、二次創作ものが原作だと思われるに違いない。それか、もの凄く改変した二次創作ものが、原作を忠実に描いていると思ってでもいるのであろう。

例えば、自分たち新八犬伝育ちの世代は、話をしていると玉梓の怨霊が最後まで出ずっぱりだと思っていたりする人がけっこういたりする。あのジュサブロウ（現、寿三郎）の人形のインパクトが強すぎて、八犬伝=玉梓の怨霊という刷り込みが出来てしまっているのだ。そして、それが八犬伝だと思っている。濱路が死なない八犬伝をみたあとに、濱路が死ぬ原作を読んだとき、原作のほうにニセモノ感を覚えたものだ。映像やマンガは刷り込まれやすいので、それらで八犬伝を語ろうとすると明後日の方角どころか、どこを見てるのとなってしまうだろう。

2014/12/10

●政木大全はなぜ準犬士か。

外（と）山とあれば正木であるから。

正木=政木、外山は戸山=犬山。犬苗字ではない犬山であるから政木大全は準犬士である。

葎家二十戸（けん）「弓張月」大系 下 p190

戸山（とやま）という音に犬山という意味があるのだから、富山はトミサンではなくトヤマでなければならない。

2014/12/09

●額蔵

額＝犬の子、蔵＝狗の真似。狗は狗党というように良い意味での犬ではない。つまり額蔵とは悪い狗の真似をしている犬の子という意味になる。墓六の下男というのが悪い狗ということで、表面だけ従順にしていることだろう。

糠助

糠＝ぬか＝額＝犬の子。犬の子（信乃）を助ける人。糠助の行動をみれば、まさに犬の子を助ける名詮自性である。

2014/12/05

●八房が牡丹の花という名前ならば、菰の中の牡丹という図像が八房に重なる。

定包が牡丹というのは、牡丹の別名が富貴草ということに依るだろう。犬士の牡丹の痣は聖痕などではなく、富貴歡樂の悪の象徴である。

2014/12/04

●獅子＝牡丹とする。四+四は八＝牡丹。

「石橋」牡丹芳＝牡丹の花。芳＝房

牡丹＝八。芳＝房。

八房は牡丹の花という名詮自性によって牡丹の斑があるのである。八郎は獅子で牡丹男。世四郎も獅子で牡丹男。現・八郎の現八の頬に牡丹の痣があるのは名前が八郎で牡丹男であるからだ。世四郎はよしろう＝夜白で牡丹でもある。

定包。定（てい）＝梯＝八、包＝房、八房。肇輯口絵の定包が牡丹柄の着物であるのも名前由来である。「八房の梅」と言表化し、繰り返されることによって八房は梅とのみ関連付けられていると思わされて、八房が牡丹であることには思いもよらないのである。一番初めに八房は獅子であるとした高田説はまさに慧眼である。



獅子・牡丹・八郎・かたみ。

牡丹には ごがつ おもひ かたみ（「連歌付合の事」）

八郎の子供である後の、大のかたみも獅子の子供の獅子であった。

2014/11/25

●富山

馬琴が「とやま」と読んでいるのに、わざわざ地元の読み方は「とみさん」であるとして「とみさん」と読んでしまう。これは馬琴の時代にもあったらしく、とみさんと読まない八犬伝は間違っていると非難する人がいたらしい。

戸山の妙真は富山と普通であるというのは本文に書かれている。戸は「とみ」ではなく「けん」なのである。けんは犬であるから戸山は犬山になるが「とみ」の読み方では「犬」は出てこない。鉄砲にしても富山にしても馬琴は知っていてやっているのである。馬琴は歴史を知らないなどと賢しらに言うのは「おこのしれもの」なのだ。

2014/10/31

●八犬伝の基本は義実、八郎、定包、玉梓の四人である。定包は八房に生まれ変わった分、のちの物語の本筋からは離れてしまう。

番作＝定包、手束＝玉梓、与四郎（犬）＝八郎、信乃＝義実。

雛衣＝恋＝玉梓、現八＝八郎、角太郎＝義実、偽一角＝定包（人啖い馬）。

姥雪世四郎＝世（四）＋四郎＝八郎、（信乃、現八、小文吾）＝義実

2014/08/19

●伏（ブク）仏法で人を服従させる。「降伏（ごうぶく）・折伏（しゃくぶく）・調伏」

伏姫にしても、馬琴が三伏やら人＋犬だと言うとそれ以上は思考停止である。伏が「仏法で人を服従させる」という意味ならば八房は人ではないが、それもまた伏姫の名詮自性というものである。

2014/08/17

●すごい久し振りに名詮自性を考えてみた。

角太郎の継母で牙二郎を産んだ窓井である。窓井は惑いと思ってしまうが、類船集で窓をみると外山（とやま）がある。外山＝とやま＝富山で、井はいのであるから犬で、窓井とは富山の犬という名前になる。庚申山篇は伏姫と雛衣の類似ばかり語られるが、窓井こそが犬士に対する猫の牙二郎を産んだのだから犬士の母伏姫と対になる人物なのである。化け猫＝窓井＝牙二郎、八房＝伏姫＝犬士という隠れた対になっているのである。

2014/05/30

●持物（アトリビュート）



琴は玉梓の持物なのだから、額蔵が羽織る半纏の琴の形をした嘘の袖は玉梓がいることを示している。鶯の袖は玉梓の着物の模様でもある。

2014/05/23

筆鞆口絵の玉梓の図像は「嘘」を擬人化したもの。姫ではない玉梓が姫の格好をしているのも、鶯姫＝嘘姫だから

で、琴を持っているのは鶯が琴弾鳥だから。

2014/04/26

●2012/01/03 にこんなことを書いた。

●二輯口絵の浜路図にある鳥。



浜路の死ぬ運命から死出田長、つまりホトトギスであろうと最初に考えた。次に八犬伝は七夕と関係があるからカササギだろうと考え自分なりに決定していた。が、弓張月下p263の記事でまたホトトギスに変えた。

白峰の山中に、杜鵑の玉章といふものあり。是杜鵑の致すところ、その形玉章に似たり。よりにて名づく。

本稿では浜路を玉梓の後身としているので以てこいである。月は玉だから、杜鵑の玉までは図像で読める。そして浜路の本名である正月、月と額縁の羊歯で表される。軒（犬）の月影で犬と関係があること示されている。

と以前考えたが、類船集で簡単に解ける。



「はつかしのもり」を類船集で見れば「ほととぎす」がある。郭公（ほととぎす）の異名に夜床鳥、冥途の鳥、恋し鳥、百夜鳥等があり、付合語に村雨がある。

2014/04/08

●左母二郎のさもじが魚と分らないと、肴の付合である舞、小歌、小謡、正月、祝言も意味がない。

左母二郎の前身は妻立戸五郎とみているが、類船集の戸の項に盗人、刀がある。

2014/04/07

●手束は野の花①267だから、花の文字がある着物は手束のものである。野の花とは何か？類船集に萩、薄、堇、菊がある。信乃の名が篠薄と関連付けられていることから、手束は薄である。萩はどうか。その異名を鹿鳴草、魂見草と言

う。珠を手にとることが出来ずに終わった手束は玉見であった。

2014/04/02

●戸隠山は犬隠山。伏姫、八房、親兵衛が隠された富山は犬山だが、犬隠山でもある。

●節用集の順番だと、

犬山道節、犬塚信濃、犬田豊後、犬坂上野、犬飼源八、犬川莊助、犬江新兵衛、犬村大学となる。単純に頭から仁義礼智忠信孝悌を割り振っていったのではないことは分かる。

大学が礼記から礼に、道節が忠節から忠に当てられたと推測するのは簡単で、あとの六人にもなんらかの理由があるはずである。

分かってきた。

犬塚信濃。

濃を、のう＝能とすると「一番」になる。信乃がなぜ一番初めに現われる犬士でなければならないのか説明がつく。信濃には姥捨て山の話があり、それは孝行息子の話である。厳密に「しの」だけではなく、「東雲」「忍ぶ」の寄合が信乃に使われている。このアバウトさを認めなかったら八犬伝の言語空間は成り立たない。文殊の殊も珠も音が同じなら同じなので、漢字が違うなどと言ったらアウトである。

濃＝恋が濱路の造型に使われている。

みそめし人

いはぬなけき

やつるる姿

人知れぬ思ひ

かいまみし倂

猫鳴

である。恋のある項目に

病

淵

覚（さむる）

狂人

死（しぬる）

乱（みだるる）

白山（加賀）

があり、こちらは雛衣＝こい、に使われている。なぜ加賀の白山から玉がきたのか疑問だったが、雛衣が飲み込む玉だったということだ。

上野から下野への変更は、下野にある「日光山」がキーになっているだろう。

男に個性がないのもこんなところからだろうか。

2014/03/26

●赤文字だけで「月夜の犬は」と読んでみたが、付合で解釈すると何か濃萩のことを言っているのではないかと思える言葉が浮かんできた。

碓子尔春→夕顔の宿に

忍光八→独り寝

難波江乃→海士

始垂母→は誰も

辛之河尔→辛い。生れた子

加久尔→

世波→夜は

2014/03/25

●「類船集」だけでも基本の犬 鹿狩、桜、蓼、籠城、虎、猿、弓の稽古、盗人、乞食、雪、山伏、鎌倉、放下、乳、玉章に、苗字の下の部分の付合で犬士のエピソードの大まかな設定は出来ている。八犬士は既定(書言字考節用集)なのだが、「本貫終始を審」①5にしない彼らに肉付けをするためのイメージの連鎖、これが八犬伝の俳諧的手法である。

| | |
|-------|----------------------------|
| 犬江、絵 | 釣船、なこの海 比丘尼、縁起 |
| 犬川、皮 | 背中、はまる、奉行 毛 |
| 犬村 | 時雨、弓、年寄、人の心 |
| 犬坂 嵯峨 | 足柄、兔、木葉 女郎花、僧正遍正、嵐山、旅籠屋、狂言 |
| 犬山 | 雪、隠家、木樵、罪障、疱瘡 |
| 犬飼、貝 | 祭 |
| 犬塚 | 冬野の薄、深草、筆、女郎花、隅田川 |
| 犬田 | 虫、鹿、五月雨 |

毛野に僧正遍正があるのは興味深い。僧正遍正といえば、

あまつかぜ雲のかよひち吹きとちよ乙女のすがたしばしとどめむ

であろう。毛野は旦開野として乙女の姿をしばしとどめていたからだ。

船虫はなぜ小文吾に関わり続けるのか？犬田小文吾に船虫は付き物なのである。

親兵衛の話の前に異風譚が長々と語られるのも、寅童子の縁起譚としての形態をとっているからだろう。

●濱路

濱と海士は音通というよりも、濱とあれば海士だから、路=子で濱路は海士の子なのだ。

2014/03/24

●鳩の戒

《もと、門ごとに巡って熊野の本宮・新宮の事を語っては、鳩の飼料と称して人々から金銭をだまし取ったところか

ら》口先で人をだまし、金銭などを詐取する者。詐欺師。鳩の飼い。「何をか申すことぞ。うさんなる一め」〈浮・一代男・四〉

鳩のかい（類）：似せ物、虚言（そらごと）

2014/03/23

●安西三郎大夫景連

安西式部大輔勝峯 里見代々記

安西伊予守景春 房総軍記

安西式部景吉 房総里見軍記

三郎と連が馬琴の創作だから、その意図がみえる。西は白虎、三は虎、連は虎と音通なので虎虎虎の景連は里見を滅亡寸前まで追い込んだ強敵であった。

●手束＝田（庵—類）、塚（女郎花—類）。庵の女郎花。



鹿の子模様の花



露を含める野の花 (①267)

女郎花：かよわき姿（俳諧雅楽抄）

女郎花：花の姿（合璧集）



絵の畳は浮世ござといって市松に染めたござです。引手茶屋の上縁に使われています。（三谷一馬『江戸吉原図聚』p393）

●なびき 遊女の名『俚言集覧』

2014/03/21

●第三輯口絵に共通する水の額縁の意味が分かった。

類船集の水の項にある「科人責る」である。



額縁は図像のタイトルまたは注目すべき事柄を表しているのではないか。下の信乃・濱路図の蝙蝠の額縁は信乃がもつ蝙蝠扇に注目しろというヒントであろう。こかしたる扇（源）によって輪廻を表していることが分かったし、その前の白い扇が黒くなっていく過程も挿絵にある。

肇輯口絵の大輔図の鉄輪は八房に対する「嫉妬」であり、「錫杖」は大輔の未来を表していた。

2014/03/20

●軒のつまに あはびの貝の片おもひ もも夜つられし 雪のしたくさ

軒のつまは言うまでもなく犬の妻で濱路のこと。深草の少将の説話からだが、合璧集の書（玉章）に「しちのはしがき」がある。「しちのはしがき」とは、男の恋の熱烈さ、また、恋の成りがたいことをいうから、八犬伝では濱路に片思いの簸上宮六のことになり、ここでも濱路が玉章と関連付けられている。簸上宮六は簸上蛇太夫の息子であるから、六は十二支の六番目の巳の蛇である。

この深草がどこにかかるかと言うと肇輯口絵の玉梓の着物の墨染桜である。

ふか草の 野への桜し 心あらば この春計は すみそめにさけ

墨染桜、深草で前後を結びつけている。図像は前後に行ったり来たりして解釈できるもので、一枚だけ取り上げて本文と齟齬しているというのは早計である。

2014/03/17

●岩熊鈍平の後身と推測する額蔵。



岩熊を「がんくま＝顔隈」と読めば、顔に隈があるのは額蔵である。糸巻きの中の大夏云々を語ったのは岩熊鈍平である①98。廻る因果は糸車というところ。顔の隈と襟のストライプは虎を表している。

鈍平の鈍をそのまま解釈しようとしたから鈍い振りをしている額蔵でもいいが、平が虎であると分かっている今なら、鈍は貪で「貪欲な虎」が鈍平の名詮自性である。定包に加担して神余光弘の乗馬に毒の餌をやったのは、書かれてはいないが馬奴の鈍平であろう。馬奴の奴と奴隷額蔵の奴に関連付けている。額蔵が奴隷にされたり、酷い責めに遭ったりするのも前身故というところだ。

荒芽山で再び道節と額蔵が対峙した部屋にあるのは糸車。前身が神余光弘の道節と前身が岩熊鈍平の額蔵が対立する

のである。

幼児の鹿の子の着物は、ちょうど下で使った玉梓の襟の鹿の子に対応しているし、額蔵の袖は琴の形をした嘘の袖で、玉梓が持つ琴と、玉梓の着物の鴛の袖文様に対応している。類船集で額蔵のがくを普通の楽でみると、蛙・万戸か軍・住吉がある。万戸か軍では幸若舞の『大織冠』に出てくる海女が「いせのあまのかつきあげつつ片思ひ匏の玉の輿にな乗りそ」が濱路のモデルになっている。要するに



これと



これは位置が逆転しているが同じ図像であるということ

だ。幼児になっているのだから転生したのだ。正月という名前も、月は玉であるといっているのだから、正玉⇒章玉かえて玉章と普通の玉梓となる。玉梓⇒正月（のちの濱路）というのは図像だけではない。

転生した人は前世を繰り返すという考えを持ちながら読むと、左母二郎に斬られた濱路の「恨めしきかな左母二郎」②136 という台詞に前にも見たようなと思う。処刑される前の「怨しきかな金碗八郎」①114 という玉梓である。濱路は玉梓の後身なのではないか？という疑問がわいてくる。



窓の内—玉章（類船集）



机の上の羽根も、ここに玉梓がいると分かれば鳥の羽根（合璧集）であったかと分かる。

濱路がもつ団扇も朝顔か夕顔か図像だけでは判断できない。そこで信乃がもつ扇に着目して合璧集を読んでいると、夕顔とアラハ こかしたる扇（源）とある。源だから源氏なのだろうと源氏の夕顔巻を読むと「しろき扇のいたうこがしたるを」とある。こかしたるって何？と思ったが、こがしたるである。それで信乃の扇が黒い理由もわかり、濱路の団扇も夕顔と分かる。図像は付合語で解釈できるという判断から連歌関係の本をあたると、連理秘抄に一、輪廻 薫物といふ句にこがると付、とある。机の脇で煙を出しているのは薫物とわかる。しろき扇のいたうこがしたると、薫物といふ句にこがるとくれば、この口絵のような挿絵は「輪廻」を表しているのだろうとわかる。木からはまたふかね

どもには、木からは木+辛で梓、またを反して玉、玉梓が隠されている。類船集の吹くに「そらうそ」があるから、この歌には捉えられた玉梓の尋問の場面の様子が書かれている。

図像に戻ると、簾が巻き上がっている。簾、巻くというと、鞞輯口絵伏姫・八房図の「却被捲簾人放出」がうかぶ。これは伏姫・八房を表していると言い難いもので解釈に苦しむが、挿絵をみると簾が巻き上がっている。つまり簾を巻くひとは信乃であり、追放されたのは「おくの間なる、二親めざまし給はなん。とくとく」②87と信乃の部屋から追い出された濱路である。

玉梓から正月へ名前の変換は分かった。ならば正月から濱路はどうか。夕顔巻にある「あまのこ」の音通「濱のこ」で、子は童子の「じ」と音通の路で、濱路としたのだろう。



天羅脱れず縛の、索にるる姫瓜や①108 なのだが縛められていない。



絵的に全く見映えのしない濱路を描く意味は「天羅脱れず縛め」を見せるためだ。



このような場面は本文にないが、実は上の場面の続きに「何となる子の音に騒ぐ、雀色時ならねども、見るめは暗き孫廂」①106とあるのがこの挿絵の本文である。類船集の玉章の項に犬、見初る人、窓の内、焼鮎がある。釣りのおじさんの意味が分からなかったが焼鮎を出すためだろう。このように玉梓と濱路は結びつけられているのである。それは何故か？前身と後身であるからだ。画中の文とはこういったことを指す。

八犬伝の図像でもアトリビュートという見方は成り立つ。

玉梓が持つ琴は木目が虎紋になっている。玉梓⇒正月で、正月は寅であるから玉梓⇒正月の濱路も虎である。琴は筑紫琴で、着物の鶯の袖紋と相まって太宰府天満宮→菅原道真→怨霊が導かれる。鹿の子模様からは鹿恋、遊女が導かれる。

2014/03/16

●玉梓は遊女であったとは何度も書いているが、この仕種でも遊女であったと推測できる。



『江戸遊女紀聞』 p 276、遊女の作法にこうある。

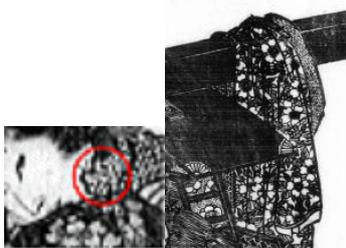
『色道大鏡』巻第四「寛文格」は、遊女の作法としての笑いのありようを記す。一 わらひの事（中略）いたくおかしくわらふべきには、口に袖を覆ひてわらふか（後略）

この玉梓の着物の文様を信多氏は「鶯の神」であり、「その口許を恥ずかしげに袖でおおう」（同氏「里見八犬伝の世界」 p 51）とされるが、文様は鶯の袖であり、玉梓はいたくおかしく笑っているのだと思う。定包は、有一日主君にまうすやう（中略）玉梓これを興じつゝ①35に当たるのだと考える。

「類船集」薄墨に太夫黒（事項篇索引）があり、口絵の玉梓と手束が薄墨桜柄の着物を着ている。

●「築島」『幸若舞』東洋文庫

名月は聞こし召し、げにげにさる事のありしぞや。住吉詣のありし時、輿の先に玉章を引き結びて落とせしを



額蔵の「がく」も普通で見べきで、「類船集」楽の項に蛙、万戸か軍、住吉がある。伊勢参りとのみ思わせる馬琴得意のずらしである。

2014/03/15

●いま何かと世間を騒がせている論文問題。こんなモノを書いている研究者でない自分でも再現出来ないものは科学ではない、と分かっている。国文は科学ではないから割り切れない、と言っはみても作者が暗号を使っているのなら暗号は受け取った人間が復号できなければ暗号の意味を成さない訳で、八犬伝で基本の十二支の子丑寅…戌亥のそれぞれを一、二、三…十一、十二と置き換える方法は、誰がやっても結果は同じという再現性があるから、極めて科学的であるといえる。馬琴にしか分からない名詮自性であったなら、そもそも名詮自性に意味がないと同じことになってしま

う。

2014/03/14

●小藤

渡辺憲司著『江戸遊女紀聞』—売女とは呼ばせない、に「小藤」は、藤本箕山が記した遊女評判記、『満散利久佐』に登場する天神女郎である。ことさら逸話があるわけではない。とあるのだが、その小藤の容姿に「額の疵めにたち」とあるのが注目される。「比翼文」の濃紫（小紫、小むらさき）の額には、「三日月形の金瘡」があり、藤の花は紫だから小紫が小藤のイメージ由来であろうと推測できる。

朝日日本歴史人物事典の解説

時代の情話の主人公。そのモデルとなった平井権八(1679年没か)は鳥取藩士だった父の敵本庄助太夫を討って江戸へ出奔、吉原三浦屋の遊女小紫と馴染み、金策のため辻斬り百三十余名におよび、品川で獄門となった。目黒不動前の比翼塚に残る小紫との情話はこの実説に基づくが、歌舞伎「鈴ヶ森」(4代目鶴屋南北作 1823年初演「浮世柄比翼稲妻」の一場面)などで知られる侠客幡随院長兵衛との関係は年代も食い違い、まったくの虚構らしい。しかし通言に「権八」といえば居候を指すように、権八が長兵衛の食客になっていたという話は人口に膾炙していた。古い狂言だと長兵衛は男色者であり、そこから二枚目の若衆役である権八と結びつく筋が生まれたと思われる。

(上村以和於)

2014/03/13

●小説比翼文

権八=権=犬

濃柴=濃=恋、鯉

犬と恋というモチーフ。金碗八郎=白犬、濃萩=恋鹿。

本所助大夫は助大夫に振り仮名がないので、どう読むかは読者次第。八犬伝の十条には振り仮名がない。なにげなく「じゅうじょう」と思っているが、「とおじょう」でも間違いではなく東条と普通になる。

犬と手紙のことで「呉の陸機」が出てくるが、陸機よりもここで書かれていない犬の名前の黄二が肝心である。こうじであるが「きじ」と読めば、雉子とばかり思っていたおきじが権八と同じ犬になる。

高木元氏は「比翼文」の解題で、『小説比翼文』以後の馬琴読本に於て自覚的に方法化される多くの要素を孕んでおり、馬琴読本の出発点として重要な位置を占める作品であるというところができよう(太文字はコピペ(笑))、と述べており。作中五行で言表されている名詮自性だけではない面があること、呉の陸機の養犬とまではいってもその名が黄二であるとは言わない等、八犬伝の手法と同じである。

権八は犬八から八犬⇒野犬のままだが、現八は元々苗字も分からない糠助の子で、見八になっても野犬のただけれど、玉の意味を知ること野犬ではなくなった。

2014/03/05

●雨田武平、哮死ににぞ死したりける。

たける【哮える】とは。意味や解説。[動ラ五(四)]けものなどが荒々しくほえる。また、大声で叫ぶ。「猛虎

(もうこ)が一・る」(デジタル大辞泉の解説より)

なんとも良い用例である。武は(たけ)で猛、平は甲乙丙の三番目、子丑寅の三番目の虎。合せて猛虎になる。武平が明けても暮れても獣狩りをしていたのは猛虎だからで、哮死にしたのも猛虎だからである。八犬伝でみたこの名詮自性のテクニクは、すでに八犬伝肇輯の六年前の文化五年刊行『雲妙間雨夜月』で用いられていると考えられる。

雨田嘉太郎。武平の息子で出家して西啓(西門慶から)に、のち雨田法師、さらに雷法師。嘉は火であろうと「類船集」をみれば神鳴がある。

伊原武章(たけあきら)が音読みで武松なのは明らかで、武章の子供たちによる猛虎の子である雷法師を討つというワンクッションおいた構図になっていて、水滸伝における武松の虎退治というモチーフは下層に隠れている。

2014/03/03

●五色の鹿というだけで遊女なのだ。

蓮葉はもと遊女で、その前身は五色の鹿。鹿恋は遊女のこと。水滸伝、金瓶梅の蕃金蓮を連想させる名前であり、蓮葉自体に「女の、慎みなきこと。淑やかならぬこと。行いの軽はずみなこと。色めいて淫らなこと」の意味があるから、そのままなのだ。はずっぱな女なんて死語だけど、そういうことだったのだ。

金蓮は遊女ではないから、蓮葉の遊女という設定は馬琴の好みであろう。

2014/03/01

●女殺油地獄



番作は手束を殺そうとしている。『伊勢音頭恋寝刃』は油屋騒動を題材にしている。

口絵全体は一茶の「世の中は 地獄の上の 花見かな」である。手束は「名にめてておれる計そ女郎花我おちにきと人に語るな」ということは、口絵が八犬伝の本文を表しているとだけは言えない。もともと口絵は看板ではないし、予告編でもない。そこを誤ると口絵は本文と乖離しているという見方になってしまう。

2014/02/09

●果たして八百比丘尼は玉椿という名前だったのか

●



この口絵についても、伊勢参りに思わせるが図像は住吉詣であるとか、額蔵は『金瓶梅』に見られる姿であると考えた。しかし、そう限定すると額蔵の懐の濱路と推定される幼児が意味不明である。吉野裕子『陰陽五行と日本の民俗』に、「犬」は乾、堅、健に通じ、赤児の守りの犬張子、宮参りの額の印の犬字などは、すべてこれ（五行一注、畚）に基づき、新生児の健康や、魔除けを目的とする呪術であろう。p130とあることで、奴隸額蔵が犬川荘助であることとつながる。額蔵は単に琴の袖と幼児を抱くためにいるので、犬、額、宮参りという習俗を表しているのだろう。ここでは濱路ではなく本名の正月でみないと、月と蛙（墓六）の関係が分からない。

2014/02/05

●馬琴オリジナルの『俳諧歳時記』を入手。安かったので虫食いだらけを想像していたが左に非ず。とても良い状態である。

表紙の芭蕉は、金碗八郎切腹図にある芭蕉と関連する。

2014/01/30

●八犬伝的な余裕がなかったが、NHKの夕方の番組に亀戸天神が出てきたので、ここから亀・犬・天神（怨霊）というつながりできるのだよな、とひさしぶりに思った。亀=き=鬼・戸=けん=犬だから亀篠と信乃、天神=怨霊=玉梓の後身である濱路が揃っている。

八犬伝の俳諧的手法では狭義なので、連歌・俳諧的手法といったほうが良い。

2014/01/06

●なんとも久し振りである。

何度も買おうかなと思っては、やっぱりいらぬや、と買わなかった『図解里見八犬伝』が普段行かない本屋でぶらぶらしていたら目に入ってしまったので、つい買ってしまった。図書館で借りてパラパラ見てた時も錯誤を見つけてしまったが、今もパラパラしてたら見つけてしまった。

鉄砲の項目のP183のだれが⇒泡雪奈四郎、どこで⇒四六城家の庭、何をした⇒四六城木工作を殺した。

「どこで」が完全に間違っている。木工作は奈四郎の宿舎から「一ト町ばかり家路のかたへゆく処」④150で奈四郎に射殺されたのであって、四六城家の庭というのは奈四郎が木工作の遺体を移動させた場所だ。

これも前に書いたけど、角太郎の項のP50。

大角には、形式ばったイメージがある。古今の書に通じていて一日に一度は聖典を読むことにしており、現八がたずねて来たときも返事をせずに読みふける。

これはイメージ先行の錯誤である。現八がたずねて来たとき、角太郎は「眼」を閉じて維摩の行をしていて、聖典を読みふけることは不可能である。挿絵を見れば角太郎が聖典を読みふけていないのはより明らかである。何か原作以外の八犬伝のイメージが流入し混濁しているのであろう。

珠の行方の地図で角太郎の礼の珠が直接赤岩に飛んでいったように描いてあるのも、本文では白山云々と正しく書いてあるので誤解のものである。

こういう本は原作を読まない人が安直に信じて、イメージや間違った内容をコピペのように増殖させ続けるから気をつけてもらいたいものである。面白い本だからこそなおさらである。

2013/08/03

●いまでも不思議なのが、原作の八犬伝が「里見家の再興のために八犬士が活躍する話」だと思っている人がいること。昔のカドカワ映画が本当の原作であるとも思っているとしか考えられん。里見家は八犬士出生以前に再興はしているのだ。親兵衛以前に犬士が里見家の役にたったのは、濱路姫を救出した道節くらいなもので、あとは里見に対する怨みや憎しみを掻き立てているだけなのだ。八犬士が里見家再興のために活躍するなどとは、それこそチャンチャラおかしいのである。

2013/07/18

●古典籍総合データベースの同文通考. 巻之上, 中, 下 / 白石 撰

借用にある項目が面白い。竜と六が並び、乃、木、番、甫、包がある。

乃 乃濃方音相近。或借作濃字信濃。作信乃之類○乃奈上声語辞也。

番 蕃本通作番。玄蕃之蕃俗間作番。番亦訛作蕃非。

包 包庖音相近。借作庖丁之庖字。

信乃は信濃から名付けられた。乃濃方音相近。或借作濃字信濃。作信乃之類とある通りである。面白いというのは乃奈上声語辞也の乃奈で、信乃の乃を奈に置き換えると信奈で反すと奈信で梨になる。信乃は世四郎を殺した犬殺しの梨であるので、犬殺しの梨男の奈四郎は信乃と対になっている。

番の項は反すと番作番作と書いてある。包は庖丁の庖と「音相近」で、つまり普通である。口絵で村雨ならぬ庖丁を持っている番作は、庖は包、丁（ちょう）は定（じょう）、反して定包であり、手紙（玉章）を啜っている手束は玉梓である。実際に番作・手束が定包・玉梓と関係があるのではないが、定包・玉梓的な父母から生まれたからこそ、八房・伏姫という霊的な父母と仁義八行の玉（魂）が必要となるのだ。

2013/07/17

●当て字・当て読み漢字表現辞典

克つ 木は火に克ち〔「読売新聞」2010年3月5日(宮城谷昌光)〕p176

原文が間違っているのか引用が間違っているのかは調べないが、木が克つのは土である。木と火ならば、木生火の相生である。

2013/07/13

●『和名類聚鈔』

鞠 考声切韻云鞠（音菊字亦作毬和名萬利）以韋囊盛糠而蹴之。

セタと蹴鞠はつながり、碗を鞠と書く金鞠はセタとつながる。糠助の糠は「以韋囊盛糠」で鞠とつながる。

●思い出した。

三伏の時節を表して、伏姫とぞ名けらる①132

三伏の義をとりて、伏姫と名けたる①166

三伏の義をとって伏と名けたとは書かれていない。伏と名けられた姫だから伏姫なのではなく、もとより伏姫という名前なのである。太郎と言う名前は太郎で一語であってただけでは意味がない。姫は郎と同じで男なら伏郎くらいなものだろう。眠り姫は「眠り姫」という名前ではなく「眠っている姫」であるが、伏姫の場合は逆に「伏という名前の姫」ではなく、「伏姫という名前の姫」なのである。

そういえば●●美姫は「みき」で「美」とは言わない。意味のない例えである。

●伏羲（ふっき・ふくぎ）。

いままで気付かなかったのが不思議なくらいで、伏羲（ふっき）と伏姫は普通であるから、伏羲は葫蘆（ころ）（ひさご）の意で伏姫も同意である。葫蘆（ころ）は犬ころに通じ、葫蘆（ひさご）は七夕である。とここまでは前振り、伏羲（ふっき）＝伏姫＝富貴＝富貴草＝牡丹である。八房の場合後付けのように斑は牡丹のようであったと書かれているが、伏姫はもともと牡丹であった。ドラマや小説では「伏」「伏」と呼ばれたり書かれたりするが、それは本文で伏が人+犬の名詮自性であると解説されているからだろう。しかし伏姫は伏姫であって伏ではない。馬琴を馬とは呼ばないのである。

っていうか、八犬伝で別の登場人物、例えば玉梓と濱路が同じ台詞をいう繰返しは、輪廻転生というモチーフのためだ。そんな見方をしていたら『あまちゃん』でも繰り返される言葉がある。落ち武者と間違えることで強調している影武者、シャドーなどと言っているが影武者、影武者がモチーフなのだ。影武者をモチーフにして何を語りたいのが問題であって、光があるから影がある。人生の光と影であって、アホのアキと不良化ユイはいつでもどちらかが光であり、影の関係にある。なるほどね、八犬伝で主となるのは対だけど、現代の脚本でも基本は同じなのだ。東京でのアキはアホの骨頂だが、アホを強調することによって、なんでこんなアホが東京にきてユイが東京に来れないのかという理不尽さ、人生の光と影を描いているのだ。アメ女八賢伝なるものが出てくるが、馬琴の稗史七法則は現代のドラマの中に生きているようだ。

2013/07/11

●大輔が鉄砲を撃った時の地の文と大輔の証言の違い、狗児が玉を飲み込んだあとに雑犬になる、三人の八郎が古那屋に別々に現われる等、番作も含めて犬でなかった者が犬になる変化する時間の推移を馬琴は細かく描写する。この書き分けがさり気ないだけに気付くと稗史七法則だけではない馬琴の小説技法の卓越さが分かる。

2013/07/09

●『和名類聚鈔』蹇の項。説文云蹇、音犬。訓阿之奈閉。行不正也。

①280－5行目（番作は）信濃の筑摩に赴きつ。ここにて湯治する程に（中略）膂の筋や縮やけん。是より行歩自在ならず

①280－10行目筑摩に足を駐し日より、大塚の大の字に、一点を加つつ、犬塚番作と名告るものから

本文では別々に書かれているが、まとめると時間経過は以下のようになる。

(番作は) 信濃の筑摩に赴きつ。筑摩に足を駐し日より、大塚の犬の字に、一点を加つ、犬塚番作と名告るものから、ここにて湯治する程に(中略) 膂の筋や縮やけん。是より行歩自在ならず。

筑摩に着いた日に犬塚に改姓し、後に行歩が自在にならなくなった。つまり犬塚に改姓したために番作は塞になったということだ。大塚では憚られるから点を加えて犬塚にしたというが、じつは「犬=塞」という名詮自性であった。漢和辞典で犬の同音で塞をみても日本史で習った『塞塞録』を思い出ただけであったから番作と結び付かなかったのだ。軒や見はケンだから犬であると考えていたが、すべては「音犬」の一言で片付いてしまうのだ。

2013/07/03

●和漢で樊 噲の項を読んでいたら面白い。以屠狗為事。犬殺しだったのだ。それならば八犬伝の中にも出てきているはずで、音通を探してみると半壊などとすぐに浮かぶ。噲なら八犬伝的には貝だから半貝になる。半貝ならば以前考えたことがある片貝殿の箴大刀自であり、莊助と小文吾を捕えさせ処刑した、まさに犬殺しである。莊助・小文吾は稲戸津守のおかげで処刑を免れていて、処刑を命じた箴大刀自を「婦人に稀なる勇敢智計」④343と称えている。敵対勢力の箴大刀自の扱いに疑問であったが、樊 噲という名前が男ならば壮士であったと言いたいのだろう。箴を分解すれば竹の服で、節婦竹の如しというように真っ直ぐな人なのだろう。

2013/07/02

●八犬伝は将棋の駒の図像を使っている。将棋=娼妓とみても良いだろうが、王将と普通の和漢の王祥が重要である。王祥 休黻至孝繼母朱氏。朱氏嘗不慈。特嗜生魚時寒天水凍無魚。王祥即解衣裸身寢氷上。即氷割双鯉躍出得以薦母。

雛衣が「こい=鯉」と分かっているならば、上の文が庚申山編に活かされていることが分かる。角太郎の角から将棋の角行が連想できれば、角行から富士山が導かれ、富士山から不二、善悪不二が角太郎であると分かる。

●山(巻五十六) 広雅云山産也。

富山(とやま)は戸山で犬山だけど、なぜ犬山なのか。もう一歩進んで富山は「犬を産む山」であり、八犬士誕生の地としてこの名詮自性がぴったりである。古那屋が戸山(富山)であったから山林真平は犬江親兵衛として生まれ変わったのである。

●「和漢」で手束の元の苗字の井を真面目に読んでみた。

本綱云井水平旦第一汲為井華水。

平は甲乙丙の丙で三番目だから子丑寅の三番目の虎になるのだ、とか苦労してきたが「和漢」を読めば平坦に「トラノトキ」と振り仮名がふってある。拈下庵の「花」の字模様の着物、井手束のものだろう。

2013/07/01

●『ハリウッド脚本術』を読んでいて、八犬伝における笑いの要素を考えてみたことがあったのを思い出した。例えば、隼助が信乃と一緒にわざと与四郎を墓六宅に追い込んだものの、想定外の出来事に逃げ出した場面。

1. 拿たる棒を隠さんとて、懐に挿入れつつ、走り避んとする程に、腮につかへ、脚にからまり、睾丸さへ推痛めて、俯に跌倒れ、咄嗟と叫て、棒を繰り捨、やうやくに身を起せば、膝破れ衄血流れるを、見かえるに違あらず、面を皺め、膝を拵、足を引きつつ逃亡けり。①316

亀篠が濱路との婚礼に訪れた宮六、五倍二に、濱路がいなくなったことを隠し取り繕うとした場面

2. いと皺びたる満面に、白粉を塗着たる、鼻のあたりに鍋の炭を、したたかに塗添たり。とはしらずして唇を円め、目を細して阿諛の、多弁も傍痛ければ、宮六。五倍二は見ぬ態して、笑を忍べば②159

この二例などはその場面を想像すればギャグとしか言いようがない。しかし、1では後に番作の自殺を招き、2では馬鹿にされたと怒り狂った宮六等に亀篠・墓六は惨殺されている。繰返しの事例には同じ意味があるのだから、笑いの後の惨劇には馬琴の手法があるはずである。「脚本術」p16に、

脚本家は注意深く、あまりに平凡でコミカルに見える出来事を選んで、それを、どんどん暗くなっていくドラマの破滅的なポイントへと転じることで、観客の受け取り方に逆説的なショックを与えているのである。

とある。その逆説的なショックを、馬琴は挿絵でもって視覚的にも増幅させているのである。馬琴は笑いをその場をギャグとして面白くするためだけに使っているのではなく、話を緩い場面から劇的に破滅的なポイントへと転じさせるための装置として用いているのだ。このような点から見れば、勧善懲悪は目的ではなく、話を面白くするための手段である。

古那屋では三人いる八郎を一人しか存在させないプロットの巧みさ、富山でも大輔が鉄砲を放った順番を功妙にずらして読者を惑わせている。典拠の組み合わせの巧みさよりも、ハリウッドの方法よりもずっと早い馬琴のストーリーテラーとしての評価はもっと高くても良いように思う。

●彼ら（ライター）は言葉とアイデアでゲームをしている。彼らは紙の上で概念を巧みに使い、読者を惑わすことに心からの喜びを感じる。（『ハリウッド脚本術』p168）

八犬伝における馬琴そのものを語っているようだ。馬琴はカタブツだから読者を惑わすような人ではない、という変な思い込み自体がすでに惑わされている証拠である。馬琴が言う遊戯三昧とは言葉とアイデアのゲームであるが、ゲームであるということに気付かれないところに馬琴の悲劇がある。

2013/06/29

●七郎

馬男か庚男か。八犬伝的には庚申の庚男だろうが、小文吾の前身七郎にはしっくりこない。数字を置き換える方法は良いはずなので、本文に立ち帰ると竜の講釈がある。

第七子を狺狂といふ。訟を好むものなり。①28

「ひかん」とあれば、『史記』殷本紀によると、甥の紂王が暴政を行い、西の周の西伯昌（後の文王）の勢力が増大していた頃、紂王を諫めたが聞き入れられなかった。周で文王が死んで発（後の武王）が立つと周の勢力はますます増大し、殷の他の者達は逃げ出してしまったが、比干は「臣下たる者は命をかけて諫言しなければならない」と紂王に対して諫言をした。しかし紂王はこれを聞かず、「聖人の心臓には7つの穴が開いているそうだ」といって比干を殺害した。（ウィキによる）

上記の構図がそのまま当てはまるものではないが、七郎は天津兵内とともに神余光弘を諫めたが聞き容れられなかつ

た挙句定包の陰謀で命を落している。犬士たちの基本は竜の九つの子の属性を備えていることだろう。毛野が自分よりも大きく重い小文吾を軽々と背負っていくというイメージの妙も、第九の子覇下が「重きを負を好もの」によるのだろう。他の子の好むものがどの犬士に当たるのかは分かりやすいが、「重きを負を好」むという何気ないところを作中の重要な場面に活かす馬琴のイマジネーションこそが八犬伝の魅力である。勸善懲悪は古臭いというが、見方を変えればこれほどハリウッド的なものはないのである。「秩序を与えられた葛藤」こそが八犬伝の本質である。

●「和漢」巻五十三 蚊 又灌酒篠葉挿傍隅則蚊皆集其篠

又灌酒篠葉挿傍隅



則蚊皆集其篠



亀と蝦蟇の周りの虫を蠅とみるのはどうかと思う。

2013/06/28

●女郎蜘蛛ばかりでは駄目なので蜘蛛をみると、蜘蛛は巣に物が触れてのち「誅之、知乎誅義者、故曰蜘蛛」とある。誅義は勿論忠義であるから初登場の道節は「南蛮鉄金+篠の纏身腹甲を透間もなく領具して、網に螫れる蜘蛛に似たり」②138 という姿であり、誅義を知るといって誅義は義を誅するとも読めるから義の荘介と絡むのである。蜘蛛の音は知誅で智忠であり毛野と道節はセットになる。

絡新婦の女郎蜘蛛は船中の船虫である。女郎蜘蛛は斑蜘蛛なので、全身黒白斑の石畳模様の着物と麻模様の帯(蜘蛛の巣の見立てであろう)の手束は女郎蜘蛛なのである。有村の有は梨であったり蟻であったりするが、蟻を分解すると虫+義で忠義になることも不可解であった。誅義の蜘蛛ならば納得である。

●八の音通で蜂はすぐに思いつくのに、蜂に意味はないだろうな、と思い込んでいた。八郎は十干で辛男？十二支で未、羊男？変である。肝心な八なのに、仁義八行の八とか分かり過ぎてるつもりで分らないでいた。もう「和漢」をちゃんと見ろよ～、といったところだ。蜂の項に「蜂有君臣之礼範」とある。卒川庵八の八も疑問であったが、善であろうと悪であると、そこには君臣の礼があるのだろう。卒川庵八はのちにてくる卒八によって反対して八卒、即ち里見季基とともに戦死した八騎の従卒からの名前であることが分かる。



その卒川庵八が出てくる挿絵。この挿絵をみて疑問に思うのが、忠臣蔵のだんだら模様を悪が着ていること。善と悪が逆転した世界である。忠は善悪どちらであろうと忠である。チュウの鼠の輩であろうと忠である。結城落城は巖木五郎の反忠に原因があった。忠というのはそのくらいのものだと馬琴が感じていたであろうことは、主家に対して忠の心を持たなかった馬琴の道節の描き方に窺える。八犬士たちはしょうもない里見を見限って出て行けという。そこにはあくまで忠を貫けという姿勢はない。

2013/06/27

●牡蠣崎小二郎

小二郎は虎牛男で鬼門だけど、牡蠣崎がどうにも分からなかった。牡蠣を三才でみると「牡蠣東北海多有之」(巻四十七)とあり、東北は丑寅だから小二郎＝虎牛男で正解のようだ。ならば東北から牡蠣が出てきたかという、それではアバウトすぎる。牡蠣崎小二郎は実在の人物から名前を変えられている。『結城戦場物語』によれば漆崎小次郎である。漆から牡蠣にはどうするとなるのだろうか悩んでいたが、ふとテレビで見た漆の木を傷つけて樹液を採取している光景が浮かんだ。「漆を搔く」と言っていたはずだ。漆崎⇒漆搔き⇒搔き⇒牡蠣⇒東北(丑寅)という連想であろう。まあ丑寅が先か牡蠣が先かははっきり分からない。漆崎のままでは筆端で八郎の漆かぶれを治した蟹(忠臣)の対との誤った連想が起こるのを防いだのかもしれない。

「結城戦場」を読まなければ牡蠣崎が漆崎であったことも、春安両王の女装脱出未遂も分からないし、三才を読まなければ牡蠣が東北の海に多くあることを馬琴はいちいち教えてはくれないのだ。言表されていない名詮自性を読まなければ、ここにも、あそこにもいたという牛虎に気付かずに八犬伝の基本的な構造にも気付かないことになる。

2013/06/26

●籠山逸東太

これも「和漢」の龍蛇部で解ける。逸東太の東太は蟒蛇(和漢と漢字が違うけど)の頭蛇である。逸がさっさと逃げるだから、その名詮自性は「さっさと逃げる大蛇」である。籠山とか竜山とか竜なのかと思ってしまうが、龍蛇というカテゴリーで同じであった。

本文と「笛の音によるてふ鹿ハ」の挿絵は、蛇と鹿をキーワードにして描かれている。縄は「くちなわ」で蛇である(ということは他の縄の図像も蛇を表していると思える)。鹿恋は遊女の船虫である。「和漢」で蟒蛇は「一年食一鹿」とあり、逸東太は「かかれば去歳より無妻」④109であった。ここなどは遊女には気を付けなさいよ、ということを馬琴は婦幼に教え諭しているのだろうか。江戸時代では子供でも鹿恋は遊女であるというのが常識だったのだろうか。

自分なぞは逸東太を「一刀だ」くらいの音通しか思い浮かばなかったのだから、結局のところコードブックがなければ名詮自性は解けないのである。

ところで籠山逸東太は蛇かというそれだけではだめ。籠山逸東太縁連で考えないと中途半端である。連は虎なのだから「大蛇より虎」なのである。しょうもない男だが、仮にも虎なので毛野とちょっとだけ「一上一下、修練の突戦」⑤207といった具合に戦えるのである

●六ネームは子丑寅卯辰巳の蛇で宮六の父親が蛇太夫という以外には表立って出てこないで、六は三三で篠ゆえに虎ネームとしていた。墓六をみると六を虎とするよりは、蛇にすると蛇に睨まれた蛙の名詮自性が出てくる。酒がからんで殺されるのだから大蛇というイメージもそこにある。宮六の簸上という苗字も大蛇の簸川を連想させる。蛇を知っているようで知らないのだから「和漢」を読むと、蛇の「所憎之物、則茗荷、菴蓬(いぬよもぎ)、蛇苳草(いぬいたどり)、鷲糞」とある。この「いぬ」はまがい物といった意味だけど、とにかく蛇は犬系を嫌いどころか憎むので、蛇ゆえに六ネームたちの犬士に対する行いは酷すぎるのである。ここら辺が分からなかったので、6=蛇はひかえめにしておいたのだ。動物ネームはその人物の獣性を表していると言われ、それが名詮自性だと言われるが、その獣性がどういった獣性なのかまで掘り下げないと犬士たちとの関わりが分からない。

雑文3の早い段階で数字を抜き出して意味があるのは3, 6, 8と気付いていたのに、3と6が良い数字ではないとまで分かっていたのにも関わらず恐らく五年以上もその意味が分からなかったのだから恐れ入りの鬼子母神である。『毛吹草』だって十年ほど前から持っただけ「和漢」と同じく「毛吹えね〜」と死蔵していたのだ。

転機は2010年7月7日の夜に偶然途中から観たNHK教育の視点・論点の「ご存じですか北斎の“西瓜図”」で途中から観たのだが凄く面白い。最後に名前が出たので慌ててチェックをし、ググってみると『江戸の動物画』があり、日本の古本屋から即買いである。とにかく今橋氏の著作から得たことは大きく、『連珠合璧集』を知り群書類従本のコピーを取り寄せたことから寄り合いと八犬伝の関係に気付いた。〜とあらば〜なのだから、〜と〜は等価であると考えた。山下とあらば庵である。そして八犬伝で山下といえば山下定包である。毒殺が得意というところから道節母子を殺害した錠庵が出てくる。庵に山下を代入したあと錠山下で手間取ったが、錠を分解して反対せば定金さだかね、山下定包であった。なるほど置換が俳諧的手法であった。その応用で数字を十千十二支五行に置き換えることも最近分かったことである。暗号といえば暗号だし、言葉遊びといえば言葉遊びであるが、馬琴も謎々と算数好きな江戸人の一人なのである。

2013/06/25

●猫

『大和本草』

国俗に猫をこまと云うは、順和名子こまと訓す。又猫をかなと云う。

『和漢三才図会』

音 苗。家狸。金花猫。出月令広義、猫為妖者也。和名 禰古万。凡十有余年老牡猫有妖為災者。

『本朝食鑑』

凡老雄猫作妖。其変化不減狐狸。而能食人。俗呼称猫麻多。

これらを見ると八犬伝における猫の属性が一つの出典から出来ているのではないことが分かる。

猫は、こま・子こま・かな・家狸・金花猫・猫麻多と呼ばれている。音は苗であるから妙真が猫ま、麻苗は苗麻で猫麻等の名前が分かる。

老牡猫は妖をなして災いをなす。その変化は狐狸に劣らず、よく人を食うというところからは化け猫一角の描写は『本朝食鑑』が主に使われていると読める。もちろん辞書類だけが馬琴の発想の源ではなく、俳諧的思考もバックにある。

「類船集」猫の項に「鞠の庭」がある。鞞輯口絵の金碗大輔は金鞠となっているからググってみると、猫掻き「わらで編んだむしろ。蹴鞠(けまり)などのとき、庭に敷くもの」とある。



庭には後の金鞠大輔がいて、蹴鞠は七夕にも行われる行事である。「大和」「和漢」「本朝」等だけでは猫と七夕が結びつくことはない。

●富山と戸山は同じだから富山は犬山であるとする富山は犬士である。犬士は富士山である、と考えるのは早い。富士は不二だから、黒白の犬士は善悪不二なのである。例えば額蔵に義はあるが墓六・亀篠に対して忠はない。道節の忠の玉を手にした後に、宮六らに殺された墓六・亀篠に対して初めて忠を発揮するのだ。犬士を仁義八行のバケモノとか善の塊りと捉えるのがなんとも読みが浅いのである。まあ、今どき坪内逍遥のバケモノに取り憑かれている人もいないだろうけど。

黙はもともとは黙という漢字だから黒犬そのままである。

2013/06/24

●犬と尤は違う字だなどと目くじらをたてるようでは八犬伝の世界で遊ぶことなどできない。と言うか肇輯口絵のインチキ万葉歌を思い出して万葉仮名の一覧を見ていたら「な」に奈・魚があった。奈四郎は犬殺しの梨男とだけ読んでいたがダメ。奈四郎は奈=魚(『本朝食鑑』鮎魚女あゆなめ、日本紀及万葉集訓魚称奈也)だけど、魚四郎で虎四郎だけでもダメ。



このなんとも愛敬がある兎、絞兎死して走狗煮られるという諺を思い浮かべたりする。それでも良いだろうけど、奈四郎の四は子丑寅卯の兎だから兎男のくせに兎を殺してしまったということで、犬を殺す梨男のくせにかえて犬に殺される運命である。

奈四は単に梨の当て字に見えるが、実は奈にも四にも意味があるのだ。とかなんとか書いていたら久し振りに閃いた。錦織頓二と共に春王安王の介錯人で、匠作を斬り番作に斬り殺された牡蠣崎小二郎の小二郎である。大塚村の猫の紀二郎と普通なのはすぐに分かるけれど、小二郎が先に出てくるのだから小二郎を考えるべきだ。「こじろう」の音通をを考えていて煮詰まっていたが、虎虎書いていて虎はこ=小で、二郎は子丑の牛である。虎牛だから反して牛虎=丑寅で鬼門である。小文吾の前身七郎と現八の前身兵内は鬼門と関係があった。信乃の前身春王と毛野の前身の安王も丑寅の鬼門と関係があった。毛野と大鬼の大記が対牛楼で関わるのも丑寅=鬼門のパターンなのである。

鬼門の丑寅を数字に置き換えると二三だから、「丑寅が六」で六ネームには牛、虎、鬼の要素があるのだ。もちろん六にはろく、りく、む、の音通がある訳で、またそれぞれに関わる要素があるので複雑さを増している。

○泡雪奈四郎秋実

泡雪だから犬と関係がある。

奈四は梨だから犬殺しである。

梨の実は秋で、花は雪のように白い。

名は四郎だから兎男である。兎は月で、月は玉だから鉄砲玉が奈四郎である。

奈は魚だから魚四郎である。

魚は虎だから虎四郎である。音通に小二郎がいる。

小二郎というと春・安王のどちらかを斬首した牡蠣崎小二郎がいる。

信乃は春王の後身であり、奈四郎はその信乃に斬首された。

様々な要素は一人の人間の中にバラバラにあるのではなかった。

2013/06/23

●20日の土丈二の追加。

早稲田の『唐話算要』に毒蛇(まむし)の振り仮名に「ドゼエ」とある。エのあとの点が繰返しなのか音を伸ばすものかは定かではないが、とにかくドゼエーかドゼエエである。

石亀屋次団太＝亀、嗚呼善＝魚、土丈二＝泥鰌が表面に見えるが、石亀屋次団太＝赤鬼、嗚呼善＝虎、土丈二＝毒蛇(マムシ)となる。

2013/06/22

●尤

1. 咎める、咎2. うらむ、うらみ。

↓

脍、むく犬。⇒報いぬ⇒因果。木工犬⇒因果。木工が銃殺された場面の挿絵に「禽獣の怨霊は文外の画なり」と、その死が因果応報であることを描いている。

●名詮自性を考える時、一作ならば「一は作」とするから作＝木工で黒犬になる。で、一角は？と考えた。「一は作」だと「作角」になる。なるほど、化け猫のニセ一角を角太郎も含めて全員が本物の一角と「錯覚」している。錯覚は思い違い、勘違いであるから、一角の後妻の窓井はニセ一角と釣り変わっていることに気付かなかったのだから「惑い」なのである。庚申山編のテーマは「惑い」かと思ったが、読者が馬琴に惑わされているのは庚申山編だけではないのである。

2013/06/21

●最近は何等辞書の方面からのアプローチに偏ってしまったが、当然ながらそこには五行や俳諧的手法等が加味されていなければ八犬伝の在り様を偏ってみることになる。

木杵黙言言っていて黒犬ならば五行の水で玄だが、水の要素よりは木の要素で見るのが良い。金碗は白犬で豺だけど、それだけでは七塔とは結びつかない。七塔が五行の金(白)であるという要素を加味しなければならない。七塔と犬養星からのアプローチもある。

馬琴がなんでもかんでも言表して婦幼のために書いている作家などというのは妄想である。八犬伝の中で何故だろうという疑問をもっても、それが解ける人は最低でも和漢三才、付け合い集等を読める機会のある人だけだ。何故だろうという疑問の答え

は隠喩になっているから、それらの反復は八犬伝の構造を教えてくれる。反復は稗史七法則の照応・反対にあたるもので、パターンにつながっている。このパターンにこそ意味があるのだから暗号という意味において稗史七法則には欠陥があるということになる。

2013/06/20

●泥海土丈二は石亀屋次団太の弟子だが、次団太の妻鳴呼善と密通して次団太を陥れようとした。

嗚呼！善！なのではなく魚の虎魚だからこそ、「與他魚牝牡」という泥鯢の土丈二と密通する名詮自性である。という感じで「和漢」を読んでいくといままで見えていなかったことが見えてくる。

金碗は白犬、房八は斑がない白犬の八房と白犬が出てくるが、白犬というばかりでは漠然としている。豺(やまいぬ)の項に「似狗而頗白」とある。金碗大輔はもともと白犬であったと前に書いたが、犬に似た豺だから、大という犬にして犬ではない名前であり、豺は富山に帰っていくのだ。

さらに前項の「木狗」である。木工や番匠の黙、黒犬たちがいるのに、その意味がとれなかった。木工たちは黒犬そのものではなく、「形如黒狗」の木狗であるから、犬のようだが犬ではないという微妙な関係で犬士たちとつながりを持つことになる。黒犬の**ようなような**が大事なのである。犬士たちが色白なのは犬に似て頗る白い山犬であるからで、黒い痣ができたときに黒白(善悪)斑の犬になるのである。

このなんとも言えない八犬伝の微妙さはどこにあるのだろうか。八犬士の母たる伏姫自体が、弁財天参りの手束の前に現われたにも関わらず「山姫というものめきて、弁財天に似」ていない、なんともいえない存在なのである。

2013/06/19

●上総の一作は何を生業としている人なのだろうかと思っていた。娘の濃菘が困いだから海女の子で漁業関係者？とか考えてみたことがあった。答えはやはり「和漢三才」にあった。巻二十三漁獵具の「かたみ」和名賀太美に「全独而保生者是也」とある。



幼小の金碗大輔は父金碗八郎の忘れ形見ということで加多三と呼ばれていた。その加多三が大輔となり、

大和尚となって生涯独りを保ったのだから、濱路の正月のように改名前の名前が生涯の名詮自性に大きく影響している。改名前の本名と書こうと思ったが、莊介のように本名ではない額蔵が多分に影響している例もあるので一概には言えない。

●左母二郎は魚即ち虎であるから鯨なのだけれど、網に干された魚男で鯨=鱸=乾魚である。網で干された魚というイメージだけではなく鱸=乾魚という名詮自性の裏付けがあったのである。と書いたけど、「和漢」の網の項をみれば網は妄古と書いてあるではないか。妄古は猛虎だからもともと猛虎は魚という名前であり、左母二郎があれやこれや妄想するのは「妄」ゆえである。

2013/06/18

●蟹崎輝武と照文親子は武文蟹で輝武は水死してしまうのだが、それを蟹崎という苗字との関連で考えたことがなかった。蟹の音通で尼は出てきてもそれを尼崎という地名と思わなかったのが盲点であった。

●『本朝食鑑』3. 平凡社。

鯉の肝。〔主治〕眼目の赤痛および熟腫の場合、雀目に、胆汁を点じれば妙である。

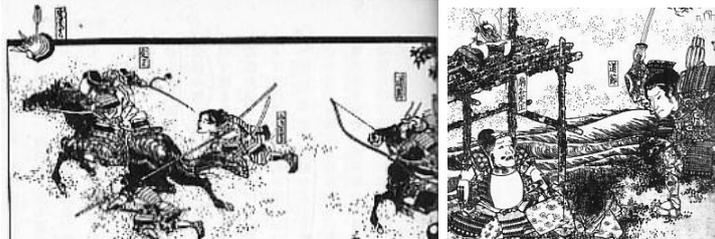
雛衣を鯉と読めなければ意味はない。

2013/04/26 記事

●燕戸訥平

犬の戸があるから惑わされたが、燕戸が胃なら「チュウ」であり大輔が訥平に言った「嗚呼がましや鼠の輩」①146である。訥平がなかなか分からなかったが、胃ならば訥平と普通の突盃があり、燕戸が胃で良いだろう。

と書いた。



この胃が道節の忠と関係がある。定正を討ち漏らし、盃だけを得た道節。忠与という名前がその名詮自性なのである。つまり、忠=胃与であるから道節には胃しか与えられないのだ。

道節の幼名は道松。道=同、松=木+公でもく=黙=黒犬なので黒衣着物ばかりなのだが、道松は道待つで、道で待っていた犬といえば犬塚家の飼犬になった与四郎である。道松の道節は与四郎であるから、代四郎に自分の「与」を与え与保とすることで道節に代わる二身一体が図られている。

2013/06/17

●鱸

東洋文庫「和漢」7 虎魚。俗に鱸の字を用いるがどうしてかよく分からない。鱸とは乾魚をあらわす字である。

左母二郎は魚即ち虎であるから鱸なのだけれど、網に干された魚男で鱸=鱸=乾魚である。網で干された魚というイメージだけではなく鱸=乾魚という名詮自性の裏付けがあったのである。

2013/06/15

●図らずも雛衣に関わっているが、雛衣は河豚でいいものか『大和本草』をみると、何ぞ有毒魚を食ふや。河豚を食ふ人はたとえは、隋侯の珠を以て千仞の雀になけうつかとし、とある。これは『莊子』讓王篇第二十八にある、

今且有人於此、以隋侯之珠千仞之雀、世必笑之、是何也、則其所用者重、而所要者輕也。夫生者豈特隋侯之重哉。

で、隋珠を以て雀を弾くという貴重なものをつまらぬ事に使うたとえで、失うところが多く得るところが少ないという意味である。

雛衣が河豚ならば、河豚を食ふ人はニセ一角、角太郎どちらのことなのだろうか。馬琴は両者であると書いておられるとしか思えない。隋侯の珠よりも貴重なものは雛衣の生命であることさえ角太郎には分からず、ニセ一角の目の治療に使うというつまらぬことのためにむざむざと雛衣を殺したのである。腹が膨れて河豚か、などという安直な名詮自性ではないのだ。

2013/06/14

●「和漢」は面白い。巻十三の朝鮮国語に犬(かい)、猫(こい)とある。貝＝玉＝犬で犬と玉は同じである。甲斐国が犬士にとって結果的に悪い場所ではなかったのは、甲斐国が玉の国というより直截的に「犬の国」であったからだ。

雛衣＝こい＝河豚で河豚がすぐに思い浮かぶから、雛衣にも虎の要素があった、と昨日書いた。朝鮮国語を導入すれば、雛衣＝こい＝猫で雛衣の虎性が裏付けられる。正月で虎であった濱路も加味すれば恋する者は猫、虎である。

そこで里見の魚などと義実が意味づけた鯉だけど、鯉は朝鮮国語で「りがい」である。利害の魚でも理外の魚でもあるようである。雛衣はニセ一角の理外な要求のために自害することになった。

●酔もあらばいざぬたにせん網さかな

「ぬた」は「なます」なので、よく言われる「あいつを膾にしてやれ」と同じで、網(干)さかな(左母二郎)に隙があったら膾にして殺してしまおう、となる。「和漢」巻五十一で膾の隣に「魚軒(さしみ)」がある。魚軒は膾と似ているけど異なるとあるけど、八犬伝的にみれば同じとしていい。

魚軒は刺身、軒が犬で魚である。これだけ揃えば犬の道節が放った手裏剣が身体に刺さった左母二郎で、もう一人刺身の男は挿絵で大々的に描かれている、定包が投げた尺八が身体に刺さっている妻立戸五郎である。戸五郎の戸(けん)＝犬と名前を読みつつも今いちしっくりきていなかったが、魚軒のおかげで読めたようである。

妻は妻。立は断つよりも殺の音通がいい。戸は軒で犬。五は誤。軒の妻と書かれているのは濱路で、犬の妻を誤って殺す男という後身の名詮自性が先にあるケースである。で、もう一人犬の妻を殺した男といえば金碗大輔で、大になる以前の大輔は左母二郎的な人間であったことが分かる。左母二郎は(妻立戸五郎+金碗大輔)というキャラで成っている。

基本は八郎+(前身+誰か)であって、信乃の場合は八郎+(前身の春王+義実)である。誰かは複数人でもよく、馬加大記によって抑留された際の小文吾は義実と伏姫の要素が色濃く出ている。角太郎は八郎+(富山で溺死した蜷崎輝武と講釈が好きな義実)、道節は八郎+(短気な神余光弘と講釈が好きな義実)、誰かは作中人物だけではなく、毛野の場合は八郎+(安王+八房+(義経+静))で、要素が多いほど当然ながら魅力的な人物に造型されている。悪人の船虫がかえって魅力的に描かれていると見えるのは、出てくる度に加算されて変わっていく要素の多様さ故である。

2013/06/13

●雛衣は「こい」だから酔の鯉なのだけれど、もう一つ面白い「こい」があった。玉を誤って飲み込んだせいで雛衣の腹は妊娠したかのように「ふくだみ」ていた。鯉の付け合いに「乳の腫れ」はあるが腹の腫れはない。雛衣は伏姫の対になっているのだから疑似妊娠は構成としてはあり得る話である。しかし名詮自性としては腹が膨らむというのは何か物足りない。と、ちょっと思っていたら「和漢三才」である。

愛する所、とある。



重戸は伏姫と重なるのだが、檜垣から落鮎余之七と結婚したことで、手束が日参した弁財天とつながってくる。本文では弁財天と言っているが挿絵では伏姫と庚申塚が強調されている。手束が弁財天、伏姫が庚申塚と別々に関係付けられているとみるのが良いのかもしれない。手束が鮎と関係あるとしたら、手束が最初にいた拈華庵の拈も鮎と考えたほうがいいのかもわからない。

2013/06/11

●富山にある八犬伝の解説板という写真をみたが、よくもまああれほどテキトーなことが書かれているものが公の場にあるものだと唖然とする。読んでいてこっちが恥ずかしくなってしまった。

けなげにも八房は私を危機から守るがように私の身体を被い、悲しげな啼き声を最期に息を絶ったのでございます。

悲しげな啼き声を最期に息を絶ったのでございます。八犬伝のどこをどう読むとこうなる訳？ 二次創作モノならいざ知らず、ここまでくるとすでに妄想である。

坪内逍遙に殺された八犬伝だが、再生したと思っていたけど実は全然理解されておらず、八犬伝は二度死んだとしかいいようがない。

2013/06/10

●糠助。額蔵とともに信乃を助ける「ぬか」なのだが、別の名詮自性がある。助は介だから糠介で「後悔」である。糠助が信乃に語った自分の人生はまさに「後悔」である。

2013/06/08

●山林房八郎の前身は柚木朴平なのだけれど、柚木とそれを分解した山林にも朴にも房八が船長になる要素がない。そこで最近面白い「和漢」である。巻四十四鳥の用にある「蹠」で、音はぼくで「みずかき」である。口絵の房八は船の水掻きともいえる櫓をもっている。

2013/06/07

●玉梓＝玉章。玉は王で反すと魚。魚章だから反して章魚、蛸である。玉梓は蛸っ!?いくらなんでも変だから笑ってしまったが、ふと閃いた。章魚は蜘蛛である。女郎蜘蛛は手束から突然出てきたのではなく、玉梓—手束の流れの上にあったのだ。玉梓—正月は分かるが、正月—濱路というつながりがなんだか分からなかった。玉梓—正月—濱路だけではなく、玉梓—章魚—濱路という海浜変換が網に干された魚男の左母二郎と組みになるための操作である。

若人及犬猿誤対之、則是疔吸着皮膚無不殺也。(「和漢卷五十一 章魚」)

もし人及び犬猿誤って之に対すれば、の人と犬が良い。里の犬の人である義実誤って玉梓に対してしまったのである。

2013/06/06

● 猿者(けんじゃ)は犬者と音通。

「けんじゃ」などと言うと八犬伝的には賢者を真っ先に思い浮かべてしまうのが間違い。猿者の意味が「あまりに真面目すぎて一般の人々と折り合わない者」なので、これって番作だよなと思う。しかしこれは番作だけではないので、猿者を「犬は」とすると「犬はあまりに真面目すぎて一般の人々と折り合わない」となる。与四郎が紀二郎を噛み殺して以後の糠助に対する番作の言動を読むと、正しいのは糠助に思えてくるのは自分だけだろうか。正しすぎるのはもはや間違っているのと同じである。番作を善人というよりも、ある意味で「困った人」という面を描いているように思える。いくら怪しいからと言って蚊牛を殺した時は問答無用である。拈華庵を焼いて証拠隠滅をしたあとも、残しておいたらまた悪用されるかもしれない、と自分勝手な論理である。類焼すとかは頭のない単純男である。

2013/06/05

● 『和漢三才図会』はやっぱ面白い。赤岩一角武遠は「隻眼一角は猛虎」が名詮自性で、一角は一角獣の牙が二本で息子が牙二郎という名前であることから一角獣由来の命名であることが分かるが、一角が一角獣では猛虎にならない矛盾がある。そこで「和漢」である。巻三十八の獣類に「一角」の項がある。蛮語で「うんかうる」「はあた」と読む。どちらを使うかは考える以前の問題で、**はあた**を代入すると「隻眼**は仇**の猛虎」だから先の読みを加えることで「隻眼一角は仇の猛虎」となる。仇の入ることで一角は化け猫に食い殺され、その化け猫が現八に目を射られて片目になり角太郎の仇になる、という確かな名詮自性となる。

● 漢和辞典は面白い。鯉の読みには雛衣とか恋とか濃いとか「里見の魚」とかあるが、意味の一つに手紙があり玉章である。つまり庚申山編では角太郎＝義実、現八＝八郎、雛衣＝伏姫である他に、角太郎＝義実、現八＝八郎、雛衣＝玉梓という面があることになり、現八が角太郎と出会うことにより雛衣は死んでいくことになる。濱路は旧名正月で章玉＝玉梓で、雛衣と同様に玉梓の面を持っているから死んでいくのだ。もともと濱路の濱路姫と鄙木姫には玉梓になる要素はなく、それぞれ信乃、角太郎と結婚することになる。

檜垣も氷垣の氷がミソ。馬琴の時代に氷河期なんて言葉はなかったらうけど。

2013/06/03

● 漢和辞典が面白い。玉梓の着物の「鶯」を「嘘」とのみ思うからいろいろなことを見逃していたのだ。鶯はカク、ガク、ウソである。犬士でいえば角太郎と額蔵がいる。角太郎の嘘太郎が大角の大嘘になり、赤岩百中などと名乗って大嘘をつくのだ。角太郎の母は正香。母子を合わせると「まさか嘘だろう」となる。額蔵も嘘を蔵しているのであり、口絵の琴の形をした袖は本当の琴ではないのだから嘘の袖で、鞞鞞口絵玉梓の着物のがらである「鶯の袖」とリンクする。なぜリンクするかはもう書く必要はないだろう。

2013/06/01

●まあなんとか文字をそのまま打っている分には平気だが、コピペができなくなっているから効率が悪くてしょうがない。効率が悪いパソコンって！？というのは置いて。

墓六・額蔵。蔵六とは亀の別名である。

これもどうでもいい話だけどもおいついた。ソフトバンクの白戸家の犬のお父さん。白戸をホワイトと読むらしいが、雑文読みなら戸を犬と読むだろうから白犬家だからお父さんは白犬である。白戸をホワイトと読んでもお父さんが白犬である必然性はなく、白戸を白犬と読んでこそその名詮自性である。

●メモリ不足とかでまともに動かない。雑文3が重くなりすぎたのかと思っていたが分割してもだめだ。

2013/05/31

●南八男児終不屈。

南家の八番目の男子。唐の南霽雲をさす。霽雲は字を八男といい、安祿山の乱に張巡らとともに睢陽の城を守り、城が落ちても屈せず、壮烈な戦死をした。

結城落城時に里見季基とともに壮烈な戦死を遂げた八騎の従卒は南八男児がイメージの源かもしれない。南・八男児、安祿山など。

2013/05/30

●五十子を稲とか犬と読んでいたが、まだ足りなかった。五十を「い」で子をねと読んで稲、普通の犬としていた。五十をいそと読んで磯路で濱路に通じる海浜ネームで濱路くどきの原型は五十子にあるとした。濱路くどきといえば雛衣くどきもある。雛衣の名詮自性は「恋」「鯉」だから、五十子はと言うと「いこ」転倒して「恋」「鯉」であり雛衣の原型である。ただ五十子を恋とすると男を恋する濱路・雛衣とは毛色がことなるので、濃萩の恋萩、恋鹿⇒夫恋の鹿が濱路・雛衣の恋の原型である。



鯉と八郎。この鯉が恋や濃である。宝珠を飲み込んだ鯉の雛衣は竜であり、角太郎に代って化け猫（虎）に対峙することになる。

虎は三や平や六⇒三三（篠）や魚の中に功妙に隠れている。なんだかんだ言ってもやはり八犬伝の基本は龍虎である。

五十子の父は万里谷静蓮。万里は碗（わん）だから犬。谷はやつで八。静は錠。蓮は連で虎。犬・八。定包・虎。「八犬は虎の定包」となる。万里を鞠（鞞輯口絵の大輔は金鞠である）についている房とするとそのまま「八房は虎の定包」である。八房は定包の後身であるとする雑文ならではである。定包は白妙の人啖馬など馬に関係つけられていると思いきりこんでしまっていたが、苛性は虎の如しの虎なのである。読んで字の如しで鞠屋の常連なんて読むと何が何だかどうでもよくなってしまふのである。

もしも万里谷静蓮の名前が岩波版①132の段階で読めたとすると、①140で八房という名前が出てきた時に、「じえじえじえ」と思わず声が出たであろう。

最近読んでいる名前は今まで名詮自性にこだわるあまりになにか読み解けないものばかりであったが、本人を表すのではなく本文の「解説ネーム」「謎の答えネーム」であるといった考え方ができていなかったからである。

●八房は虎の定包と読んだあとに、八房のもとの飼い主である技平を思い出した。

技=業、平=丙=甲乙丙の三で、子丑寅の虎。業虎。技平は八房とセットで考えるべきで、「前世の苛政の報いによって犬になった定包」

2013/05/29

●ここまで書いてきてまたまたおマヌケが発覚した。「魚即ち虎」とは鯨である。

●やっと今年からの分を雑文4に分離した。今日はこの作業で燃え尽きた。と思っていたが、「魚即ち虎」で落鮎を思い出した。鮎が落ちるところを想像したりしてたが、それはおマヌケであった。落虎⇒虎落だから小文吾に殺された「もがりの犬太」と同じである。氷垣夏行が犬士を殺そうとしたのは夏行の娘婿が有種—有は蟻かというとう。種だから「あり」とあれば「ありの実」で梨である。梨は実が犬殺したが、まだ種であったから犬士を殺すまではいかなかった—だったからだ。犬士に痛めつけられて虎性も落ち（落鮎）、挿絵にある兎のようになってしまった夏行と有種である。

2013/05/28

●嗚呼善、百堀鯽三。石亀屋次団太の妻と相撲の弟子。嗚呼善の名詮自性については馬琴が適当なことを言っているが、虎魚（おこぜ）という魚である。鯽を分解すると「魚即ち」で、三は毎度のことながら子丑寅で虎だから「魚即ち虎」ということになり、虎魚である。「嗚呼、善」のおこぜは鯽三のことで、嗚呼善は虎魚である。「魚即ち虎」となると左母二郎はさもじ=魚で魚男だが、実は虎男であった。濱路と網魚の対にしても何故犬士と対立するのか魚男だけでは説明がつかなかったのだ。濱路はもともと正月で虎だから虎男の左母二郎と時を同じくして同じ場所で死ぬ因縁であった。前身からみても正月⇒玉梓、左母二郎⇒戸五郎であるから、時を同じくして同じ場所で死んでいるのである。

●百堀が分からないが、鯽三が本人の名詮自性というよりは「魚即ち虎」という説明であるから、百堀も同じように考えるのかもしれない。堀は昨日のように捕吏で考えたが、百捕吏では本人の名詮自性にならない。で、今日の考えを加味すれば「多勢の捕吏は即ち虎」となるから犬士を捕えようとする多勢の捕吏—例えば根五平は名前が根五=虎、毛深いから虎—は犬士を窮地に追いやるのである。犬士に虎が群れになって襲いかかってくるさまを想像すると、荒芽山の危機もアメリカの映画のような迫力である。

2013/05/27

●浜

濱で濱はあるが、浜で彡兵という漢字はない。

●横掘史有村

史が不人で人で無し⇒人で梨だから犬殺し。有は蟻で鸞鳳も蟻虻に苦しめられる。村は有村の命によって信乃を捕縛に向かった夥の力士が群立った②180 ことであろうか。史有村はこんなところだろうが横掘りが難しい。蟻だから横掘りっぽい、蟻は縦にも穴は掘るだろう。横を分解すると木+黄。黄は「おう」だから木+王で枉になる。つまり横は殃厄（まがつみ）だから犬殺しの殃厄までは分かった。残りの堀が難しいなどと打っていたら「ほり」の変換予測に捕吏が出てきた。まさか変換予測で捕吏が読まれてしまうとは馬琴は思ってもいなかっただろう。いや百年後の知音とはパソコンのことかもしれない（泣）では情ない。まあそれは置いといて、「殃厄の捕吏は犬殺し」が横掘史有村の名詮自性である。すっきりした。

●サーバーがいっぱいになりそうだし、ホームページビルダーの調子もおかしくなってきたので、八犬伝関連以外の雑文のリンクをはずした。雑文内の文章をコピーしようとするとうまく発生しましたとかで強制終了してしまい、またページをひらこうとすると重いので時間がかかる。はずしたリンクをFTP ツールで削除しにいかなくてはならないし面倒くさいのだ。せめて一年単位で切っておけば良かったが、白紙からというのはモチベーションが下がるのでダラダラと書いてしまった。苗字が里見さんがいたけど結婚して松本さんになったとか、梓さんがいたとか、近所のひとの名前が漢字は分からないけど「さとみ」さんであったとかどうでもいい話は削除していたけどそんなものでは足りなかった。コピーと書いていて八犬伝的には「きつたりはったろう」だとか、こういうしょうもないことが積み積もってサーバーを圧迫するのだ。

2013/05/25

●川・山は「せん」で蟾（ひきがえる）の「せん」と音通。これで犬川・犬山が墓穴と関係する。月には蛙がいるので正月という名前だった濱路が墓穴に引き取られる。

道節の忠はチュウで鼠だけど、それはあんまりだと思っていたが、鼠（さん）が山の音通であることからそれで良いと思う。鼠は隠れる、逃げる、逃げるで分解すると穴+鼠である。ニセ火定で穴に入って逃れ隠れていた道節はまさに鼠、鼠の輩である。

犬塚の坂は「はん」で畔であり、毛野が縁連を討った場所が「田の畔」「水田の畔」「畔路」と畔が繰り返されている。

犬塚の塚は「ちょう」で、竜の子の獅子に蝶だけなら他の犬士も同様なのに信乃がことさら蝶なのは塚であるからだろう。

一番分かりやすいのが犬田の「でん」で臀部に牡丹のあざがある。八犬伝で「でん」といえば乞巧奠で、犬飼星の犬飼玄吉の臀部には亀甲模様がある。

犬村は「そん」で「謙遜」そのままである。

八犬伝は音通—ものすごくアバウトな同音異義語—とアバウトな漢字解釈—例えば戌と戌は同じ—が基本であるから、文殊の殊は殊ではないと厳格に規定してしまったら成り立たない畢竟遊戯三昧な世界なのである。

2013/05/23

●

音音⇒猫、獅子

妙真⇒猫ま

麻苗⇒猫ま

於兎子⇒猫、獅子

嗚呼善⇒虎魚

五十子⇒犬

稲城⇒白犬

重戸⇒犬、魚

雛衣⇒鯉

濃菽⇒鹿

2013/05/21

●夫知者不言、言者不知

牡丹の痣の意味を知っている毛野は言わず、知らないゝ大は言う。そんなゝ大の陰陽二元論を真に受けてはいけないのである。

●夏引についてもあれこれ考えた。なびき＝名は墓、夏を引いて墓とか、夏引楽だから音楽一味の対であるとか。安直すぎて除外していた靡きとか。ちょっと待て。靡を分解すると麻+非で麻に非ずとなる。麻については手束の図像から考えてみたことがある。まっすぐ伸びるから手束の真っ直ぐな性質を表しているとか、遊女のキーワードから女郎蜘蛛で麻に思わせているが蜘蛛の巣なのではないか、とか。初めの頃の謎にはだいたい後から答えが用意されているので、これ見よがしの手束の麻の帯は夏引＝靡で麻に非ざる模様であると見ることができるのである。麻ではないのだから、状況証拠から図像的に蜘蛛の巣であるといえるし、音通的にも麻（あさ）は麻ではないのだから真でも魔でもあり黒白＝あやめ＝善悪の着物である。

と書いていて手束—毛野、番作—小文吾の対を思い出した。毛野の偽名の旦開野の旦が「あさ」であるから麻開野で、真と魔を併せ持った毛野である。

で素藤の臣である仙田麻嘉六も思い出した。嘉という良い字を使っているが、まかろく⇒まがろく⇒麻が六、魔が六になり今まで見てきた六ネームの流れにあり、旦開野を麻開野と読むと真と魔を併せ持っており、六開野と読むと六＝戮だから対牛楼での殺戮の毛野になる。

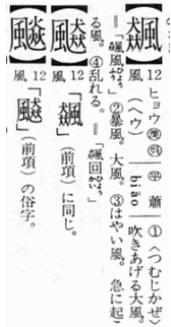
2013/05/20

●下河辺莊司行包

行包が説法だけしかわからないのでは悔しいので考えた。莊司は莊の字をヒントに残してくれているので馬琴が好きな『莊子』と分かる。河辺（こうべ）の音通を八犬伝っぽく考えると頭が浮かぶ。下頭、舌頭とか浮かぶがしたこうべ⇒髑髏（しゃれこうべ）と仮定して『莊子』を調べると至楽篇に「子之談者似弁士」とあるのが名詮自性であろう。

2013/05/19

●犬風火



風は虎に従うから風を起こす甕襲の玉を野猫の妙椿が持っていたのはおかしくはないが、それを犬が

使うのはちょっとおかしくない？と思っていたが全然おかしくないのである。

2013/05/18

●『水滸伝』の洪信を分解すると、シ+共+人+言だから「酔狂な人の言」となる。八犬伝で酔狂なことを言った人といえは犬に娘を嫁にやると言った義実である。義実とは偽実、嘘と実であり、義実はもともと酔狂な事を言うてしまう人なのである。

伏姫の伏、八房の房は「ま」であるから伏魔殿であり、伏せ姫の腹から出た白気は伏=人+犬、八房は八魔で八犬士は八人の魔犬なのである。

伏姫が割腹した時に一朵の白気が閃き出たのが挿絵にある八犬子で魔犬である。その白気が仁義八行の珠を包んだ時に仁義八行の魂が八犬士に宿ったのだ。

2013/05/17

●下河辺莊司行包（ゆきかね）、列を出て稟すやう以下を読めば、行は雪で説、包は法で合せて「説法」であることは明らか。読んで字の如しで「行きかねる」では10点である。

●道節たち音楽一味の根拠は竜の二番の子である囚牛が「音を好むものなり。琴鼓の飾にこれを付」とあるところだと思っていたが、基本を忘れていたようだ。里見治部大夫義実。当たり前のように通り過ぎていたが、自分は治部の意味を知っていたか？歴史ものを読んでみると石田三成を治部治部云っているの、あの治部かと分かったつもりになる。『官職要解』に「雅楽、僧尼、山陵、および外交のことを掌り、雅楽・玄蕃・諸陵の三寮を支配した」とある。夏引が夏引楽で音の対になることや「俳諧雅楽抄」が思う以上に役立つことなど雅楽にひっかかっていたのだが、義実の治部由来と今頃気づくのだから分かってるつもりが一番危ない。

音を好む囚牛は牛が遊女なので、囚われる玉梓は鞞鞞口絵で琴を持っているのである。

2013/05/16

●黒犬ばかり言っているが、金碗以外に白犬はいるかというと、犬+白の狛犬=獅子だから与四郎（与=四、四四=獅子。夜白=牡丹に代表される白犬たちがいる。

道節が黒ばかり着ているのは黒犬だからなのだが、犬士は色白と言う点から道節をみると、節は「雪」で道は「同」なら「犬山は雪と同じ」となり14日に書いたように姨雪代四郎は道節に代る者なのである。

道節の幼名を道松という。道は同、松は分解すると木+公で木工、黒犬と同じという名前で幼名からも黒犬で色白なので黒白斑な犬であった。



と書いていて輦輜口絵の道松をみれば、袴は黒白のストライプである。その袴にも着物の将棋の駒が伸びている。将棋は娼妓であるから遊女と関係がある。

2013/05/15

●さく=作・柵・策

匠作・番作父子は反対にしているが番匠作で番匠=作であるがこれでは意味がない。そこで木工が出てくる。番匠と木工は同じだが、木工はもくで黙と音通になる。黙は分解すれば黒犬となり、黒犬=作・柵・策になる。

山下柵左衛門定包は柵が黒犬で定包のかねが金で白、黒白斑な犬である。

犬山道策は策は作で黒犬。道は同で「犬山は黒犬と同じ」となり、道節が黒ばかり着ているのは黒犬だからだ。

本因坊道策・桑原道節。本因坊道策・親雲上濱比賀。困基はまさに黒白であり、道節殺害を図ったのは濱路の母黒白である。

道策は宝永七年三月二十六日没。法名は日忠。本因坊家の墓は京都寂光寺だったが、彼の代から菩提所は本郷丸山本妙寺の感応院となった。（『日本囲碁大系3 道策』p257）

道策の法名が日忠で、道節の忠がある。道節がニセ行者として現われたのが円塚山で、豊嶋本郷の西にある②122。濱路が死に火葬されたのも円塚山であったというのも道策とのつながりを感じさせる。丸山を円塚山にしたのは円でないかと犬と音通にならないからで、濱路が殺され葬られたのは犬塚と犬山の地であり、地名の名詮自性である。



濱路が黒づくめで強盗提灯を持っているのは、黒犬の犬山であったことと、前身の玉梓が賊婦①114であったことによる。

初版の岩波版では強盗提灯が左母二郎だけを照らし出していることも分らず意味がない。こういった点から初版の図像は未完成品であるといっている。こと図像に関しては後刷の名著版が良い。初版の価値と内容はイコールではないのだから、初版であることを過大評価するのは危険である。

2013/05/14

●10日の表で仁・忠が「子」でつながるのが全く分からないと書いたが分かった。

忠はチュウだから鼠の「子」で良い。親兵衛が鼠というのがおかしいと思ひ込みすぎている。子は「ね」ではなく子供「こ」なのだ。忘れがちだが親兵衛は子供である。鞞輯口絵で犬川莊介が義→丑→大人（うし）っぽく描かれているのもそういう訳だろう。

仁と忠のつながりを代四郎を道節の代理とすることと苦し紛れに書いたが、

我が名の一宇（与の字のこと）は所望に儘せん。そは左も右もの事ながら、同じくは与四郎の、与を改めて代の字に做さば、即我に代るの義あり。⑦173

と道節が言っているのが正しかったようだ。

しかし忠が鼠のチュウと気に入ったからと言ってチュウにこだわり過ぎかもしれない。丑はチュウである。



道節の口絵にある田単が火牛の計を言っていることは明らかで、火遁の術を使う道節は火牛である。図像的にも道節の周りには蚊が飛び回っていて、番作に寺ごと死体を焼かれた蚊牛は火牛と音通であり、胡散臭い道節の対の基となる人物であろう。川に柳だから川柳で、川柳のままでは意味がないので道節の肩柳の音通であろう。

●幟内

「かやない」で「蚊やない」とか音通で考えたことがあったけど、基本に戻って漢字をちゃんとみると?は「チュウ」である。チュウは鼠で内は大で反して大鼠で、いわゆる鼠の輩なのである。?だから蚊帳ないと読むと、拈華庵で手束が言った「山里のとりに得には、蚤蚊は絶て」いないはずなのに、蚊牛がいることと挿絵には蚊帳があることを思い出す。

泡雪奈四郎秋実の下男媪内の内は「ない」でいいだろう。三人合せて「雪は犬の叔母なのに、花が雪のように白く実は犬殺しの梨は犬の叔母じゃない鼠の輩」である。

2013/05/13

●夏引

夏引楽だから道節一味の音音の対であるとか、夏引から夏を引いたら残りの引は墓だから大塚の対とか考えた。類船集で舌の付合に「夏の犬」がある。ためしに夏を引いてみると「の犬」になる。なるほど夏引は「野犬」であったか。黒犬の木工作と野犬の夏引は犬つながりで夫婦であった。夏引と浮気した奈四郎は犬殺しであるから、名詮自性的にうまくはいかない二人であった。野犬と書いて思い出した。処刑された「夏引・幟内等は、身首所を異にせし、尸を市に棄られて、餓たる狗を肥やすめる」④221 とあるから野犬と関係つけられているのである。

2013/05/12

●黒白=あやめ=善悪

この対でいくと黒=善、悪=白となり、黒=悪、善=白という一般的な考え方とは反対になってしまう。定包が白妙の人喰馬だから白は悪かという源氏の里見も金碗も白犬である。番匠たち木工は黙だから黒犬で悪の犬になってしまう。まさに文目もわかずということになる。どうも黒白の考え方を間違えていたようだ。白と黒は反対の意味で使われるが、両方とも忠誠、誠実、実直といった同じ意味をもっている。匠作・番作の黙は忠誠の犬、木工の黙は実直な犬ということだろうか。しかし彼等には「あやめもわかず」というところがあるというも確かだ。善悪不二という考え方でないと八犬伝は捉えられなくなっている。

この場面では善であるはずの義実が言の咎によって黒白になっているが、問題はその下の黒である。善を基本とした黒か、悪を基本とした黒なのか？約束を違え怒りに任せて八房を殺そうとした義実が善なはずはなく、悪の上の善悪である。



2013/05/11

●鴉平

鴉は百舌だから岩波版で13頁弱もよく喋るが、ならば「平」は？以前は無視していいものと考えていたが、最近の「へい」の研究からは違う名詮自性が現われてくる。平は虎だから鴉虎、百舌虎になるが意味はないだろうから鴉を分解すると貝+鳥になり虎を合わせると貝鳥虎になる。貝は玉で、玉取り虎とは庚申山編のプロローグに相応しい名前なのである。よく喋るだけなら鴉郎でも良いのだが鴉平なのである。

●基本中の基本。六は「はちがしら」の漢字であること。六は八の中にある。言い換えれば六と八は不二であり、六を悪、八を善とすると善悪不二である。

●眼代。眼は目+艮である。目は木工になり、艮→権→犬だから木工は犬の代わり、とそのまま読める。木工とか番匠は犬の代わりである。木工を木猴と読んでいたが、犬（信乃）の代わりに奈四郎に殺されたのである。

2013/05/10

●子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥

簸上宮六は蛇太夫の息子だし、簸上は簸川に通じ八岐大蛇を想起させ、酒の上で刃傷事件を起こす六だから巳（蛇）で良い。宮は？神宮っぽいので神話ネームかと思う。しかし、酒癖が悪いのは「虎」である。六は筐で虎でいいが宮は？こう考えてみた。宮=九で、九+六は十五だから子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥子丑寅でやはり虎になる。

| | | | | | | | | | | | | |
|------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|----|----|
| | 一 | 二 | 三 | 四 | 五 | 六 | 七 | 八 | 九 | 十 | 十一 | 十二 |
| 仁義八行 | 仁 | 義 | 礼 | 智 | 忠 | 信 | 孝 | 悌 | 仁 | 義 | 礼 | 智 |
| | 忠 | 信 | 孝 | 悌 | 仁 | 義 | 礼 | 智 | 忠 | 信 | 孝 | 悌 |
| 十二支 | 子 | 丑 | 寅 | 卯 | 辰 | 巳 | 午 | 未 | 申 | 酉 | 戌 | 亥 |
| 五行 | 水 | 土 | 木 | 木 | 土 | 火 | 火 | 土 | 金 | 金 | 土 | 水 |
| 十干 | 甲 | 乙 | 丙 | 丁 | 戊 | 己 | 庚 | 辛 | 壬 | 癸 | 甲 | 乙 |
| | 木 | | 火 | | 土 | | 金 | | 水 | | 木 | |

礼・孝は妻帯者。礼・孝は庚。智は悌に初めに会う。礼・智は風火作戦。忠・仁がまったくつながらない。なんとか思いつくのは強引だが代四郎を道節の代理にすること。礼が寅なのは当たり前。智が卯というのは六輯口絵で裏付けられる。二巡目の悌が亥というのは猪と小文吾を連想させる。二巡目の仁の金水は素藤の黄金水を思わせる。

一作の一を仁・子・甲でしか考えていなかったのが間違いの元。一を木にすると木作であり、一作もまた番匠の一人であった。

2013/05/09

●基本は三=甲乙丙=子丑寅

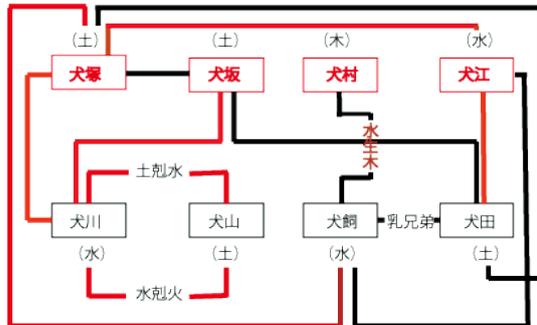
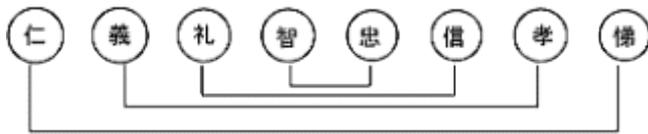
額蔵は額が顔だから、顔三で顔虎になるから口絵では奴行列の奴顔にみせているが虎顔なのである。分かりやすい例を挙げるともがりの犬太は虎落の犬太であるから虎顔である。小文吾はそれこそ虎ッ気（那古=猫）が落ちた犬田である。

| | 肇輯口絵 | 前身 | 犬・虎 |
|-----|------|-----|-----|
| 親兵衛 | 伏姫 | 五十子 | 犬 |
| 額蔵 | 八房 | 鈍平 | 虎 |
| 角太郎 | 伏姫 | 輝武 | 虎 |
| 毛野 | 伏姫 | 安王 | 犬 |
| 道節 | 八房 | 光弘 | 犬 |
| 現八 | 八房 | 兵内 | 虎 |
| 信乃 | 伏姫 | 春王 | 犬 |
| 小文吾 | 八房 | 七郎 | 虎 |

犬そのままよりは獅子とみるほうが良いだろう。

信乃（犬）一額（虎）、信乃（犬）一現（虎）、現（虎）一小（虎）、現（虎）一角（虎）、古那屋では信乃・親兵衛（犬）一現八・小文吾（虎）と二組に分かれている。この犬虎の要素がお互いを知らない時の犬士同士の争いになっている。





上の赤字の四人は肇輯口絵の伏姫、黒字の四人は同じく

八房である。つまり図像的には六男二女ではなく四男四女である。

2013/05/08

●黒は墨を磨る。肇輯口絵定玉図にある硯と墨が磨る墨で、磨る墨＝黒は定玉の属性であるから、黒馬図は勿論のこと
で黒牛、信濱図の硯も肇輯口絵に関係付けられている。それらの図像には定玉がいるのだ。琴は虎紋であり、玉梓である。

●杉倉/蔵人→倉（くら・そう）＝蔵（くら・ぞう）

額蔵＝楽奏。∴道節の音楽一味と最初に関係をもつ。

●三は子丑寅だから虎。六も三三だから笹＝酒で虎とか考えてきたが、もっと手っ取り早い考え方があったようかもしれない。灯台もと暗して虎を江戸語で調べてみたら、三賽賭博用語。虎の尾の略。三個の賽の目が三・六・五の時の称とある。五を子丑寅卯辰の竜にすると麻呂小五郎のような人間も出てきてしまう。悪竜や毒竜がいるにしても落ち着かない。五も虎ならば麻呂小五郎は小虎であり、安西三郎景連のトラトラトラ男よりも小者である。小と憑の音通とその人物からみれば小五郎は赤岩一角武遠（武遠は猛虎）のような「暴虎憑河の勇」の元祖である。

隻眼（赤岩）で牙が二本（息子は牙二郎）の一角獣で猛虎（化け猫）は化け赤岩一角の名詮自性だから、人間であった赤岩一角のほうが名詮自性に外れた者であった。またはその通りになったのだから予言的な名詮自性であったと言えるだろう。

2013/05/06

●氷六

角太郎と雛衣の媒人だから月下氷人が想起されるが、六ネームであること結果的には雛衣に死を招くので名詮自性としては怪しい。六を三+三の笹＝虎とすると氷六は氷虎となり、その音から暴虎憑河之勇⑤195を想起できる。暴虎憑河の勇とは無謀な勇は身を亡ぼす禍のもとと言う意味で、赤岩一角を始めとする無謀な勇の者たちを表している。

●古那屋から現・八郎が出かけたあとに大・八郎がくる。そのあとに房・八郎が現われ大・八郎と二人の八郎になる。大・八郎は房・八郎に蹴殺され八郎は一人になる。房・八郎は小文吾に殺され八郎がいなくなる。大・八郎は蘇生したが親兵衛と改名したために八郎がいなくなり、その後に戻っていた現・八郎が現われる。八郎は一人しか存在することができないのである。落ち武者の義実と同じ信乃が古那屋にいるのだが姿を見せないために、義実と八郎の出会いによって物語が動いているという感じがしないのだ。八郎がいなかった大塚では信乃と額蔵によって大きく物語が動くことはなかった。ふと思う。本当に大塚には八郎はいなかったのだろうか。いた。犬の与四郎である。与四郎の名詮自性は与四＝よし＝しし＝獅子、四白＝夜白＝牡丹だけかと思っていたが、与四＝四四＝四+四＝八だから八郎である。与四郎の登場によって信乃が生れ、与四郎によって番作が死に、与四郎の死で珠を得た信乃は大塚家に引き取られ、やがて物語は急展開し始める。世四郎も与四郎と同じく八郎であるから三犬士に出会ったあとに物語が動き出すのである。犬供養の徳用は乳名を二六郎④46 といい、二+六の八郎、悪の八郎である。八犬伝なのだから当然といえば当然だが物語の要はいつでも八郎である。

音音の父十条佐吾も 2013/04/14 の根五平の項でみた以外に、佐＝三+吾＝五の八で単純に八＝四+四の獅子で良かったのだ。佐吾（獅子）の娘は獅子（音音）であった。音音は獅子婆さんだから獅子奮迅の働きをするのだ。音音は子子で猫の面もあるが、獅子の面があるために、まるっきり猫の妙真（ねこま）とは親兵衛との関係において差異がある。

2013/05/03

●刊本の類船集で舌の付合が文字がつぶれているせいで「～の犬」としか読めなかったのだが、早稲田のを見たら「夏の犬」とスラッと読める。

2013/05/01

●蟹崎十一郎照文の十一は何かと思っていたが十二支の戌で、犬男であった。では足りなかった。

蟹は天だから十一の犬と合せると天犬で狛犬—獅子の異称となる。照文は犬男という以上に獅子であった。

●伏姫

なにか忘れていたような気がした。伏は人（ひと）+犬であると義実の名詮自性論①166 でそれとのみ思わされている。親兵衛の父母は八房（房八）と犬（ぬい）であるから親兵衛は八房と伏姫直系の子供である。その親兵衛は仁の玉を持っている。そう伏姫の人は「ひと」ではなく「じん」＝仁であり仁+犬である。伏姫自らが「仁の犬」であったから、直系の子供である親兵衛の名前は親譲りの「仁」なのである。義実の発言は本当に一解にすぎず、それを金科玉条の如くに考えていると通り一辺倒のことしか見えてこない。

●道節の忠は「チュウ」で鼠じゃないかと思っていたが、道節が鼠の輩ではおかしいので黙っていた。で、思いついた。道節が火遁の術を使うのは火鼠だからで、ニセ火定で金を騙しとっていた道節は鼠の輩であった。火遁の術を捨てたとき道節の体内から忠の珠が現われ「チュウ」は鼠から忠になったのだった。

ここで思い出すのが「その子全く体作らず。かたち作らずしてこゝに生れ、生れて後に又生れん」①217 で、なんとなく伏姫から生まれたあと現実の母から生まれると思ってしまいが、道節を例にとると鼠の輩として生れたのちに忠の

玉をもった犬士に再生したということで、玉と痣（斑）がないうちは、または玉をなんとなく持っているうちは伏姫と八房の子ではないのだ。

2013/04/30

●重戸



これとこれは図像的に同じで、犬戎と重戸
反して戸重（けんじゅう）になる。重戸が二犬士を逃がしたのは「その做す所公ならねば、親に叛くに似たれども、よくその親の愆を、補ふ旨は是孝」⑤68 であり、左図にある「昔高辛氏有犬戎之寇」が犬戎之寇＝重戸の孝である。

2013/04/29

●桜麻＝逢魔。桜麻＝みそぎ。黒白＝善悪。



口絵は桜がキーワードとして強調されている。

●扇谷定正とばかり思っているから何故定正が悪なのかわからない。

初めて名前が出たのは義実の官職を治部大輔にすすめることを京都に執奏した時で①191、扇谷定正である。この時は善悪もないが、次には扇谷修理大夫定正と官名があり、便佞利口の網乾左母二郎を扈從として重用したとマイナス面が語られる。ここから定正が悪側の人間として設定されたと言っていいだろう。修理は木工だから、善の番匠たちに対する悪の番匠の棟梁なのかもしれない。定正が木工ならば木猴がいい。猿なら妻が蟹目の前であることもわかる。

毛野に助けられた蟹目の前のペットの猿は、蟹目の前の心猿と考えていたが修理の定正であって、のちに定正が管領戦敗退後に助けられた対になっているだろう。

木工には木曾の番匠系と木工寮の猿である木猴系があるのかもしれない。定正の修理が出てきてしまったので、木工や番匠についてはもうすこしまとめる必要がある。

2013/04/27

●犬→いな・いに・いぬ・いね・いの

稲城は稲が犬、城が白の音通で白犬とした。「類船集」稲妻の項に田面、村雨、あたる世がある。稲妻は犬の妻であるから田面と音通の手束、村雨・あたる世が濱路となる。

いのが音通だから手束の元の苗字である「井」も犬。下でみた三からすると手束の父丹三直秀は赤犬だろうか？赤毛の犬は柴犬だそう。十二支で三は寅だし、直秀もよく分からない。

●三=ぞう=蔵=犬の真似

やはり作も「さ」で三で良いようだ。番作は番十犬の真似であるから、やはりというか村雨を守る番犬であった。村雨を信乃に譲り渡したあとはお役御免で退場するしかないのである。

2013/04/26

●蕪戸訥平

犬の戸があるから惑わされたが、蕪戸が胃なら「チュウ」であり大輔が訥平に言った「嗚呼がましや鼠の輩」①146である。訥平がなかなか分からなかったが、胃ならば訥平と普通の突?があり、蕪戸が胃で良いだろう。鼠の輩の名詮自性にしては回りくどいものである。戸が初めにこういう使われ方をするものだから、戸山が犬とは結びつかない。

2013/04/25

●横掘史有村

横掘りだから蟻が群がっていると言う名前かとはそれこそ雑文を書く以前から思いつく名詮自性だが意味があるとは思えず、蟻の一穴も芳流閣の事件から始る譬かとも思ったがパツとしないので忘れていた。有が「ありの実」で梨かと思ったが当時は梨が犬殺しとは知らずにほっておいた。全ては第一回と思ひていたら「鸞鳳も窮すれば、蟻?の為に苦めらる」①23とあり、有が蟻で「ありの実」で良かったのだ。

史（ふひと）では不比人をすぐに想起できるが、藤原不比人では何も得られない。不人は人にあらずで人でなしだから「人で梨」で犬殺しである。ろくでなし「六で梨」の犬殺しパターンである。

有が蟻で良いことは「蟻屋梨八」で裏付けられる。「有りや?無しや?」と読んで字の如しの意味不明さが名詮自性だと片付けてしまうが、犬殺しの「梨」があるので梨八が酔っぱらって犬士たちのことをべらべら話してしまったのを穴栗専作に聞かれたのをきっかけとして定正が里見を怨んで大軍を起こしたのだから、蟻だ梨だと言う「犬殺し」的な蟻?といえる。

穴栗専作も「作」ネームではないかと思うが穴栗は探り、索りで、専作は詮索だから探り・索り=詮索そのままの意味である。

●番匠たちの大元は杉倉木曾介氏元であった。では堀内蔵人貞行は?と考えてみた。くらんど、くらびと、ぞうじんときて「ぞうじん」で分かった。「蔵ぞうの人ひと」なのだから額蔵は信乃（里見義実）に対して堀内蔵人貞行の役割が、番作は信乃に対して杉倉木曾介氏元の役割がある。

2012/10/06 に書いた肝心なことを忘れていた。再録にあたり文章を手直した。

●堀内蔵人貞行、杉倉木曾介氏元

諸書を見ると堀内蔵人貞行はそのままだが、杉倉木曾介は木曾左馬允氏元などとなっている。堀内貞行は変更する必要がなかったということになる。

さだゆき、貞は悌と音通だから八に置き換えられ、ゆきは雪であり犬であるから八犬である。八犬士の父である八房を連れてきたのが貞行であるのも、貞行が乗る馬の鞍の梅も貞行が犬なら納得である。

木曾介も本来の木曾という苗字が前面に出ていなかったため杉倉木曾介氏元と思いこんでいたので、八犬伝の苗字である杉倉を分解したり音通を探したりしたが分からなかった。番作と手束が会った吉蘇（きそ）と何か関係はあるのだろうかとは思っていたものの思考停止していた。番匠の出処が分からなかったが、木曾といえば大工（番匠）で犬を守る番匠たちは里見義実＝里の犬を守る木曾介である。犬、雪、梅、番匠などの八犬伝の基本は義実主従にあった。

名詮自性の「番匠」の項のトップにはこれを置かないと番匠達の意味が分からない。

2013/04/23

●名詮自性 pdf をプリントしようと思ったら34ページにもなるのでやめた。

2013/04/21

●卒八

但鳥跣六の手下のくせに素藤を裏切って殺された男。反齒（そっぱ）の馬面郎（うまづらおとこ）が名詮自性のように書かれているが、行動や名前をみれば八騎の従卒の反対である。

2013/04/20

●番匠とは八騎の従卒であった。

一作も作であるから番匠と関係があるだろうと推測できるが、一を甲とか子に置き換えても甲作とか子作とかパッとしない。十千十二支ではないようだ。で、忘れていたのが五行だ。木火土金水をそれぞれ1～5にすると木＝1になり、木＝もく＝木工だから一作も木工作である。

小水門目の目は「さかん」だが「もく」なのだから、やはり木工である。

2013/04/19

●匠作・番作

番匠なのは分かる。大工だから木工で木猿（猿）というのも分かる。猿でも良いが何か物足りない。作というのがどうも引っ掛かるので『増補 俚言集覧』なんて見ると、

さく〔貞丈雑記〕何作と云名は修理の官に成たる人、清原氏なれば清作、平氏は平作、源氏は源作、太郎の人は太郎作、次郎は次郎作などと云也。修理の唐名をば匠作と云故、何作と云うなり。

とあり、修理の官とは修理職で『官職要解』に、シュリシキとよみ、『和名抄』にはヲサメツクルツカサとよんでいる。（中略）木工寮と手分けして、内裏を修理造作することを掌る役とある。『貞丈雑記』に番匠（ばんじょう）と音通の番長があり、近衛と云う役人左右の近衛府にて六百人ほどある内、八人弓馬の達者なるをえらんで番長とせらる

る、とある。つまり八人の弓馬の達人なる者は番長であり番匠なのである。八人の弓馬の達人なる者は里見季基と戦死した「八騎の従卒」だから、匠作と番作父子は二人で八騎の従卒の対になっているのだ。

木工作は木工=作と考えるべきだったのだ。

2013/04/18

●名詮自性が単に読んで字の如しではないことはこれまで見てきた通りだ。例えば手束が「手を束ねる」では何の意味もなさないのは明々白々である。

●伏姫は三伏で考える。

三は虎であるから虎を伏す。虎は正月で章玉、かえして玉章=玉梓になる。伏姫は人+犬という分かりやすい名詮自性だけでなく、玉梓を伏すという名詮自性があった。

●母屋（おもや）弓張月 上 103

重戸=母犬だから伏姫の代わりに犬士を守る。

2013/04/17

●数字を十二支に置き換える方法をとると面白いことがみえてくる。

子=一・丑=二・寅=三・卯=四・辰=五・巳=六・午=七・未=八・申=九・酉=十・戌=十一・亥=十二

長禄三年生まれは道節・現八・小文吾・荘助・角太郎で虎と関係があると推測でき、やはり寛正三年の濱路こと正月も虎である。寛正元年の信乃、六年の毛野、文明八年の親兵衛は子・巳・未で十二支に当てはめて考えていいか不明だ。

牛の二年には、長禄二年に伏姫、応仁二年に手束、文明二年に番作が死んでいる。

猿の文明九年になると突然物語が怒涛のように動き始める。墓六も亀篠も「害心ここに再発し、窃に信乃を結果ん、ところ急ぎ」②34 したのも心猿の影響だろう。ただ文明は十二年以上続いたので十三年からをどう考えていいかだが、おそらくは十三⇒子、十四⇒牛、十五⇒虎…と考えていいだろう。妙椿の乱、管領戦がおきるのは文明十五年である。

文明九年の干支は丁酉であるから上記の操作をしないとその年の意味は見えてこない。

安西三郎景連は西が白虎、三が虎、連が虎の虎虎虎である。虎虎虎で「三人虎を成す」を思い出した。土太郎・加太郎・井太郎の三太郎は三人で虎太郎である。

2013/04/14

●鮒三

鮒=船、三=虎=虫で船虫。

●千里眼八

八は添え物だろうということで「千里眼」で喜んでいたが違う。いつもながら切り方が肝心で、千里・眼八である。千里といえば虎で、八を未とか辛とかに置き換えてもダメだ。赤岩が隻眼なので眼の音通で岩が浮かぶ。八はやで矢であるから、虎・岩・矢のキーワードが得られ、あとはググってみれば、

石に立つ矢：石に立つ矢とは、どんなことでも、必死になって行えば必ずできるということのたとえ。

『韓詩外伝』の楚の熊渠子や、『史記(李広伝)』の李広という勇将が、大石を見誤って虎だと思って弓を射ったところ、立つはずのない矢が石に突き刺さったという故事から。

となり、千里眼八は虎ネームであった。とくれれば眼八と音通の現八も同じに考えて良いだろうから岩矢であり、庚申山のエピソードが現八の名詮自性で成っていることが分かる。

●根五平

根五は猫で挿絵の毛深さからは虎であることが分かるが平が曲者であった。平は丙で三番目だから寅で猫虎、猫は虎と言う名前である。親兵衛の本名の真平も真の虎であったが、蘇生した時に宝珠を持った龍になり親兵衛と改名された。

カニ・尺八の父十条佐吾の佐吾も3+5で十条八とは思っていたがなにか間が抜けた感じがしていた。佐は助けるで吾は十千の五番目の戊で、戊と戌は同じ。十条は東条と音通で金碗は東条の氏族であるから「金碗(白犬)は犬を助ける」という名前であり、その子のカニ・尺八は八房と言う名前が犬士の父であるから、十条兄弟は犬士を助けるために戦死してしまう。尺八は尺八郎というように八郎であり、金碗八郎が里見(里の犬)義実を助けた対になっている。

●槃瓠といえば高辛氏。



今まで気付かなかったけど、高辛は庚申と音通である。後に頻出する古那屋の庚申の日、赤岩庚申山等がこの場面を源としているのは明らかである。

手束が伏姫を見たのが弁財天に参ったのになぜか庚申塚。弁財天には蛇で「美少年録」においても阿蘇沼の弁財天と蛇について語られている。弁財天と伏姫は無関係であり、前にも書いたが弁財天と結び付くのは手束である。

2013/04/13

●数字は十二支（だけで全てが片付く訳ではない）

蟹崎十一郎照文の十一は何かと思っていたが十二支の戌で、犬男であった。

墓六は蛇太夫の息子に殺された。六は巳だから蛇で、墓六は蛙・蛇であり蛇に睨まれた蛙という名詮自性であった。

宮六は申蛇。新六郎は新=申でこれも猿蛇。寅は三番目だから安西三郎は虎男で景連の連も虎。菱毛酷六も「酷く虐げ殺す」だけ六は蛇でもある。

番作もいろいろ考えたが、作はさで三とすると三は虎であるから番虎(ばんこ)=蛮虎=槃瓠となる。首をくわえている番作は槃瓠で、八犬伝における八房である。

上総の一作などは一を「子」や「甲」に置き換えても意味不明である。金碗との関係で「鞠」をみても、その単位は「足」であるから作は足と音通だろうと考えられる。上総には蛸貝つまり片思いで、鞠には七夕があるから「片思いの七夕」となり、娘の濃萩と対になる名前である。

経論ノ中、畜類ノ問答多ク見エタリ。大論ニハ、或池ノ中ニ、蛇ト、亀ト、蛙ト知音ニテ栖ケリ。天下旱シテ、池ノ水モ失セ、食物モナウシテ、飢テ徒然ナリケル時、蛇、亀ヲモテ使者トシテ、蛙ノ許ヘ、「時ノ程オハシマセ、見参セン」ト云ニ、蛙、返事ニ偲ヲトイテ、「飢渴セシメラヌレバ、仁義ヲワスレテ、食ノミヲ思フ。情モ好モ、ヨノツネノ時コソアレこそ。カマル時ナレバ、エマイラジ」トゾ、返事シケル。ゲニモアブナキ見参也。グツトノマレナバ、カバカリノ事ト思トモ、ヨミガヘルミチモアラジ。

2013/04/11

●槃瓠

槃瓠から犬と瓢の連想が働く。槃瓠譚から義実・伏姫・八房譚が、槃瓠と音通になる万古將軍を連想しそこから義実と龍女の玉梓が造型され、濱路が関連付けられていく。

2013/04/10

●「馬琴の天機」の気になったところ。

母五十子はみずから伏姫を連れて洲崎明神の山の根方にある役行者の石窟に参詣する。p216とあるが従者等は滝田に帰ったあと「件の趣を、義実五十子に聞えあげて、件の数珠を見せ奉」った①137のだから五十子みずからは参詣はしていない。

2013/04/08

●相変わらずホームページビルダーがおマヌケなせいで、フォントが不統一、太さがバラバラで強調していないところまで太字になっていて意味不明になってしまっている。嘆かわしいことだ。

●金碗は金が白、碗がワンで犬で白犬であったことは書いた。百八十勝回上に「源氏は素より金徳にて、色は白を貴べり」⑩249とある。金徳とみてハツとしなかったら八犬伝を読むのはやめたほうがいい。金碗大輔孝徳である。里見が里の犬で金碗が白犬で大輔も白犬のつながりかと思っていたが、自殺した八郎は違ったが大輔は金徳＝源氏＝里見の白犬であったから義実が密かに伏姫の婿にしようと思っていたのも間違いではなかった。里見の白犬であった大輔は、大となり、ただの犬と成り下がったのだった。

2013/04/06

●西田耕三氏の「馬琴の天機」を読みたくて『文学』を買った。読んでいる途中だが気になったところ。

遠景の現八がよく見えなくなって残念だ、と作者である馬琴がかつ読者としても参加してそう思っていると西田氏は読んでいるが(p216)、八犬伝該当部(③385)の前後を素直に読めば、現八は勇敢で優れた身体能力があるけれど、そんな現八でさえ夜視で遠景が定かに見えなくて残念だと思っているということなので、残念に思っているのは作者馬琴ではなく作中の現八である。ここを例にしてしまうと前提が違っていることになる。

天機とは天(神)が定めた天の機微、表面だけでは知る事の出来ないおもむきや事情であるから、あまりに天機を漏らすと神の憎しみにあってしまうのだ。

2013/04/01

●衣更月(きさらぎ)

角太郎と結婚した鄙木姫は雛衣と「文字こそ異なれ唱は似」ている⑩230 というが、字足らずなところがちよときついな思っていた。衣が「き」であるから雛衣も「ひなき」と読めば、唱は似ているどころか同じなのである。

●何故信乃の周りには糠助や額蔵やら「ぬか」がいるのだろうと考えたことがあった。こんなこともある。月代(さかやき)は月の代わり、つまり玉の代わりなのだが、同じさかやきでも月額がある。額は月、月は玉なのだから額蔵は玉蔵で玉を隠し持っているが名詮自性で、糠助は糠=額=月=玉だから玉を助ける人であり、信乃をなにくれとなく助けにならない時もあるが助けてくれるのである。というよりも糠は孝であるから孝=信乃を助けてくれる人である。

「毛吹」の月の項に額があるが、なんとなくそういうものかと思っていた。月額(さかやき)から月に額という連想なのかと納得。



これも 月額で、額は月、月は玉なのである。



子供の頃の莊助の容姿についての描写はないが、荒芽山の莊助は「鬢薄して」③125 とあるから子供の時には挿絵のようにデコッパチだったと思われ、額蔵とは墓穴が漫ろにつけたものだが(③78)、漫ろは漫ろなりに墓穴は「デコ蔵」と言う意味で額蔵と呼んだのであろう。

2013/03/29

●2012/05/17に「墓穴には虫がいるから虎なのだとは言っていたが、墓を分解すると 十日大虫だから大虫=虎である」と書いたが、十日(はつか)とあれば鼠(類松集)で、大虫=虎であるから『毛吹草』の「ときにあへはねすみもとらになる」が墓の名詮自性である。墓田素藤の墓も「ときにあへはねすみもとらになる」である。蛙とっていると鼠であり馬琴得意の「鼠の輩」である。

2013/03/23

●なんと100円古本で古典文学大系の第二期全巻が揃ってしまった。どういう経路で古本屋に渡ったのかは知らない

が、帯と箱以外は背の金文字は燦然と輝き、ページは初めてめくられたのだ。目の前にある「平安鎌倉私家集」は、まるで昭和39年に行き行って買ってきたかのようなものである。そんなのが揃っているのである。これも新大系本が出たおかげだろう。第一期はあと23冊ないが、まあ期待しないほうが良さそうである。図書館に行っても新大系本は開架だが旧大系本は書庫にでも追いやられたのだろう、見かけることはない。

2013/03/22

●伏魔殿の禁を破った洪大尉。この人の名詮自性を考えてみた。分解すると水の? (さんずい) と共になり水共⇒酔狂になる。酔狂であればまさに洪大尉の名詮自性である。八犬伝でもこの読みができる名前があるかもしれない。

2013/03/21

●亀篠



亀=瓶、篠=酒で酒を入れる瓶だから口絵のようになるとも、亀=鬼、篠=六で鬼殺しで、鬼殺しの酒を飲まされているとも読んだ。亀=鬼、竹=畜、篠=嬢で鬼畜嬢とも読んだが、匠作の娘であることが詳しく書かれていたので単に篠を嬢にして、意味は変わらないが「鬼娘」でも良いだろう。

2013/03/20

●姨雪代四郎と親兵衛の関係は、与四郎と信乃との関係の対になっていることは分かる。ヤス平は安の川原で七夕と関係があることも分かる。代四が四四で獅子であることも分かる。代四郎は夜白で牡丹であることも分かる。となると八房は八が四+四で獅子であり、牡丹形の斑は付き物である。ここまでは今までも書いていることで目新しいことではない。房=ま、であるが、百七十二回を読んでもう一つ見つけた。蜜房 (はちのす⑨444) で、房が「す」ならば八房は「ヤス」であり、ヤス平は平を無視すれば八房であった。ヤス平の息子のカニ・尺八は八房であったが、父のヤス平も八房であった。親兵衛の父は房八で転倒して八房で、ヤス平は親兵衛にとって親の代わりともいえる存在であった。

代四郎は与四郎であるから小文吾の代わりとして親兵衛に付き纏っている時は、谷風こと金子与四郎と大童山との関係になる。ヤス平は犬の代四郎の対として、ただなんとなく親兵衛に付き纏っていたわけではないのだ。

2013/03/18

●房=ま=魔。八房=八魔。

犬士はもともと魔犬と人の子という八人の魔人なのだから仁義八行の玉=魂が必要なのである。

2013/03/16

●丁田町進

丁田は町で反対になっているから「ちま」で次の町も反対に読んでちま。チマチマ進むだけなの？と思い口絵を見ると、さや形地に雲の帯をしている。雲とくれば女郎蜘蛛なので「類船集」で町をみると「傾城屋」があった。ヤス平が蟹と七夕で、隣の舵九郎と依介が七夕、虎、玉でお馴染みのモチーフである。

荘役根五平と音音が猫猫なのは分かりやすいが、三宝平・庵八・駄一郎の組み合わせが分からない。根五平は毛深いので図像的にも虎なのだが上の三人に毛深いのはいないので、図像的に虎はいないということになる。なにかよく分からない。

2013/03/14

●カ二郎 曳手 単節 尺八郎

蟹を 曳く 節の人よ 八郎。



節の人というのは竹の額縁による。ぬいの讃にあるように「節婦竹の如し」である。



この二枚の額縁の雲と龍も上の口絵との関連でないという意味が分からない。関札は「恋の関札」で上の鯉と通じる。春駒は四人の意馬を表す。

この四人に関係ある「荒茅山の麓」の挿絵だが、ヤス平は薄墨で描かれていて幽霊であることを示している。実際ヤス平は生きているのだから薄墨で描かれるのはおかしい。しかし馬琴は話の都合上戸田川で船とともに沈んだヤス平を幽霊とのみ思わせるためにそういった操作をし、故意に読者をミスリードする。ノンフィクションを読んでいるのではないのだから、そういうことあるということを想定の範囲内とっていないと面白味は分からない。

この作品はフィクションであり、実在の人物・団体・事件などとは一切関係ありません。

2013/03/13

●曳手(ひくて)

曳手も考えてみた。曳くは夏引の引を思い浮かべやすいが、ここでは「牽=けん」で、曳⇒牽⇒犬である。手は手束の「た」であるから田になり、合せて犬田である。つまり曳手と単節の姉妹は犬田と淡雪姉妹であり、四輯口絵の小文吾・房八図に重なる。のちの親兵衛と代四郎の関係において代四郎が小文吾の代わりであったように、曳手と単節も親兵衛に対して小文吾の代わりとして富山に連れてこられたのである。

小文吾もついでに考えてみた。小文吾の本当の苗字は那古である。前に見たように、那古は猫に通じるので小文吾一家はもともと虎家族であった。その虎の小文吾がもがりの犬太を殺した。もがりは本文の漢字以外に虎落がある。つま

り小文吾は犬太を殺したことによって、自分の那古＝猫＝虎性が落ちたのである。

古那屋は虎屋であった。虎屋といういろいろあるだろうが「江戸語」でひいてみると、

- ①日本橋和泉町にあった饅頭屋。
 - ②吉原角町河岸の娼家虎屋次郎吉。
 - ③両国橋横山町角にあった薬屋。
 - ④尾張町にあった薬屋。解毒反魂丹を売った。
- ①以外の娼家と薬屋の虎屋が古那屋かもしれない。

2013/03/11

●単節(ひとよ)

一節(ひとよ)が単節なのは、単→淡・節→雪→淡雪。

淡雪というとなんとも紛らわしいのが泡雪奈四郎で、雪ネームで姨雪代四郎と名前は似ているのに悪人である。奈四が梨であることに気付けば、梨の花が雪のように白いこと、その果実は犬殺しであって姨雪代四郎とは名前の出来方がまるで違うことが分かる。単節が淡雪ならば泡雪と普通になり、犬殺しの泡雪奈四郎と同じになってしまう。荒芽山の危難は単節がいたことによって招かれたともいえる。

2013/03/10

●禄釈坊堅削

六尺棒で犬を裂く、は読んで字の如しの名詮自性。六尺には戸(けん)があり、六尺棒と犬の関係ができる。もう一歩進むと六尺に「擬宝珠ぎぼうし、擬法珠ぎぼうし」があり、禄釈坊堅削が偽法師であることがわかる。「偽法師犬を裂く」が本当の名詮自性である。

2013/03/08

●岩波旧版の挿絵を見ていたら、へのへのもへじみみたいな道節が出てきて啞然。道節の長い顔の輪郭を間違っただけに顎と襟元が離れてしまっている。旧版の、大は笑っているように見え、武田信昌は顎の輪郭線がないために小太りの相撲取りのようである。



昔のソフビのウルトラマンにしても今のフィギュアのレベルから見ると、大らかというかテキトーというか子供が作ったみたいに似ていない。

2013/03/07

●言葉の呪術性とか言われるが、本当にそうだろうか？いままで見てきた名詮自性からは言葉の遊戯性をより強く感じる。

【呪術】神や精霊などの超自然的力や神秘的な力に働きかけ、種々の願望をかなえようとする行為、および信念。ま

じない・魔法・魔術など。

2013/03/04

●重戸は植物ではなく魚であること、犬が重なるという名前ゆえに伏姫が現われたことはすでに書いた。で「重」だが里偏である。里戸と置き換えてみると、里犬であって里犬の里見と同じである。

何度も書いているが、戸山や重戸の戸が犬であるのか。「弓張月」の葎家二三十戸（下190）の戸のふりがなが「けん」であることによる。「けん」は軒でも見でも犬（けん）なのである。

2013/03/03

●直塚紀二六は『古事記』の「雉還らざりき。故今に諺に「雉の頓使（きじのひたづかい）」と曰ふ本これなり」とばかり思っていたが『大和本草』を見ていて分かった。

述異記ニ晋陸機カ黄耳ト云犬ノ首ニ書ヲユヒ付テ遠所ニ使ニヤリテ往来セシ事アリ。



五輯見返しは陸機の飼犬黄耳の話に基づいている。黄耳を「こうじ」と読んだらここではアウトで、黄耳は「きじ」である。紀二六は猫の紀二郎の対になる名前と思っていたが、黄耳六であり六は「りく」だから陸で反すと「陸の黄耳」である。還らない雉では紀二六の行動に合わないし、与四郎犬＝代四郎に噛み殺された紀二郎猫＝紀二六の反対の名前にしては単純すぎるし、犬士と相性最悪の六ネームと言うのも親兵衛譚では逆になるのかとか、親兵衛＝桃太郎では猿がない等臍に落ちないでいたのだ。紀二六は猫や鳥に見えるが、やはりと言うか犬ネームだったのだ。紀二六といえば親兵衛の密書であり、雉の頓使と黄耳で「書の使い」を名詮自性としているのである。

2013/03/02

●2013/01/05 にこんなことを書いた。

神変大菩薩＝役の行者と名札があるのは三枚目だけで、前の二枚とは似ても似つかない姿である。二枚は登場人物が勝手に役の行者と決めつけているのを、読者がこれまた勝手に役の行者と思いこまされているのではないか。～とのみ思わせる馬琴の手にひっかかっているのではないか。二枚目の弓、霧、手紙、老人を困っている蜘蛛の巣であろう分銅模様、毒石＝玉梓を包んでいる錦の囊、実際の歴史（時代が違うが）で遊女係である里見義成が覗き見をしている背後の木目は鞞鞞口絵で玉梓が持つ琴、すべてが玉梓である。

では最初の異人が仁義八行の玉をくれたのはおかしくはないか、と考えていた。玉の文字も書状に書かれていたことも如是畜生発菩提心に変化する。つまり異人が最初に玉をくれた時から文字は如是畜生発菩提心であったのを玉梓の怨霊の力によって仁義八行に見せられていた、仁義八行→如是畜生→仁義八行と変化したように思っているが、じつは如是畜生→仁義八行の変化しかなかったのではないか。玉を首にかけられた時から伏姫は逆に玉梓に纏わりつかれたと考えると、鞞鞞口絵の玉梓と伏姫が二身一体のように描かれているのも分かる。伏姫の読経の功德によって八房が菩提心をもったとき、初めて玉の文字は仁義八行に変わったのではないだろうか。如是畜生発菩提心なんて文字の玉をもらっても、

気味が悪くて首にかけ気はしないのである。

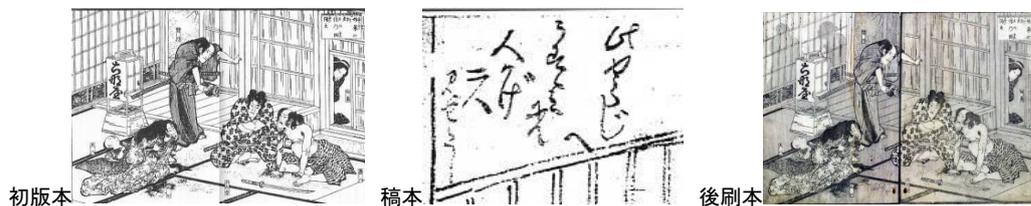
玉の文字について、義実の不可解な発言がある。

看数の大玉に、初は如是畜生、発菩提心といふ八字あり。後は変じて、仁義礼智忠信孝悌といふ、八箇の文字に倣見れし⑤318

なんと如是畜生→仁義八行の変化しかなかったのだ。義実の発言ほどあやしいことはないのだが、これは気に留めておいてもいい事柄かもしれない。

2013/03/01

●初版の挿絵等は、とにかく出版することを優先したために未完成品である。



国会図書館蔵の初版本(岩波版)は、この場面の昼夜の区別がつかないし、一番肝心な馬琴稿本に指定してある「障子へ薄墨にて人影二人見せたし」がない。この二人の人影がもつ意味は本文で明かされるが、人影があるとないではこの場面の緊張感が全く違ってくる。図像的にはまだ別の部屋があることを示し、空間の奥行きを出している。馬琴が指定している人影を追加することが本屋の賢しらなどとは言えないはずである。これと同じく初版よりも良くなっている例が「うち落す」の見八対信乃図で、屋根瓦に影が付き立体的になり、水飛沫も描かれている。また濱路が持つ強盗提灯が左母二郎等を照らすなど八犬伝に限って言えば初版本にこそ馬琴の意図が正しく表われていると見るのは間違いであり、初版の書誌的、コレクター的価値と作品の完成度を混同してはいけない。

2013/02/28

●四輯口絵の小文吾。隣の房八とで額縁の梅は八房の梅となる。とだけ思っていたが「和漢三才」を見ていて閃いた。

東風(こち) 谷風

東風といえば菅家だから梅と関係はある。犬士はみな梅男でもあるが小文吾だけ特に関係付けられているのは梅→東風→谷風であるからだ。小文吾のモデルは横綱谷風であると書いたことがあるが、これはその関係の要素の一つとも考えられる。

2013/02/25

●前身後身を考えれば、なぜ春王の護身刀の村雨を信乃が持つのか分かる。村雨は単に足利持氏の近臣だった匠作が持っていたから番作—信乃と渡されていったのではないということだ。



信乃はすでに信乃にして信乃なのだから、村雨が春王であった自分の護身刀であったことを知らず、足利成氏に村雨を返還してしまう。そこを読むか読まないかによってこの場面の感慨の深さも変わってくるだろう。



勾玉巴

牡蠣崎小二郎の家紋ではないようなので、この挿絵の中の何かを表している。春王・安王は王王でわんわん、犬であるから犬と玉である。

2013/02/23

● 赤坂の駅（しゆく）⑤339

強盗：赤坂の宿（類船集）

礪時願八業當（礪時=ととき=十×十き=百き=百鬼。八業=夜行。業當=強盗）

●



これと



これの図像的な共通点によっても定包→八房を説いてきた

が「類船集」の菰をみて閃いた。尺八吹、である。本文でも上左の挿絵でも尺八と関係があるのは定包であるから、尺八は定包の属性なのである。

- 1 マコモを粗く編んだむしろ。現在は多く、わらを用いる。こもむしろ。「荷車に一を掛ける」
- 2 「薦被(こもかぶり)2」の略。おこも。
- 3 (「虚無」とも書く)「薦僧(こもそう)」の略。



この虚無僧姿の木曾介は尺八を持っていないことを強調している。ではその尺八はどこにあるのか。朴平たちが「このヤロー、こんちくしょう」と踏みつけているのが尺八→定包であることを物語る。そして虚無僧が「菰僧」であるから木曾介は「菰」というキーワードを体現していることになる。まとめると菰→尺八→定包となり、菰の中の雛犬の八房が定包と関係付けられていることが分かる。虚無僧と尺八との関係は分かるが、菰僧というのは考えたことがなかった。付け合いなしに菰→尺八吹くという連想の飛躍はできない。この口絵の段階で朴平等が踏みつけているのが宝剣であるとみるのは意味不明である。

2012/11/19



船虫の雲をいままで蜘蛛と読めなかったのが情けない。

まるで菅笠に船虫と名札がついているようだが、

漂泊する遊女や巫女の代表的持物が、笠だったのである。（大和岩雄『遊女と天皇』 p187）

とある。のちの船虫の行動からは、船虫が漂泊する遊女として描かれているのがわかる。名札付きの菅笠が船虫の本質なのである

と言ったことを加味すれば、貞行が持っている笠は玉粹である。図像的にも丸いものは玉とみていいだろう。

●依介よりすけ

介を貝＝玉と見ると、依玉になる。分解して反して読んでいくと、玉の衣の人になる。



確かに玉模様の着物である。



頭、あつ玉。依介の人柄からすると衣は心で、心ざまの淳朴（すなお）②370 な玉の心の人であるろう。

のちに犬江屋を継いだのだから、依介も犬士にはなれない犬であった。



後ろ姿の頭の前の駕籠の中に玉を持った大八がいる。稿本をみると「あたま男」はいないので馬琴がそこまで意識したかは分からないが、現状では以上のように考えることができる。

貞行が玉梓、木曾介が定包、朴平たちが「このヤロー、こんちくしょう」と踏みつけているのが尺八（定包）で尺八の入った錦の袋が玉梓である。「このヤロー、こんちくしょう」と定包だけでなく玉梓も踏みつけていなければおかしい



のである。玉梓は「錦の囊に包る、毒石に異ならず」（①111）

で、上の船虫に関係するのが「古金欄の袋に納たる笛」③244 で、朴平等が踏みつけている尺八の遠い対になっている。「慰かねし徒然に、尺八の笛吹すさみ、更に余念はなかりけり」①100 といった定包の対として小文吾も「われも亦いとはやくより、尺八を好みしかども、そは虚無僧尺八」③244 と言っている。尺八は定包の属性なのだから、八房を経由して小文吾に受け継がれていると言えよう。八犬士の人物像を形造っているのは、①それぞれの前身②八郎—伏姫③祖父たる義実④父たる八房—定包⑤やることなすこと失敗する大輔といったところで、まさに黒白斑である。仁義八行が犬士であるとのみ読むのは逍遙の毒に汚染されてしまったからである。かつて逍遙が八犬伝を死に追いやったように、八犬伝を読むことにおいて逍遙はすでに死んでいるのである。

2013/02/18

●大輔が富山で伏姫を誤射した日、その日に限って初めから晴れていて絶好の鉄砲日和だと思っている人が多いのではないだろうか。晴れでなく霧の中であったからこそ、八房が自分に向かってきたと勘違いした大輔は慌てて鉄砲を撃ったのだ。もし初めから晴れていたのなら声だけでなく、水際を指してくる八房の直線上に伏姫がいることが分かるのだから慎重に狙いを定め

て撃ったはずで、そうしなかったのは霧がまだ晴れてはいない状態で大輔が鉄砲を撃ったことを物語っている。

川に向かった八房の様子を何故か今まで走っていったと思い込んでいたが「伏姫を見かへり見かへり、水際を指してゆく程に」
①225 なのだから、大輔が言う「八房はこなたを見てや、水際を指して走り来つ」①232 という証言はただの主観にすぎないことがわかる。ここでも後からの八房が「水際を指して走り来つ」という大輔の証言による誤った情景が脳に刷り込まれてしまっているのだ。前にみたように霧が晴れた順番も地の文と大輔の証言は違っている。大輔は善人である、故に大輔が言うことは全て正しいとのみ思われているのだ。大輔が言っていることは正しいですよ、偽りですよなどと本文に言表されてはいない。それを読み解くことが虚実に満ちている八犬伝の読み方なのではないだろうか。書かれていることを真に受けた今までの読み方で八犬伝が面白いとは思えない。本文中で前身後身が言表されているのは玉梓→八房だけだから、それ以外に前身後身はないと読めば八犬士とは何者なのかという根本も考えないことになり、八犬士はただなんとなく伏姫に選抜された存在のみである。伏姫が犬士を選抜したかのように見えるけれど伏姫は八郎の後身なのなので、春安、五十子以外は八郎の関係者であり、八郎こそが犬士を選抜したといえるだろう。八郎の中に八犬伝があるという所以である。文外を読まない八犬伝は皮相的である。

犬江—五十子—安房

犬川—岩熊—安房

犬村—蛭崎—安房

犬坂—安王—結城

犬山—光弘—安房

犬飼—天津—安房

犬塚—春王—結城

犬田—七郎—安房

文中：玉梓→八房

文外：玉梓→怨霊→正月（濱路）

定包→八房

玉章→月正、八房→八⇒悌⇒定・房→包となる言葉遊びを牽強付会と覚えてしまう人、遊び心のない人はそもそも八犬伝など読む必要はないのである。

2013/02/16

●馬琴の「歳時記」の王春月：春王ノ正月[佐伝]を「左氏伝」でみると「春、王の正月」とある。この歳時記の書き方は面白い。春王の後身は信乃で、正月は濱路なのだから「信乃ノ濱路」となる。「軒のつま」が犬の妻で信乃の妻濱路と言っているのだから「信乃ノ濱路」という言い方も良い。春王の後身である信乃と玉梓の後身である濱路とのつながりが今ひとつ分らなかったのだ。定包→八房→八犬士であるから春王ノ正月がないと濱路の相手に信乃を特定することができないのである。

2013/02/11

●今まで「合璧集」は続群書類従本のコピーを使っていたのだけれど、閉じる部分は文字が變形して良く分からなく

て、なんとかならないかなあと思っていたら『中世の文学』連歌論集 1 を見つけて買ったところ、当然だが写本の違いの異同がある。問題とする箇所は、

星トアラバ 天津 犬かい 連歌論集 1

星とアラハ あまつ 犬かひ 続群書類従

天津兵内が現八の前身だとしているのに、連歌論集 1 の「天津」という漢字を見るまで類従本の「あまつ」を見過ごしていた。星—犬飼だけで満足していたのだ。この短絡的に〜とのみ思い込んでしまう心理を馬琴はついてくるのだ。玉梓—八房とのみ思い込んでいる脳みそで、それに沿って考える限り「発明」はないのだ。

2013/02/08

●かかあ手束(たばね)の水髪「胡蝶」p53

ほほう手束(たつか)は手束(たばね)かと思い、いつもの如く反してみると「ねばた」になる。ネバダ州を思いついて馬鹿馬鹿しくなったが、手束(たばね)の束はたばだから手をねにすると「ねたば」になる。ねたばまでくれば、八犬伝読みならどんな痴者でも「寝刃」にたどりつくだらう。手束の名字の「井」は音読み「せい」で反すと「いせ—伊勢」になる。伊勢、寝刃とくれば『伊勢音頭恋寝刃』である。

2013/02/07

●八犬伝の管領戦は太平洋戦争の開戦日と同じ十二月八日だから覚えやすいのだが、なぜ十二月八日？とっていたが「胡蝶」を読み直して「十二月八日の吹革(ふいご)祭」に☆印をつけていたのを見て閃いた。こないだ書いた「八百八人の何曾々々」である。八百八人とは風火であり、吹革とは当に風と火である。そういうことだったのか。かと言って馬琴の「歳時記」に吹革祭はない。吹革で思い出した。木瓜八と再太郎は鍛冶屋なので、吹革火⑨140 と出てくるのは十二月八日のしこみか？

「葉草」ついでに「類船」では十一月八日だが、ググると十二月八日や四月八日に行うところもありました、とあるから馬琴にとつて吹革祭は十二月八日なのだろう。

2013/02/04

●役の行者といえど下駄なのに、前の二人の異人は草履を履いている。で、こういう時に威力を発揮するのが「八犬伝全画集」で、下駄は全部で 14 例あった。旅から旅の八犬伝で下駄が少ないのも当たり前で、そのうち 4 例は行徳であった。行徳だから下駄なのだろうか、下駄だから行徳なのだろうか。「谷山に〜」の、大が下駄なのは「妙経の〜」の真性役の行者の対としては正しい姿である。

他は毛野、船虫、犬を抱いた女の子、政木(狐)、大石憲儀、大茂林のり七である。犬を抱いた女の子は伏姫の化現としても毛野から政木はまともな女ではないという共通点が挙げられる。だから何なのか分からない。船虫—小文吾—毛野と小文吾を挟んで船虫と毛野は対なのかもしれない。と書いていて船虫毛野に毛虫がいるので「類船集」をみると毛の付合に虫がある。ちょっと気になって下野をみると下総、信濃、下野と項目が並んでいる。八犬伝で言えば小文吾、信乃、毛野で「節用集」の犬坂上野が下野に変更された理由の一つかもしれない。

2013/02/03

●遊女、女郎というキーワードが分かったのだから、「合璧集」の「粟トアラバ、女郎花、むせる、箱根山、春日野、まく、飯」が毛野であることは分かる。まくは撒くかもしれないが、毛野とのつながりを考えれば馬加(まくわり)のまくがある。粟は安房で里見とすれば『吾妻鏡』の里見と遊女の関係は「安房トアラバ女郎花」となる。

○拈下庵



花といへば名こそあだなれ女郎花なべての露に乱れやはする『源氏物語』蜻蛉

2013/02/02

●堀切 実 翻刻・『俳諧雅楽抄』<http://ci.nii.ac.jp/naid/110000210289>

道節は音楽一味だし、夏引は夏引楽で『俳諧雅楽抄』を見つけていて、手束の拈華庵の挿絵は「女郎花 かよわき姿」と言うのは『俳諧雅楽抄』からである。女郎花以外にピックアップすると、

椿：落る事を云→妙椿は玉の光に撃たれ、落ちて死んでいた。

雛：夫婦の情もよし→雛衣・角太夫婦。

梨花：底寒き心。

春の雪：根のなき事。淡雪同意也→梨花と合せて淡雪奈四郎。

夕顔：夕の字に入らべし→特に「夕」に注目すると、片仮名の「夕」でタカオになる。

七夕：古の恋を底意に持つ心。

相撲：古代めきて任侠の心あるべし→野見宿弥と当麻蹶速→小文吾と房八。

稲：富貴→犬と音通。

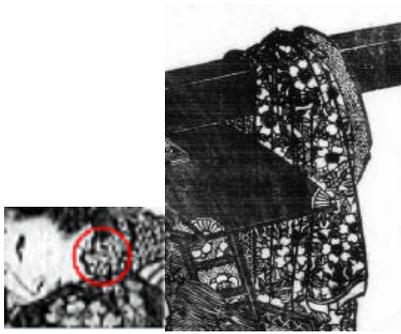
炬燵：むつまじき心→「牝を追ふて紀二郎隼助が屋根に挑む」の挿絵の番作と信乃、等がある。八犬伝の図像の読解には俳諧的な連想が不可欠で、コードブックとしての付合集がなければ下の挿絵のように図像中の要素の取り合わせはバラバラなものにしか見えない。



「いせのあま」と信乃が持つ柄杓もいかにも伊勢参りのアイテムかのように見せているが、図像は住吉詣であるとした。「修茂」「類船集」ともに蛙に住吉がある。「いせのあま」は海女の子の濱路をだすため。伊勢参りの図像とのみ思われるから図像と解釈の間にずれが生じるのだ。

●東洋文庫『幸若舞』「築島」

名月は聞こし召し、げにげにさる事のありしぞや。住吉詣のありし時、輿の先に玉章を引き結びて落とせしを



2013/01/30

●三輪正胤 西田正宏 連歌寄合集「修茂寄合」（三輪本）の研究と本文（一）<http://hdl.handle.net/10466/8841>

○あふき:かたみ、ねや、風、あまの川、かうもり、かま、はせお、タかほ、うすもの。



かたみ:大介は加多三

あまの川:七夕の夜

かうもり:黒い蝙蝠扇:「源氏」夕顔「白き扇のいたうこがしたるを」

はせお:右下の芭蕉→扇、鹿。:はせおは鹿で幕に囲まれているから「かこい→鹿恋」

タかほ:「源氏」夕顔:御まくらがみにいとをかしげなる女みて

うすもの:「作者云。この段七月の初旬なれども、出像は冬の衣装に似たり。現羅衣(うすぎぬ)は画くとも、彩なくしては定かならぬものなり。」①131 とわざわざ書くこと自体が目しるということ。どうでもいいような神宮川(かにわか)の考証も「蟹は川」というヒントだったりする。

定包がもつ白い扇が「いたうこが」されて上の扇のように黒くなったのだから、夕顔というキーワードは最初からあったことになる。



そして信乃が持つ黒い扇と濱路がもつ夕顔の団扇に引き継がれて、丁寧にもこの絵の額縁は「かうもり」である。

○荻:ふるさと、山した、はま、のき、かせ、なかは、まかき、たまつき。(「修茂寄合」)

玉梓が「願ふはわらはを赦させ給ひて、故郷こけうへ還し給はらば」①111 と突然故郷などと言うのに違和感があったが、これ

も寄合であった。「修茂」「類船集」「合璧集」（「毛吹」には萩の項目自体がない）を比較すると八犬伝に出てくる黒太字が載っているのは「修茂」であった。「修茂」は俳書目録にないが「あふぎ」「萩」の付合が八犬伝のキーワードになっているのは「修茂」であった。

「類船集」萩に萩がある。戌（じゅつ）と戌（じゅ）では意味が全く違うのに似ているから同じという八犬伝的にみれば萩と萩は同じと考えていいだろう。

2013/01/27

●駒田信二訳の『水滸伝』を読んでいるとだんだんと義務的に思えてきて嫌になってきて「桐壺源氏」ほどじゃないが何度も途中で放り投げるが、馬琴訳は面白い。読みやすいのは何故なのだろうと比べてみたら駒田訳で、段落を変えて「そのさまは云々」と詩みたいになっているところを馬琴は文章の流れに組み込んでいるので自然なのだ。訳がこなれているのは勿論ですが馬琴と思った次第。

魯智深は智深だから史進と二身一体ということか。

2013/01/26

●ふと袖珍の『新編水滸画伝』を読み始めたら話の筋も知っているのに面白く巻之二を読んでいて閃いた。一番初めに出てくるのはつい林冲と思いがちだが、高?である。犬士列伝のトップは犬塚信乃である。浮浪子弟の高?と親孝行の信乃の反対なのは分かるがなぜ信乃がトップなの?という疑念が残る。高?は穂が上手い。まりといえば金鞠だから八犬伝の連想に結びつく。で、高?。孝球=孝の珠で、高?の悪に匹敵するボリュームで信乃の孝子ぶりが描かれているということなのではないか。

2013/01/25

●八百比丘尼妙椿にしても八百比丘尼はググれば何者かくらいはすぐに分かる。しかしそれにすぐに飛びついて妙椿と若狭の八百比丘尼を結びつけてもそれは言表化されているのも同じことだ。第二百五十三回に至って「八百八人の何曾々々」の、八百は「?=風」という答えで妙椿は風比丘尼であったかと分かり、妙椿の正体の狸は野猫で虎で「風は虎に従う」から風を起す囊襲の玉を持っているのだと分かる。そして妙椿がしていることをみれば売色比丘尼であることは明らかで「遊女」というキーワードにもちゃんとハマっているのだ。言表にこだわれば八百は「?=風」とはっきりと本文に書いてあるのだから妙椿が風比丘尼であることは動かせないのである。言表することで、かえって限定的に~とのみ思わせるのが馬琴の手だということを忘れてはいけない。

2013/01/22

●八房を玉梓の後身とのみ思わせるのは世俗の臆断に宛てたのだと馬琴は言うが、そう臆断する世俗とは何者だろう。いかにも世俗の臆断に合わせて書いたかのように言うが、そのように世俗を導いているのは馬琴である。~とのみ、というからには他の選択肢があるということだ。例えば選択肢はAとBの二つあるのに、世俗はAとだけ思っている（思わせている）のだからAだけ書いておいたのだ、ということになる。つまり八房は玉梓の後身ではない、という隠れ選択肢Bがあることになる。これと同じパターンが犬士の痣がなぜ牡丹形なのかという疑問の、大による謎解きであるが、解答は、大本人が言うようにあくまで「一解」にすぎないということ。その「一解」を only one とするか one of

them とするかは読者の読み次第であろうが、only one 的視野狭窄では八犬伝ほど陳腐で面白くない読本はない。そんなもののために28年もかかったんだと思われたら馬琴が可哀想である。自分は牡丹の痣とは肇輯口絵の定包の着物の牡丹であり、富貴歓楽の象徴であって聖痕とは考えていない。消えてしまう聖痕とは何なのだ。黒い痣は犬士のもつ黒白=善悪であるとするのも「一解 one of them」である。

「例えば」と書いたが、仙童と思われている子供が言う「譬ば」とは違うということも大事だ。どこに書いたか分からないのでもう一度書いておく。「弓張月」で馬琴は、

金毘羅は、此に翻して威如王といふ。言は、この神の威勢通力、**譬ば**世間の王者、其邦内に於、能自在を得たるが如し。故に以これに名づく。(下 p255)

(崇徳院の)御霊を鎮め祀り給ひにければ、象頭山の金毘羅に配祀れりといはんも、故なきにあらず。**例せば**武蔵国神田の明神へ、平将門の霊を配祀れるが如し。(下 p 256)

と「金毘羅名号并安井金毘羅之事」という同じ文章中で寓言と挙例を明確に使い分けている。こういう馬琴が、

因とは何ぞや。**譬ば**八房が前身は、その性僻る婦人なり。

と挙例ではない「譬ば」を使ったのは何故なのか考えてみるべきである。「松染情史」に、

ところかはらず死神の、憑とは寓言かほんだはら(巻五上)

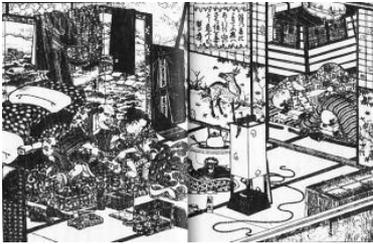
とあり、この寓言のふり仮名が「うそ」である。馬琴が寓言をどのように捉えていたかの一例になる。「譬ば」は寓言(うそ)であり「文面の仮話」なのだ。

弁財天参りの帰りの手束にまつわりついてきた「狗の子」は、伏姫が投げ手束が取り損なった珠がコロコロと狗の子のほとり転がっていったあとには「雑狗」になっている。この変化は狗の子が珠を飲み込んでしまったためにおきたのだとわかる。のちに同じく珠を飲み込んでしまったのが「雑衣」だったことから珠と雑の関係がわかる。同じ犬でも状態によって狗の子と雑犬で使い分けている馬琴が「例せば」ではなく「譬ば」と言っているのである。屋根の「のき」にしても犬と関係を持たせるときには軒=けん=犬で、関係のないときには「檐」とする細かい馬琴が「因とは何ぞや。譬ば八房が前身は、その性僻る婦人なり」と言っている意味は明らかなのだ。

虚実が重要な要素の一つである馬琴の作品なのに、八犬伝では封印したかのように「虚実」が出てこない。虚実などわざわざ断らなくても虚実はあるのだ。遊女はいつでもいるが一人も言表化などされていない。八犬伝はそれほど功妙に書かれているのだ。八犬伝は手法だけではなく、根本が俳諧と同じ精神(滑稽)なのだから、作中の虚を真に受けてはいけない。読者は虚実を見極めるのだ。見極めないから八犬伝では輪廻とか言ってるけど、作中で言ってるから分かるのは八房は玉梓の後身であるということくらいになってしまうのだ。いつまでも読みが「文面の儒教」ではビギナーズに八犬伝は本当は面白いんだよ、とどんなに言っても信用されないのである。

と書いていて雑衣は「雑(こ)衣(い)」で鯉、恋が名詮自性と思っていたがもう一つある。雑(こ)衣(きぬ)で雑犬(こいぬ)と音通であった。斬られたり切腹したり傷口から珠が飛び出てくるのも同じで、雑衣は雑犬だった信乃の飼犬と四郎とも対になる名前であった。雑衣「こきぬ」はとっくに読んでいても変なのとしか思わず、普通の「こいぬ」が思いつかないのだからオッペケである。恋や鯉も良いが雑犬という名詮自性が雑衣にはあっている。

船虫も「せんちゆう」と音読みで考えてみたが、それらしいことは浮かんでこないのを忘れていたが、遊女のキーワードで「遊女は船中の事」とあれば虫（ちゆう）は中（ちゆう）で、船虫＝船中だとわかる。



船は玉で玉虫になる。『嬉遊笑覧』の「玉虫」に、漢土に媚薬といふことあり

「本草」にも往々見ゆ。其物を貯へもてば人にめでいつくしまるとあり。玉虫も是等の意にや（下略）とある。船虫は媚薬の玉虫だから「人にめでいつくしまるる」のだ。この鹿恋の挿絵をみれば船中でも媚薬でもありだと思える。水滸の母夜叉母大虫に、似たる強盗なるべきか（第七十六回）とあるが、船虫はほとんど母夜叉こと孫二娘で出来ている。ならば何故母大虫を出してくるかという、船虫はメス虎であるということも言いたいのだ。船虫を単に海辺の海蛆とのみにしてしまうと、名詮自性は逃げ足が速いことだけで、何故これほどに悪でかつ男を手玉にとって生きて行かれるのか説明がつかないのである。

玉梓妙椿

真妙

2013/01/21

● 莊周が胡蝶の喩をもていはい、八房はおのづからなる八房にて、玉梓にハあらず。既（すでに）巳（すで）に八房が、玉梓なることをしらずハ、誰かよくこれを弁せん。

八房が玉梓の後身だとしたら、玉梓は八房に生まれ変わった時点で既に自分が玉梓であることを知らないのだから、玉梓の怨みは玉梓の怨みではなくなってしまう。そうすると玉梓の怨霊の能動的な義実に対する怨念は八房が生まれたときにすでに消えてしまったことになり、八房が玉梓の後身である意味はなくなってしまい十三回以前に妖は休んでいるはずだ。

さらに図像的にも八房はおのづからなる八房なのだから、八房に後身っているとされているはずの名札付きの玉梓の怨霊がフラフラ動き回って八房のもとに狸を連れてくることなどありえなくなってくるし、大輔渡河図に玉梓が描かれるのもおかしい。ここが「文外の話説」である。「犬夷」を読んだ人なら馬琴が言っていることには矛盾がありおかしいと思うだろうが、「文面の仮話」によって八房は玉梓の後身であると言いくるめられてしまうのである。この「既巳に」という強調を素通りしてしまう訳にはいかないだろう。まあ要するに八房は定包の後身なのだと言いたいだけだ。

● つまり、なんでも本文にこう書いてある、ああ書いてあると鵜呑みにする人は「文面の仮話」があるということを忘れてしまっているのだな。そして図像を読まない人に「文外の話説」は読めない。

2013/01/20

●本文にこう書いてあるとか登場人物がこう言っているからこうだ、と決めてかかる人のものを読むと画中の文をまったく読んでいない。それでは岩波文庫旧版を読んで八犬伝を語っているようなものだ。

それに一つの論文に玉梓の生まれ変りの八房、玉梓が憑いた八房とぶれているのをみると馬琴の呪縛の強さが分かる。生まれ変りはA→A'だけど、憑いたというのはA+Bで別物である。A+Bと言うのは本文でも挿絵でも明らかなのに、正体不明な人物がA→A'だと言うと自分の目と脳みそを信じないでA→A'を鵜呑みにしてしまうのだ。

2013/01/19

●「濱路考」をpdf版にしようとか改訂作業を始めたら難しい。元が思いつままに適当に書いていたものだったから考え方が随分変わっているし、濱路を書くということは玉梓を書くということであり、図像にしても手束とは比べ物にならないくらい存在感を持っているためだ。手束は6pで済んだけど、途中で9pになっている。ふと思えば、濱路が描かれていなくても濱路が描かれている口絵を抜かしていた。濱路は手強い。

2013/01/18

●八犬伝で「俄に」と出てくると事件が起きる前兆なのだが、だいたい自作自演の狂言である。俄かに乗馬が倒れた光弘の暗殺事件は定包の自作自演の狂言である。その時の挿絵は猿楽を想起させる要素で描かれている。馬琴にとって猿楽とは狂言一事を企んで人を騙すこと。またその企み。策謀、策略—という意味で使っているのではないだろうか。甲斐で起きた、俄かに降り出した雪のせいで足止めをくった信乃が巻き込まれた殺人事件も奈四郎と夏引の狂言であったし、殺された木工作が木工＝番匠という以外に沐猴で猿でもある。

と書いていて、第百五十八回を思い出した。内容は挿絵の「猿八友勝と猿楽して餅九郎を釣る」のままだから読めば分かるだろう。と書いていて下の挿絵を思い出すと、朴平の朴は木と普通で「もく」、無垢はむくで木工＝沐猴と普通だから同じであるということ、猿たちは定包の猿楽に乗せられたのである。そこで『新猿楽記』の七郎とつながるとのことだ。

2013/01/08 でみた旦開野登場の口上に『新猿楽記』が使われているのが最初ではなく、肇輯の段階ですでに猿楽という要素が現れていた。

馬琴が番匠や木工とか大工にこだわる理由が分からなかったが、こうして番匠→木工→沐猴→猿を見てくると、彼ら猿たちの役割が狂言回しであったことがわかる。

狂言回しとは、物語において、観客（あるいは読み手などの受け手）に物語の進行の理解を手助けするために登場する役割のこと。場合によっては物語の進行役も務める。狂言廻しとも称される。（ウィキより）

と言った人たちののだ。

●十六回の終わりまでが八犬士の前身と、番作と手束の二人でもってどういう親の元に犬士は生まれてくるのかといった因果を描いている第一部である。

2013/01/17

●七郎

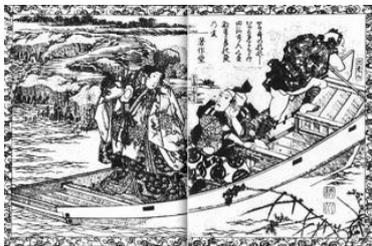


この供養塔はなに？と思っていたが『新猿楽記』の「七郎は大仏師なり。(中略)天

蓋瓔珞、蓮華の形、座光荘嚴、唐草の様(後略)」だろう。

2013/01/16

●浅妻船



これも遊女というキーワードがあればなぜ濱路姫で浅妻船なのかという疑問も解消

する。

●大学で南北朝史をやっていたせいで『梅松論』を持っていたので、結城七郎について読んだ時に、天竜川についての補注で『東関紀行』が引用されているのを見て、これは富山の蛸崎輝武を押し流した川ではないか、と思った。全文に当たらないと岩波文庫の『東関紀行・海道記』を買って、ついだから『海道記』を読んでいたら鞆口絵の大輔がいたという訳。なにかを見つけてやろうという気で読むと頭が柔軟性を失ってかえって見逃すことのほうが多い。そんなものだ。

2013/01/15

●玉梓は海棠①111 で最近引用した『海道記』の海道と普通なので「類船集」で海道をみると、遊女があった。海道＝遊女とする
と『海道記』＝『遊女記』になり、海棠＝海道＝遊女となる。ならば手束はというと「野の花」と具体的ではない。ちょっと拍子抜け
したが、拈華庵の「花」の着物が手束のものだとすれば、かえって具体的ではない「花」が良いということになる。ここで思い出す
のが鞆口絵の大輔が『海道記』の富士山であったこと。富士山を出すための『海道記』だったのではなく、『遊女
記』を出すための富士山だったのではないか。そう考えれば富士山がいつも船虫とセットになっていることも説明が
つく。

●里見と遊女

『全訳吾妻鏡』建久四年五月十五日 庚辰

藍澤の御狩り事終りて、富士野の御旅館に入御す。南面に当りて五間の仮屋を立つ。御家人同じく軒を連ぬ。狩野介
は路次に参会す。北條殿は予めその所に参候せられ、駄餉を献ぜしめたまふ。今日は齋日たるによって、御狩りなし。
終日御酒宴なり。手越・黄瀬河已下近辺の遊女群参せしめ、御前に列候す。しかうして里見の冠者義成を召し、向後は

遊君別当たるべし。ただ今すなはち彼等群集し頗る物騒なり。傍らに相卒し芸能者を撰び置き、召に随ふべきの由仰せ付けらると云々。その後遊女の事等訴論等に至るまで、義成一向にこれを執り申すと云々。

「里見八犬伝」なのだから遊女と関係があるし、富士山と遊女も関係する。

●達者の戯墨を評するに五禁あり。(第九輯卷之三十六簡端附言)

1. 所謂仮をもて真となして、備らんことを求る事
2. 評者只其理論をもて、好む所へ引つくる事
3. 作者の深意を生索にして、只其年紀などの合ざるを、見出さまく欲するは、俗に云、穴搜の類なる事
4. 前に約束ある事の、久しくなるまで結び出さざるを待かねて、催促しぬる事
5. 神異妖怪は始ありて終なく、出没不可思議なる者なり。然るを其出処来歴を、詳にせまく欲りし、其消滅して終る所の安定ならん事を求るは惑ひのみ。

作者の本意にあらざる事、大凡この五禁を知りて、よく吾戯墨を評する者あらば、そは真実の知音なるべし。

1と3がまだ世の中にいることが不思議だ。本当に八犬伝を読んでいるの？一番自分を戒めなくてはならないのが2で、手束を探っているうちに遊女が出てきたが、どんどん遊女が出てくることは「只其理論をもて、好む所へ引つ」けてしまったせいなのではないか、と思ったりする。しかし、行く先々に遊女がいるのだから好む所へ引つけてるつもりはないけど、知らず知らずのうちにそうなっているのではないか、というのは馬琴が禁じているのだから肝に銘じなければならない。遊びはルールの中でやるから楽しいのだ。



とかなんとか言っているが、この挿絵の竹の床が気になっていたのだ。寺・竹の床とかググっても分からないし、そのままにしておいたのだが、『遊女記』を読んでいて分かった。

(遊女は)上は卿相より、下は黎庶に及るまで、牀?(ゆかむしろ)に接き慈愛を施さずといふことなし。

とある。牀?に注があるのでみると「牀の上面を竹で編んで作ったもので閨房を意味する」とあった。牀?をググってみると中国語で分からないので、このページを訳す、なんてするとそれらしきことが書いてあった。好むも好まざるも手束には「遊女」というキーワードが付きものなのである。

2013/01/14

●八犬伝の俳諧的手法を考えに入れなくて典拠ばかり探しても大雑把なプロットが分かるだけでディテールは分からない。ディテールが分からないのは、美は細部に宿るを地でいった八犬伝も分からない。

●獵人に天河、富士があるのだから、肇輯口絵の大輔を獵人とみる目があれば大輔=富士の追試はもっと早かったのだ。しかし、本文で言ってないじゃないかなどと言いついたら名詮自性も普通も何もかも意味がなくなってしまうだろう。

う。泡雪奈四郎秋実が梨の花は雪のように白く、その実は秋で犬殺しなどという解説は本文のどこにも書いていないのだ。馬琴が見つけた蘆俊義、燕青の命名に見出した「名詮自性」だって水滸伝の本文でこういう意味なんですよなどと解説されてはいない。書かれていること、書かれていないことと言った硬直的縦割り行政的な考え方がおかしい。どっちもあって八犬伝である。さすがに読者は作者を超えてしまう的な読みには首をかしげるけど。

2013/01/11

●肇輯

八犬伝から読んだせいとか、美少年録の第一輯、侠客伝の第一集、巡島記の初輯のほうに以前から違和感があったが、今こうして見ると八犬伝の肇輯のほうが特別なのだと分かる。まあ八犬伝は特別だよな、と意味もなくずっと思っていたが、なんだかさっき突然「狗児仏性」なる語が浮かんだ。「趙州和尚 狗子仏性」であるが、馬琴はこれの印を見返しの絵に使っていたりする。趙州和尚の趙州は「じょうしゅう」であるが「ちょうしゅう」とも読める。犬尽しの八犬伝であるから、一や初ではなく趙州と音通の肇輯でなければならないのだ。



趙州和尚 狗子仏性

2013/01/10

●異人

役の行者の石窟参りの帰りに会った挿絵で言う異人を「役の行者の示現」と思いこんだのは従者等であった。この異人は誇り顔にものを言う。妙椿が幻術で見せた仮(にせ)異人も尊大に言示す老人であった。思ってもみよ、神変大菩薩の名札のある役の行者は人前にこのこと出てきて尊大にものをいうどころか、大輔渡河の挿絵を見なければそこにいたのかも分からない謙虚な人である。挿絵を見なければ分からないのは真の役の行者の姿なのである。

後の異人が邪と決まっているのだから、正と邪の対か邪と邪の対であるかなのだ。正邪の対とすぐに思い込んでしまうのが、全ては善悪邪正の対で成っていると馬琴が大仰に振りかざす勸善懲惡に乗せられている証拠なのではないか。

挿絵を見ると伏姫を抱いたための後の従者が紗綾形と分銅の着物である。下の夜の部分で玉つき怨霊とあるように挿絵全体が玉梓に支配されているのである。

挿絵とか書いていて図像について。

八犬伝中の図像には初版信仰は当てはまらない。この信仰を捨てるのは容易なことではないが、八犬伝に限って言えば後刷本の図像こそがあるべき姿なのだ。

●平郡といえば、役の行者の石窟参りが結願し、帰館の道すがらも泣いてばかりの伏姫がいたくむつかったのが平郡のかたへ一里ばかり来たところで、そこに現われたのが例の老人だった。ところで、蟹目前に連れられて湯島天神に参詣にきたペットの猿が社頭に着いたころ「猛可に悶騷騒ぎだしたのは、犬の毛野の存在を感じ取ったからだろう。伏姫がいたくむつかりだしたのも、玉梓の気配を感じ取ったからだということは分かる。逃げ出した猿の紐が木に絡まり動けなくなり死にそうになったのを助け

たのは犬猿の仲の犬の毛野であった。猿を伏姫、毛野を老人に置き換えると、犬猿の仲なのに助けた、つまり老人は伏姫に仁義八行の玉を授けた。毛野が猿を助けたのを契機にして蟹目前は破局に向かう。猿は蟹目前の心猿を表しているので、毛野が蟹目前を助けたことから破局に向かったのと同じことである。場所は湯島天神で、なぜ毛野と天神なのかは言うまでもないだろう。

●平郡に梓の弓、玉。

2013/01/09

●七夕に女郎は関係があるのかふと思った。女郎蜘蛛がうかび、蜘蛛はささがにで「ささがに姫」が七姫にいるから、直接ではないが女郎と七夕は結びつく。ここでまたふと女郎は「いらつめ」とも読むので、女郎、いらつめ、七夕でググったところ、平群女郎（へぐりのいらつめ）が出てきた。平群（へぐり）とは八犬伝で言えば神余光弘の居城があった平郡だ。平群と平郡とは普通なので同じで良い。滝田ばかりに注意がむくが平郡の滝田である。『万葉集』の平群女郎がどんな歌を歌ったかは関係がなく、字面が重要で女郎（いらつめ）はそのまま女郎（じょう）である。玉梓と雲は蜘蛛、分銅は蜘蛛の巣であるとしたから、平郡の女郎とは玉梓のことなのである。

2013/01/08

●以前早稲田の馬琴の蔵書にあった『新猿楽記』をプリントアウトしておいたのを思い出したので、信濃梨子を調べると馬琴所蔵本には信濃梨子又木賊とある。信濃梨子に木賊の賊があるとないではまるっきり意味合いが違ってくる。この四郎君の項の終わりは思想大系版では「故に除目の朝には、親疎を云わず、先づ尋ね求めらるる者なり」だが、馬琴版では「故除目之朝、不云親疎先被尋来一作求者也」で、大系版にはない「一作求」が加えられている。これがまた重要なので、上総の一作の出処が『新猿楽記』だとすれば、濃萩つまり大輔の母が何者なのかが浮かんでくる。

それにしても写本というのはこんなに違うものなのかと実感した次第。

●泡雪奈四郎秋実の名詮自性は繰り返さないが、では奈四郎が絡むのがなぜ信乃なのか？

信濃梨子だから。

新猿楽記
 子、廿余年より以て、東西二京を歴観るに、今夜猿楽見物許の見事は、古今に於て
 ていまだ有らず。武中に呪師・侏儒舞・田楽・徳獅子・唐舞・品工・籠鼓・八玉・山
 相撲・独六・無骨・有骨・延動大領が腰支・姫籠舎人が足仕・水上専当が取持・山
 背大領が指頭・琵琶法師が物語・千秋万歳が酒樽・籠鼓の胸骨・籠鼓舞の猿筋・福
 広聖が袈求め・妙高尼が線乞ひ、形勾当が出現・早職事が皮掛・目舞の翁体・
 巫遊の気装束・京童の虚左礼・東人の初京上り、いはむや拍子男共の気色・事取
 大徳が形勢・都て猿楽の態・嗚呼の詞は、胸を断ち頭を解かずといふことなきなり。

八犬伝五十六回
 就中、呪師・侏儒舞・
 田楽・徳獅子・唐舞・山玉・輪鼓・八玉之曲・独相撲に、独双陸・無骨有骨・延動大領之腰支・
 姫籠舎人之足仕・水上専当之取持・山背大領之指頭・琵琶法師之物語・千秋万歳之酒樽・籠鼓之
 胸骨・籠鼓舞之猿筋・福広聖之袈求・妙高尼之線乞ひ、形勾当之出現、早職事之皮掛、目舞之
 翁体・巫遊之気装束、京童之虚左礼、東人之初京上、これらは男田楽、倉宗とす所。しか
 るを又この君は、男の技にも堪能にて、懸節竹の一本立、八尋細の綱渡、これらは特に本事なり。

左は『新猿楽記』の冒頭を八犬伝で使っているところで、雑文2に載せた当時はこれで喜んでお終いだっただけ、雑文2以後の知見を加えると上の信濃梨子とかいろいろと分かってくる。特に遊女のキーワードで読むと、次の十六の女は、遊女・夜発の長者、江口・河尻の好色なり。

が面白い。
 初登場の手束は「その年は可二八」だった。猿楽記の十六は年齢のことではないが「可二八の女は遊女・夜発」という連想は上の引用部分が旦開野登場の場面で使われているところから十分にあり得る。旦開野は手束の夕顔の系譜上にいるからである。

2013/01/07

●あまりに言を詳にせば、天機を漏すのおそれあり。①217

牛に乗った子供のこの台詞によって、役の行者(と勝手に思い込んでいる)は天機が分かるんだと感心してしまうが、赤岩一角の霊がこんなことを言っている。

- あまりに天機を漏すときは、還て神の憎に逼らん。
- 人死して霊となるときは、世に在し日に優ことありて、万理に通ぜざることなし。

天機天機と言うけれど、天機は役の行者だけの十八番ではないのである。狸が玉梓の怨霊に連れてこられたように、濱路が濱路の体に乗っ取り信乃に思いを告げにきたように、牛に乗った子供は玉梓に操られて伏姫に死を促すような偉そうなことを言いきたのだ。玉梓処刑の挿絵で刀を振り上げていた男の役目を子供はしている。

幽霊の濱路も信乃と濱路(姫)が「月下に結れたる、宿因」があることを分かっている。これは玉梓であろうと「死して霊となるときは、世に在し日に優ことありて、万理に通ぜざること」がないことを物語っているのである。

全ては万理に通じた玉梓の怨霊によって仕組まれた壮大な復讐劇だったのだ。壮大な復讐劇は玉梓の遊女の系統にある旦開野(毛野)で繰り返される。

伏姫が死んだ日に、三匹の犬が死んでいる。伏姫、八房、五十子で、沼蘭、房八、親兵衛が対になっている。五十子は伏姫の

母親で、親兵衛は沼蘭の子供だが親である。八犬士の輪廻転生を考えたとき、一番若い親兵衛の前身が一番最後に死んだ者ということ、伏姫との強い関係から五十子としたが、親という字が作中で語られる親に代わってという以外に伏姫の親という意味があるだろう。

2013/01/06

●正夢と起行鹿や照射山



困まっている大輔は困(かこい)で、正夢の讚の鹿とは鹿恋。大輔が鹿恋ではないので、母の濃萩が、濃

=恋、萩=鹿、転倒して鹿恋であったということである。大輔は鹿恋(遊女)の子供であったということの意味は？

●枕



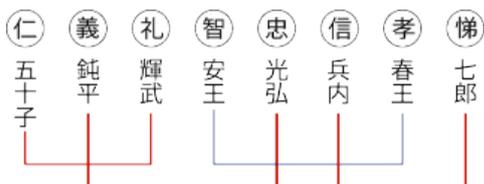
濱路の枕。これも気になっていたのだ。早稲田の古典総合データベースの「売色の詞よせなれば」という

『俳諧通言』に枕 くらぬりのもん付なり、とある。比翼莫産は枕の前の項目で、挿絵では莫産に倫子の縁取りがある。床の間掛物、花活がなぜここにあるのか、という疑問も解けた。売色の詞よせなのだ。それにしても儒教やら何やらかたっ苦しいことを言ってる裏で遊女遊女言っているのだから馬琴は面白い。



格子女郎

●輪廻関係図



2013/01/05

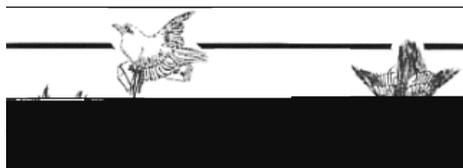
●我々はどれもが役の行者と思ひこんではないか？



神変大菩薩=役の行者と名札があるのは三枚目だけで、前の二枚とは似ても似つかない姿である。二枚は登場人物が勝手に役の行者と決めつけているのを、読者がこれまた勝手に役の行者と思いきまされているのではないか。~とのみ思わせる馬琴の手にひっかかっているのではないか。二枚目の弓、霧、手紙、老人を困っている蜘蛛の巣であろう分銅模様、毒石=玉梓を包んでいる錦の囊、実際の歴史(時代が違うが)で遊女係である里見義成が覗き見をしている背後の木目は鞞鞞口絵で玉梓が持つ琴、すべてが玉梓である。

では最初の異人が仁義八行の玉をくれたのはおかしくはないか、と考えていた。玉の文字も書状に書かれていたことも如是畜生発菩提心に変化する。つまり異人が最初に玉をくれた時から文字は如是畜生発菩提心であったのを玉梓の怨霊の力によって仁義八行に見せられていた、仁義八行→如是畜生→仁義八行と変化したように思っているが、じつは如是畜生→仁義八行の変化しかなかったのではないか。玉を首にかけられた時から伏姫は逆に玉梓に纏わりつかれたと考えると、鞞鞞口絵の玉梓と伏姫が二身一体のように描かれているのも分かる。伏姫の読経の功德によって八房が菩提心をもったとき、初めて玉の文字は仁義八行に変わったのではないだろうか。如是畜生発菩提心なんて文字の玉をもらっても、気味が悪くて首にかけるとは思わないのである。

左の「年の齡、八十あまりの翁一人、眉には八字の霜をおき、腰には梓の弓を張り、鳩の杖に携りつつ」いた翁をかかっているつもりではなく読むと、梓がすでに怪しく、弓は下で何度も考えてきたことから月であり玉である。梓弓と言うだけで玉梓だったのだ。

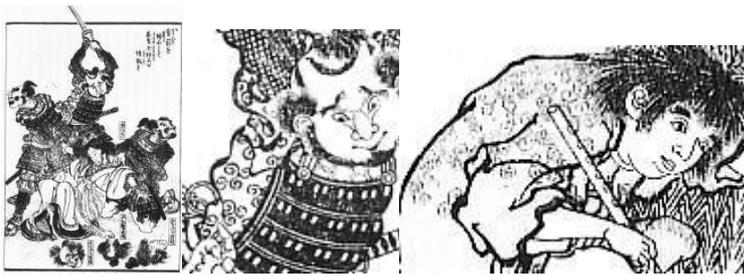


鳩だから「鈍平戸五郎便室に定包を撃」の里見が放った檄文付きの鳩だろう。本文を読まないと檄文とは分からないので、素直に手紙と見れば玉章である。挿絵中にはいない玉梓だが玉章として描かれている。鳩と玉章を一体化してみると鳩=玉章であり、翁が持つ鳩の杖も玉梓関連であり、役の行者の関係者とみられていた翁は玉梓の関係者であったと推測できるのである。

挿絵中に玉梓がいなくても、定包の着物の紗綾形と分銅でも玉梓の存在を表している。着物の模様は着ている人そのものを表しているのではない。奴隸額蔵の斧琴菊も額蔵の「良き事聞く」ではなく、琴で鞞鞞口絵の玉梓に関連させていた。

親兵衛編に登場する異人は役の行者かと里見の人々は思い込んだが、実は妙椿が幻術によって見せたものだった。ここを読むことで、伏姫→本物の役の行者、濱路姫→ニセの役の行者という反対であるという読みが強化される。作中の人物の思い込みを読者も共有させられることで、何か変な違和感を感じたまま物語はさっさと進んで行ってしまうのである。

●そうか一人一人に意味があるのではなく、挿絵全体が玉梓の属性なのか。



●妙真は猫(びょう)真で「ねこま」なのだけれど、妙真が遊女と関係あるのかと考えて転倒してみた。しんみょう。

針妙：寺で裁縫をする女。寺は女人禁制なので、この名目でひそかに妻女をおいた。

あれあれ。寺、裁縫といったら手束ですな。番作が思った梵妻賊婦というのは恐らく当たっていたのである。手束＝針妙の対として妙真も妙椿も現われてくるのだらうし、ひいては船虫、旦那野の原点なのである。それでなければ手束の人生がこんなに細かく描写される意味はないだらう。

2013/01/04

●八犬伝に出てくる牛は妓有である。対牛楼も対妓有楼。繰り返される牛と船虫という組み合わせが分かりやすい。小文吾と角太郎に船虫が絡んでくるのも、小文吾と角太郎に義実の役割がふられていることから、里見と遊女という関係から解ける。

「うし」は本人をそのまま「ぎょう」と書く訳にはいかないから、本人の代わりとして側にいる。玉梓の代わりに山下定包は「山下大人やましたうし」で、手束の代わりに蚊牛がいて、蚊牛のあとに番作が家尊の大人(うし)となり手束の側にいる。



● 紗綾形の道節が、首を切られていない濱路と思しき首を持つ。紗綾形→倫子→輪廻の道節が「亦是輪廻の致すところ」②145、「輪廻によって解ときは」②147と輪廻を繰り返す。ところがその言っている内容は「親の因果が子に報い」であり、馬琴お得意のずらしがある。道節が啜る刀と首だから斬首と読むと、首を刎ねられ梟首された女は玉梓だけだから、何故ここに玉梓が？と言うそこらへんを読者が輪廻によって解かなければならないのである。

2013/01/03

●乞巧奠

『増補 俳諧歳時記菜草』がいくら岩波文庫になっているからといっても馬琴オリジナルの『俳諧歳時記』にあたらないと痛い目

にあう。乞巧奠を葉草でみるとオ馬琴リジナルにある「唐の宮嬪」という語句が抜けているのだ。これがあれば三輯口絵「酢もあらば」「軒のつまに」が乞巧奠、つまり七夕を表しているのだとすぐに分かるくらいに重要なのに、である。宮六の名前もいろいろ考えたが、墓六が持っている濱と合わせて「宮嬪」であり、墓六の分銅繫ぎとと思っていた文様も蜘蛛の巣を表していたのだということも分かる。図像中の網目は蜘蛛の巣なのである。吉祥紋の分銅繫ぎが蜘蛛の巣なのだから道節、墓六の「紗綾形」も別の意味があるはずである。

紗綾形の初めは肇輯口絵玉梓の襟もとにチラリとあるもので鹿の子模様と一緒にある。鹿の子の衣装は鹿子衣「かこい」で遊女になる。つまりさや形も玉梓の属性を表す、紗綾形に見える何か別のものだろうと考えられるのである。

と言っても始まらないので紗綾形をググってみた。

[江戸時代には綸子の地文はほとんどが紗綾形で、これに菊・蘭などをあしらったものが紗綾形綸子として非常に多く行われていました。](#)

キタキタって感じ。綸子を「りんず」「りんこ」と読む人はアウト。子は「ね」なのだから、りんね＝輪廻である。口絵でも挿絵でも紗綾形のあるところには、おそらく輪廻転生の分かる人物がいるはずである。

分銅、紗綾形を意識して見ると肇輯口絵の大輔図は哀れになるほど玉梓に纏わりつかれているのがわかる。鉄砲を使う大輔なのに梓弓で弓を持っている。白頭巾と白帯、桐模様も、さらに女四天の紗綾形と分銅繫ぎ、刀の鞘の氷裂文とと思っていたのも蜘蛛の巣であり、これで不幸にならなければおかしいというくらいに玉梓に雁字搦めにされているのだ。伏姫は仁義八行の玉を持っているから、紗綾形もチラッとあるだけである。八郎から受け継いだのが貧乏神とは本当に大輔は哀れである。

大輔が持つ弓矢が作る台形は富士山であり、白頭巾と腰の白帯は『海道記』による富士山の雪と雲である。大輔の善悪不二を表している。



『海道記』ついでに言うと、この口絵はかぐや姫のことを書いている中の「一たび咲めば、百の媚なる。見聞の人は皆腸（はらわた）を断つ」である。伏姫の容姿についてかぐや姫に擬えていることで、伏姫と表裏のように描かれている玉梓もまたかぐや姫的であっても良いことになる。同じ『海道記』を使うことで両者を関係付けている。

『吾妻鏡』の記事にあるように、里見は遊女担当の係であるから、義実が玉梓の担当になってしまったのは必然なのである。

前に書いたことだけ乞巧奠ついでに書いておく。肇輯口絵の犬飼玄吉、犬飼が七夕関連なのは分かるとして、なぜ河童なのか。これはお尻のあたりにある亀甲模様を出したいがためである。亀甲が臀→乞巧奠という訳だ。

2013/01/02

●下の記事を書いたあとにまた「歳時記」を眺めていたら面白いことに気付いた。

牛女 二星の名を上略せしなり。

とあり牛女に「たなばた」と振り仮名がある。何度もみてきたように牛は遊女だから、七夕は遊女ということになる。これでなぜ

七夕の夜に玉梓が出てきたか、濃菽の息子の犬輔も七夕の夜に現われたのかが分かる。二人とも遊女なのだ。

そして手束。たなばたばたであるから手束は牛女で遊女になる。これだけ遊女が出てきても、馬琴の遊女への関心の高さから当然のように思える。

●正月恒例の第一回を読む。もう何か分かることはないんじゃないかと思っていたが、竜の講釈にあった。獅子は竜の八番目の子供というのは今さらいうことではない。第二の子囚牛である。竜を八犬士に当てはめようと考えていたから、囚われた牛とは小文吾のことかなとか、竜のことを語っているのだから囚われた玉梓ことかなとかチラリと思っていた。そこで囚牛は「音(なりもの)を好むものなり。琴鼓の飾のこれを付く」である。音楽一味の道節たちかとも思ったが、肇輯口絵の玉梓が持つ琴は玉梓自身を表しているのだから囚牛と結びつけてもおかしくはない。これに最近の遊女の知見を加えると、牛は妓女(遊女)であるから「囚われた遊女」とは玉梓と考えても良いだろう。



この二枚はセットでみるべき。

琴は筑紫琴で、袖の鸞と合わせて天神。と書いていてふと「硯 学問の神様」とググってみた。

硯洗(すずりあらい)とは、七夕を迎える準備として旧暦七月六日に行われる行事。初秋の季語。学問の上達を祈る行事で、子供達が普段の手習いの道具を洗い清めて日ごろの労に報いる。手習いの道具は、硯に限らず筆や机なども含まれる。学問の神として知られる天神にまつわる行事であり、洗い清めた硯に梶の葉を添えて供えた北野天満宮(京都府)の神事がその原型であるとされる。

硯、筆、机で



この口絵的挿絵がすぐにおもいうかばなかったとしたら、八犬伝の面白さは分からないから読むのはやめたほうがいい。この挿絵の読みについては何度も書いてるので繰り返さない。

ググったことだけを書いても、馬琴が硯洗とか机洗いを知らなければ意味はないので、馬琴の「歳時記」をみると、机あらひ、硯洗の項目があった。

硯と墨が定包の前にあるから定包と組み合わされているとの思い込みがいけなかった。墨と天神のつながりを知らなかったために、梅模様の鞍を乗せた黒馬は磨墨で良いものを黒牛は天神つながりだから、馬に見えても実は牛などと強弁してしまった。～に見えても～というのは八犬伝を考えるうえで大事だが、磨墨が答えとしてあるのだから黒馬は磨

墨で良いのだ。墨が玉梓と結び付くのは、肇輯口絵の玉梓の着物が墨染桜であることから分かる。

深草の野辺の桜し心あらば今年ばかりは墨染めに咲け、これは古今和歌集にある上野岑雄の歌で、深草が三輯口絵「軒のつまにあはびの貝のかたおもひ も々夜つられし雪のしたくさ」が深草の少将とリンクしている。玉梓を調べていくと自然と濱路のことになっていき、「源氏」夕顔の「しろき扇のいたうこがしたる」から連歌の「薫物といふ句にこがると付」けてで輪廻を表していく馬琴のイメージの豊饒さには正月早々から感嘆してしまった。本文だけでは分からない（玉梓と濱路が同じことを云うのでなんとなく分かるが、駄目押しになる）図像を読む醍醐味がここにある。

2013/01/01

[newpage2.html へのリンク](#)